731部隊
ネズミ村と
高校生が追う

埼玉県立庄和高校地理歴史研究部＋遠藤光司（同高校教諭）

教育史料出版会

高校生が追う
ネズミ村と731部隊

埼玉県立庄和高校地理歴史研究部＋遠藤光司（同高校教諭）

教育史料出版会

はじめに

七三一部隊は一九三八年、ハルビン郊外の平房（ピンファン）地区に建設される。その隊長は石井四郎軍医中将、七三一部隊は通称石井部隊とも呼ばれた。表向きの顔は防疫給水を任務としていたが、その実態は細菌戦部隊だった。

七三一部隊の犯罪は二つあった。一つは無実の中国人を「マルタ」と呼び、人体実験を行ったこと。そこでは、ペスト菌注入実験をはじめ、凍傷実験、梅毒実験、真空実験、乾燥実験（人のミイラ化）、全採血（血を全部抜き取る）、毒ガス実験、生体解剖実験など、ありとあらゆる人体実験が行われた。ナチスのアウシュビッツと並ぶその非人道的行為は、すでに森村誠一『悪魔の飽食』、常石敬一『消えた細菌戦部隊』等で明らかにされている。

もう一つの犯罪は細菌戦を行ったことである。七三一部隊がたどりついた最終細菌兵器はペストノミ弾だった。ペストノミを作るには、ネズミにペスト菌を注射し、発病したネズミの血をノミに吸わせる。大量のペストノミを生産するには大量のネズミが必要だった。いまも七三一部隊

の遺跡には巨大なネズミ飼育場が残っている。
　ところが、七三一部隊は「ネズミ不足」に苦慮していた。「三〇〇万匹増産計画」なる奇妙な作戦を立て、中国民衆にネズミ捕獲を強制した。満州では大の大人がネズミ取りに狂奔する異様な光景が現出した。東京では参謀本部の将校たちが真剣にネズミの増産に悩んでいた。彼らの記録を読むと、「ネズミ不足」は細菌戦実行への最大のブレーキだったことが分かる。読者のなかには、「ネズミなんぞになにを大袈裟な」と思っている方もいるだろう。だが本書を読めば、これが日本陸軍にとって決して小さな問題ではなかったことを納得されると思う。
　ところで、増産計画の中心は埼玉県の春日部、庄和などの古くからのネズミ生産地だった。ネズミは内地から満州へ空輸されていたのだ。私たちの町では戦時中、どこの家でもネズミを飼っていた。私の父も、生徒の家族も飼育者だった。飼育のノウハウを知っている地域でなければ、この急場は凌げなかった。七三一部隊の「ネズミ不足」に応えて、私たちの町のネズミ生産は爆発的に拡大する。それは、満州がネズミ取りに明け暮れたのと同時期のできごとだった。
　もう一つ、七三一部隊の歴史で忘れてはならない戦犯免責の問題とも、埼玉のネズミは深くかかわっている。石井四郎がGHQと取引をし戦犯訴追を免れた時期、GHQは石井からネズミの生産ルートをも引き継いだ。戦後、埼玉のネズミはGHQに納められる。七三一部隊の「研究成果」を継承したとされる、米軍細菌戦部隊四〇六部隊である。四〇六部隊が朝鮮戦争で細菌戦を

実行したといわれる年、私たちの地域は五〇万匹ものネズミを四〇六部隊に送っている。

ネズミ飼育は特殊な産業で、生産地は埼玉と岐阜くらい。戦時期には埼玉が全国の七割を占めていた。ミカン箱程度の飼育箱にオス一匹、メス五匹を入れ繁殖させる。「ネズミ算式」に増える子ネズミを、「ネズミ屋」と呼ばれる仲買人が買いにくる。貧しい小作人の多かったこの地域では、ネズミ飼育は副業として歓迎された。

本書はネズミをテーマにして、生産者の農民、それを輸送しつづけたネズミ屋、ネズミを使った七三一部隊員、そして家族を殺された中国人遺族を取材した高校生の活動をまとめたものである。埼玉県立庄和高校地理歴史研究部の生徒は一九九四年一〇月から翌七月にかけて、飼育農家を中心に一〇〇〇軒をこえる聞き取りをし、自分たちの町にとってネズミとは何だったのかを考えてきた。農民は誰一人としてネズミの真の用途を知らなかった。彼らは自らの知らぬうちに細菌戦の歯車に組み込まれていったのだ。

生徒の家族も飼育者だった。これは他人事ですむ歴史調査ではなく、自分たちの問題なのである。従って本書は、研究報告であると同時に高校生の活動の記録でもある。本書で「私たち」と表現する場合、それは教師である私と共同研究者である生徒とを意味する。

調査はスンナリいったわけではない。医学のためのネズミだったと思っている善意の農民に、生徒は七三一部隊の罪業とネズミの用途を説明してからアンケートを取った。「もし知っていて

も飼ったか」と全農民に聞きまわった。これは加害の歴史である。証言者にとって生徒はありがたい訪問者ではなかった。とくにネズミ屋からはしばしば激しい非難を受けた。ショックで聞き取りができなくなる生徒もいた。「なぜ、学校があんな調査をしてるんだ」という抗議の電話があったり、「身辺に気を付けろ。生徒共に」という脅迫状が来たりした。

「証言しない」人々の非難に生徒が耐えられたのは、「証言する」人々の姿を見てきたからである。私は、なるべく多く七三一部隊の証言者を取材するように生徒に勧めた。慚愧（ざんき）のなかから証言する勇気ある姿に、この調査が人間の生き方を学ぶ作業であることを生徒は感じとった。

九五年七月、戦後五〇年を機に、ハルビンで「七三一部隊国際シンポジウム」が開催された。研究を発表した生徒は中国側の圧倒的な歓迎を受けた。私たちの研究は、被害を受けた中国の人々に聞いてもらってはじめて完結するものである。生徒は発表だけでなく、中国でも積極的に被害者の聞き取りを行った。なかでも七三一部隊の白ネズミで家族を亡くした靖福和（チンフーホー）さんとの出会いは大きかった。

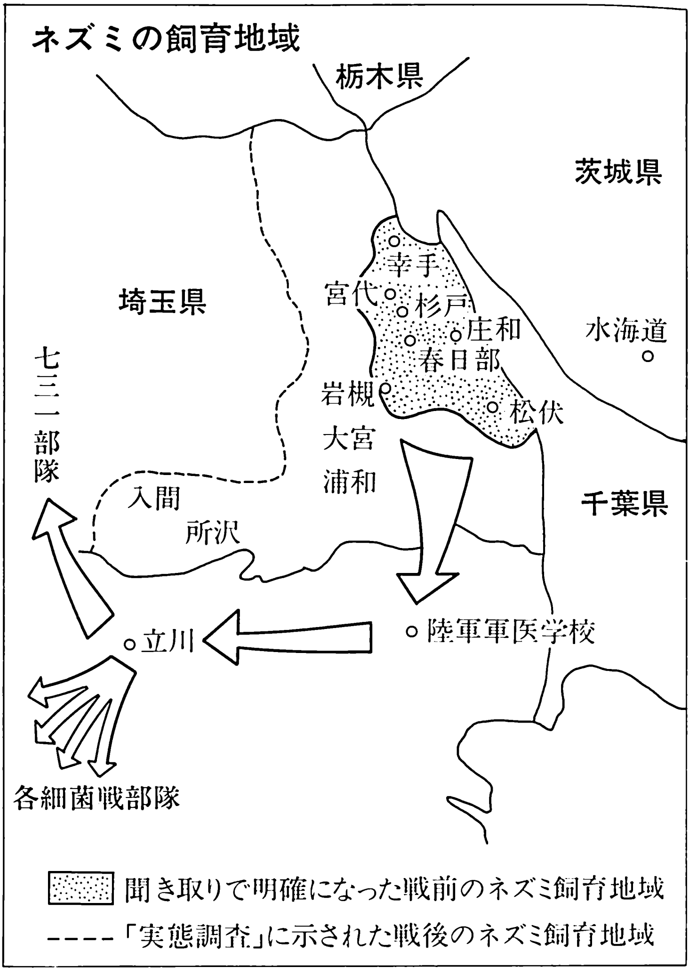
生徒は靖さんと一つの約束をしたようだ。七三一部隊の真実を日本の若者に伝えるという約束。ハルビンの高校生と交流をもったときも、日中の高校生の戦争認識の隔たりに驚き、中国の高校生の気持ちを伝えようと誓った。いま生徒は、歴史を調べるだけではダメだ、人々に伝えなくては意味がないと思っている。さまざまな集会に積極的に参加し、私たちの町のネズミの歴史を報

告している。生徒のこの活動は、徐々にではあるが地域の大人たちの意識を変えている。本書はその活動の集大成であり、七三一部隊の真実を伝えるための、最大の武器となるだろう。

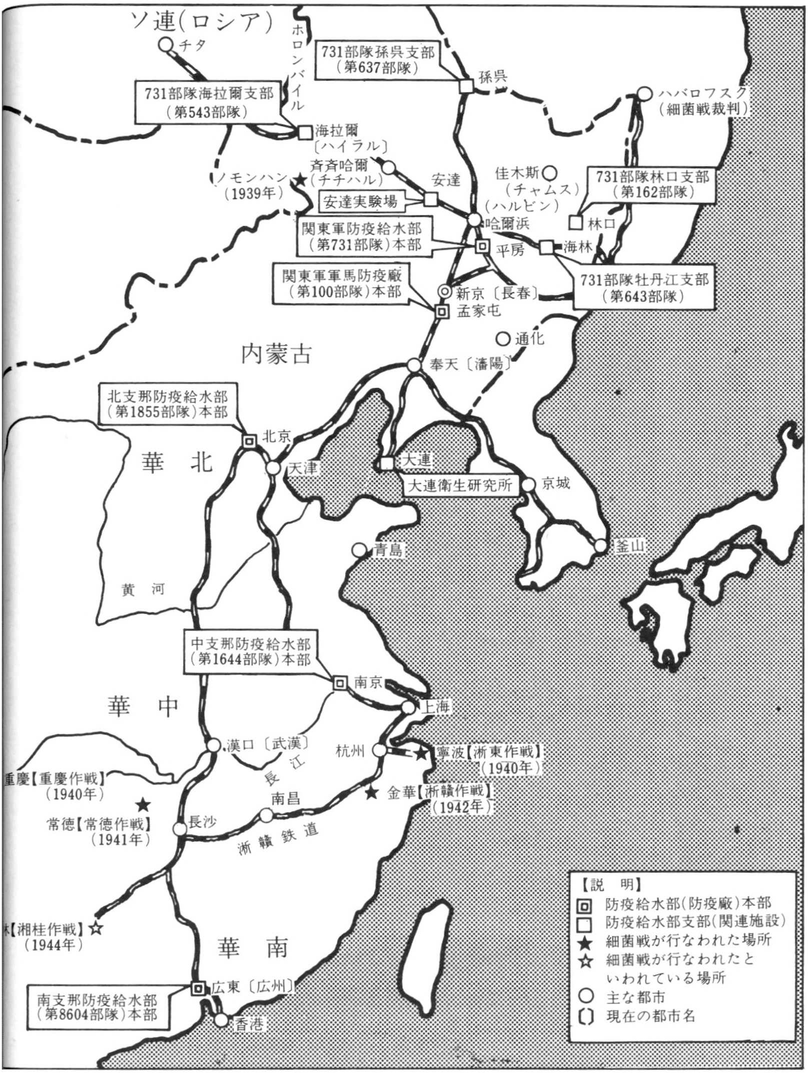
なお、本書は地歴部の生徒諸君が作成した報告書『ネズミと戦争』（一九九五年一〇月発行）をもとに、最終的に私（遠藤）がまとめたものである。従って文責はすべて私にあるが、この書物はあくまで私と生徒の共同作業のすえ誕生したものだ。本書の著者が私と庄和高校地歴部の連名になっている理由である。

目　次

[Ⅱ]ネズミが支えた七三一部隊



(明石書店『日本軍の細菌戦・毒ガス戦』より)



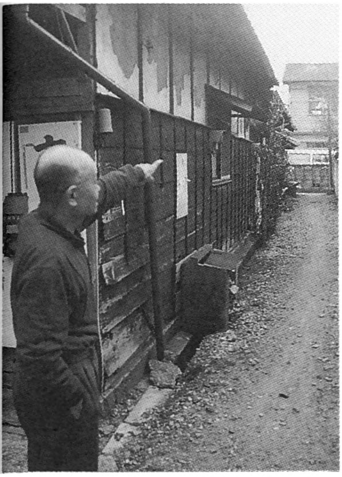
中国における細菌戦関係地図(木下健蔵著『消された秘密戦研究所』より)

［I］

ネズミ村を発掘する



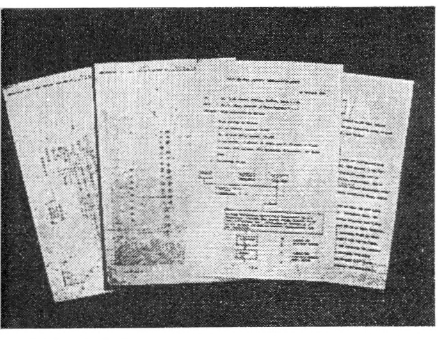
「川辺村ネズミ生産組合」の設立者・田口新吉さんを訪ねて／左・高屋敷　右・野沢



向こうが「埼玉県医科学試験動物生産組合」だった建物、手前が事務室



春日部市のある飼育者の納屋にいまも山積みに捨て置かれている飼育箱



農家からのネズミの提供を裏づけるGHQの文書



九五年八月一日、ハルビンで開かれた日中合同の七三一部隊国際シンポジウムで発表する野沢（中央）

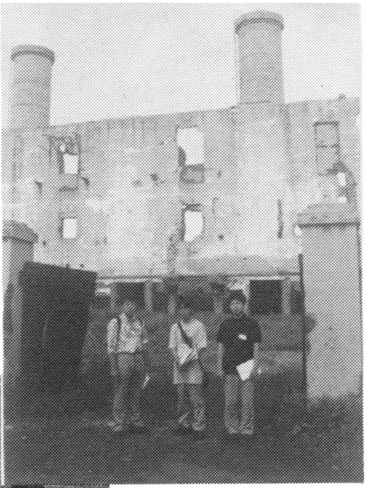




靖福和さんから手帳をプレゼントされる野沢、その後ろが小谷中／上がプレゼントされた手帳



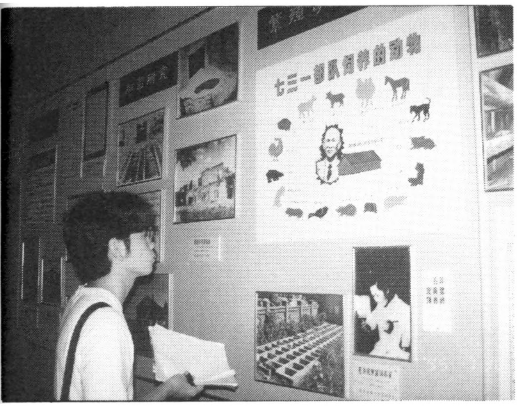
ハルビンの高校生と戦争について話し合う／中央が張さん、右へ黄さん、竜さん、安君



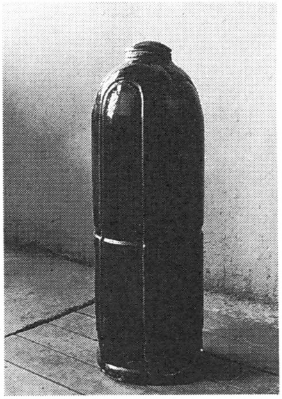
七三一部隊を象徴する平房の
ボイラー室跡を訪ねて／左か
ら藤谷、野沢、小谷中



平房にいまも残る小動物実験室



七三一部隊罪証陳列館には実験動物のパネルもあった



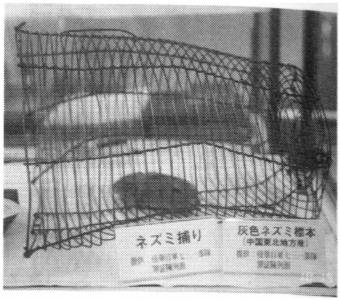
ペストノミを詰めた
陶器製の宇治式爆弾

（『731部隊展 1993.7－94.12』より）

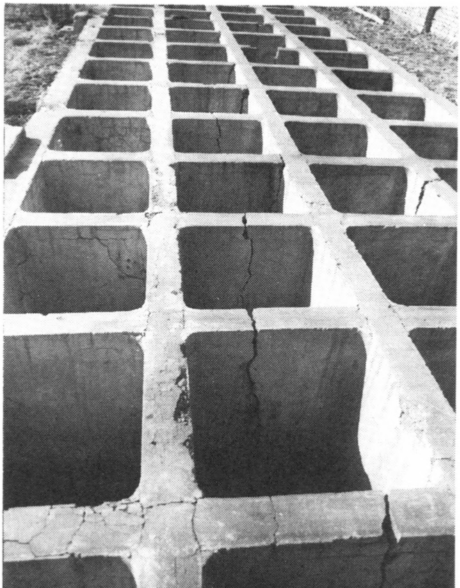


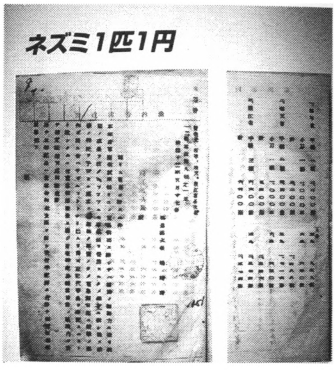
「マルタ」を収容していた
日本領事館(現花園旅社)

ネズミと捕獲器
(七三一部隊展展示品より)



平房の七三一部隊ネズミ飼育場





中国民衆をネズミ捕獲にかりたてた
七三一部隊と中国興農部との契約書
(七三一部隊展パネルより)

1. あるネズミ村の歴史

□初めての聞き取り

埼玉県立庄和高校地歴部が初めてネズミの聞き取りをしたのは、もう七年もまえの一九八九年のことである。そのときは庄和町の戦争の歴史の一つとして、試みにやってみる、という感じだった。この調査は町にとってありがたい話ではない。町中があの忌まわしい七三一部隊の加担者であったことなど、誰もほじくり返してほしくはないだろう。七年前には、七三一部隊との関連には触れずに、農家に聞き取りをした。七三一部隊について触れれば飼育農家は話をしてくれなくなるだろう。「あの学校は変なことを調べている」というウワサが立てば、それで調査は終わりである。町の支持を得られない調査は、高校の部活動のテーマとしてはかなりキツイ。目的を伏せても情報を集めるほうが先決だと考えたからだ。いま思えばこんなことはするべきではな

かった。後ろめたい嫌な気分だった。

「なんでネズミなんか調べてんの」と怪訝な顔をされ、相手にされない場合が多かった。世代が代わり自分の家でネズミを飼っていたことを知らない家も多い。生徒がしつこく聞くと、なにか因縁でもつけられていると勘違いし「ネズミなんか飼ってない、ふざけるな」と怒鳴り散らす家もあった。私も一度、値段のことばかり聞いたので税務署の回し者と勘違いされた（農家はネズミの収入を脱税していた）。結局「ネズミを飼っていた」という事実以上のことは聞けなかった。

ネズミの問題を知ったのは田口新吉さんからだった。彼は庄和町でネズミ生産組合を設立した人である。田口さんは町の歴史に詳しく、郷土史の研究をしている私は昔からの知り合いだった。以前彼がＣＩＤ（米国陸軍技術情報部）に勤めていたとき、そこで偶然七三一部隊とネズミの関連を知った。その情報を森村誠一氏に知らせ、『続悪魔の飽食』に庄和町は「ラッテマウスの故郷村」として紹介されることになる。この本はベストセラーになったので、町の人々はこの問題に過敏になっているのではないかと思っていた。しかし調査を進めていくと、実際には飼育農家はこの本のことをほとんど知らなかった。

しかし何より調査のテーマとして満足できなかったのは、全体像がつかめなかったことである。飼育地域はどこまでで、何軒の農家がどれだけのネズミを生産したのか。飼育はいつから始まり、生産量はどう変化したのか。ネズミはいくらで取引され、集荷ルートはどうなっていたのか。具

体的な数字は何一つはっきりしなかった。

そこで私たちは、この調査を一週間で打ち切ってしまった。もしこれを仮に一年間やったとしても、何かを見いだせる自信はなかった。生徒にとっては一度きりのテーマである。一年間を費やした結果「失敗だったね」で終わるわけにはいかない。それでこの年は町の軍需工場などの調査を発表し、ネズミについてはおまけ程度の扱いで終わった。

それから五年の歳月が流れた。その間私は町の文化財保護専門委員として歴史調査にも参加し、自治体との関係も深くなってきた。だが加害、加担の歴史の解明は自治体史では困難なのが現状である。トラブルの起きそうなテーマに、自治体はあえて取り組もうとはしない。しかし、誰かが「ネズミの問題」を調査すべきではないか。それなのにどこにもその調査をやる人がいない。自治体史が怖がる加害のテーマを高校生とやってみたい、という気持ちは募っていった。

■ＧＨＱ文書の発見

やれる、と思ったのはＧＨＱ文書を発見したときだった。

国立国会図書館憲政資料室には、アメリカから返還された膨大なＧＨＱ文書がマイクロフィルムになっている。当時は軍需工場の調査が目的で、一九九四年夏、私はここに通っていた。一八歳未満お断り、といういかがわしい場所と同じ入場制限があるため、生徒は入れないのだ。すで

に埼玉県が目録を作っているので、それに従い県関係のGHQ文書をピックアップしていく。その過程で、GHQによるネズミ生産者の調査報告文書を偶然発見したのである。

この文書には、飼育農家が六〇〇〇軒もあったこと、集荷ルートから中間業者の利益、生産量から納入先まで詳しく書かれていた。地域のネズミ生産の概略がつかめる内容である（第II部3章で詳述）。地元ではネズミの収入は申告されておらず、自治体や農協にも関連資料はなにひとつ発見されていない。史料不足がネズミ調査に歯止めをかけていた最大の理由だった。だから、このGHQ文書の発見は大きかった。この内容と農家の聞き取りをタイアップさせれば形になるだろうと思われた。

私は生徒に話してみた。五年前の調査が失敗したこと。GHQ文書がかなり使える史料であること。七三一部隊の歴史が謎に包まれていること。加害責任の調査は日本人として逃れられない課題であること。妨害などの困難が予想されること。でもこうしたテーマが地域にあることはまれであり、歴史を学ぶ者としてはチャンスであることなど。このときの生徒は一年間がかりで東京大空襲の調査をしており、被害だけの歴史認識は一面的であることに気づいていた。空襲の調査で早乙女勝元氏を訪ねたときも、加害の問題にずいぶん話が及んだ。ネズミ調査の重要性を生徒はすぐに察知した。

でもそのときは、右翼の脅迫状まで覚悟をしていたわけではない。「ネズミは大嫌いなのに、

困ったな」「ネズミの調査なんてカッコワルイ」などと減らず口をたたいていたのである。六人の部員は、特別な気負いもなく、いつものノリで始めたのだ。三年が小谷中政樹、野沢丈二、高屋敷直人、二年が藤谷元文、阿部義仁、一年が桑名知美の六人。学年の数と部員数が一致する先細りの構成だ。桑名以外は男子。だが声は桑名がいちばん大きい。性格はそれぞれだが、素直なところが共通している。

地歴部の顧問をして一〇年、部員がいつも素直だったわけではない。私はいいかげんな部員の態度に、いくども激怒してきた。戦争体験を語る古老を前にヘラヘラ笑っている者。話に興味がなくても、もし彼に人の原体験の恐ろしさを感知する能力があれば、うわべだけでも「恐縮」したはずである。聞き取りにいくふりをして遊んでいる者。ウソの報告をする者など、「調査」の名に価しないレベルの活動も多かった。昔は歴史研究というより、生徒指導の日々だった。顧問と部員の意識のギャップは歴史クラブ永遠の悩みだが、今年のメンバーはたった六人でも最高だった。ネズミ調査がここまでこれたのは生徒に恵まれたからだ。

ネズミ調査がこの年のテーマに決定した。だが、私たちには最初に解決しなければならない難問があった。また、あの後味の悪い、目的を伏せた聞き取りをやるのか、それとも七三一部隊とネズミの関連を説明してまわり、町の嫌われ者になるのか。聞き取りに入るまえに、この二者択一の問題を解決しなくてはならない。しかし答えは簡単には出なかった。

結論からいえば、生徒たちは七三一部隊の説明を「せざるをえないハメ」になった。GHQ文書の発見が新聞にデカデカと出てしまったのである。むろん私の実名も出ている。これでは隠しても意味がない。私は生徒にニガ笑いした。「どっちを選ぶのだ」と生徒に迫っている最中に、新聞社にしゃべっていたのは誰あろう、この私だったのだから。私から掲載依頼したわけではないのだが、生徒に対しては立場を失うことになった。

だが結果的には、このヘマが大きな転機になった。生徒たちはふっきれて、一〇月、町に出ていった。そこには五年前の自信のない聞き取りとまったく違う聞き取りが待っていた。調査の目的を最初に言うことで、証言者は生徒の意図を理解できる。七三一部隊の話は知らなくても、飼育農家はそれぞれの戦争体験を語る流れになる。それは生徒の学習や調査全体の活気という点で大きなプラスだった。この狭い町にもさまざまな戦争体験があった。目的を明示するという堂々とした姿勢は、こうした証言を受け止める自信にもなっていった。

□七三一部隊展で

GHQ文書の発見や新聞報道のほかにも、生徒が調査に入る内的な「できごと」があった。それは生徒とある中国人証言者との出会いだった。その出会いこそが一年間の調査の原動力となったのである。生徒とその中国人証言者との交流は4章で詳述するが、ここではその「出会い」だ

けを紹介したい。
一九九四年一〇月、浦和市で開催された「七三一部隊展・埼玉」に私は生徒と出かけた。一九八九年、新宿区の陸軍軍医学校跡地から、生体解剖の痕跡の残る人骨が一〇〇体発見された。それは現在七三一部隊の「マルタ」のものと考えられているが、新宿区はその骨の焼却処分を企てている。「七三一部隊展」はこの暴挙を阻止する目的で始まった。一九九三年三月東京新宿を皮切りに全国を縦断し、すでに二四万人以上の人々を動員している。七三一部隊展は地元の市民グループが独自に企画運営する方式で、全国的な大成功を収めていた。その「七三一部隊展」が来ていると知り、調査を始めたばかりの生徒は、中間テスト中にもかかわらず浦和を訪ねた。まだ『悪魔の飽食』を読んだ程度の知識しかなかった。
部隊展には、ペストノミを詰め込む陶器製の宇治式爆弾や、米軍が朝鮮戦争で使用した細菌爆弾が展示されていた。人体実験の模型も生々しい。ネズミに関するパネルや展示もあった。満州で強制されたネズミ取りの道具や、その獲物のネズミの剝製まであった。生徒は自分たちのテーマであるネズミ関連の展示を見て少しほっとした。そのころはまだ、ネズミが七三一部隊にとってどれほど重要なものか確信できていなかった。ネズミの調査なんてみっともない、という気持ちがどこかにあった。生徒は展示品をひととおりまわり、シンポジウム主催の集会に参加した。
その集会で、生徒は初めて中国人証言者の話を聞くことになる。靖福和(チンフーホー)さん、六一歳。部隊展

実行委の招きで、自らの体験を証言するために日本に来ていた。終戦直後、七三一部隊は証拠隠滅のため部隊を爆破、そのさい生きたペストネズミを放った。ネズミは近隣の村を襲い、ペストが蔓延。靖さんの村、後二道溝村（ホウアールタオコウソン）は、七三一部隊のあったハルビン郊外の平房（ピンファン）にもっとも近かった。靖さんの村は住民一五〇人のうち五〇人近くが亡くなった。さほど広くない会場で、靖さんはその体験を語っていた。熱が入ると、かなり激しい口調で戦争中の日本人の非道を非難した。

「わたしが一一歳のときだった。村ではペストが大流行し、私の家族も父、姉、弟とつぎつぎに死んでいった。家にはオンドルが二つしかなく、一つのオンドルで母が父の看病をし、もう一つのオンドルで私が弟の看病をした。私もペストに感染していた。姉の面倒をつきっきりで看てあげる人がいなかった。もがき苦しむ弟を夢中で看病していた。ふと気づくと、姉は死んでいた。いつ姉が死んだのか分からなかった。姉は首が腫れて、頭と同じくらいの大きさになっていた。声が出せなくなり、家族の誰にも気づかれず、たった一人で死んでいった。その後、弟が黒い水のようなものを吐いて、そのまま死んでしまった。私は助かったが、一九人の大家族のうち一二人が死んだ。靖一家は全滅したといううわさが流れた。そのとき私は、それまで見たこともない大量の白ネズミを見た。ネズミの大群が村にやってきてペストが流行（はや）った。私は見たこともない白ネズミが珍しくて捕まえたりした。七三一部隊で働いていた中国人が、この白ネズミは七三一部隊のものだと話していた」

七三一部隊の犯罪は戦時中の「マルタ」の虐殺だけではなかった。靖さんの村は戦争が終わってからも、七三一部隊によるペスト禍と戦わねばならなかった。だが生徒がそれ以上に驚いたのは、靖さんの口から何度も「白ネズミ」という言葉が発せられたことである。靖さんは「白ネズミの大群が村にやってきてペストが流行した」ことを強調していた。白ネズミが靖さんの家族を奪ったのだ。ネズミ調査を始めたばかりの生徒は、初めて会う中国人被害者から、いきなり「白ネズミの恐怖」を聞かされたのである。

靖さんの話を聞きながら、私たちはその白ネズミがこの埼玉から送られたものではなかったか、と思わずにはいられなかった。あのかわいい白ネズミが、靖さんにとっては悪魔の使いに変身していたのである。白ネズミは自然界には存在しない生物である。七三一部隊の白ネズミは日本から送られていた。そして当時、ネズミの生産地は埼玉しかなかった。靖さんの口から「白ネズミ」という言葉が出るたび、私は恐ろしくなった。憎い白ネズミの生産地がこの埼玉であることを知らずに、靖さんはその埼玉で白ネズミの話をしている。なんという歴史の皮肉であろうか。

生徒はまだ、ネズミ飼育者にも元七三一部隊員にも聞き取りをしていない段階だった。「これから調査を始めよう」という矢先に、白ネズミの惨劇を突き付けられたのである。そのとき生徒はまだ、この問題にリアリティを感じていなかった。靖さんの話は生徒を突き動かす衝撃になった。白ネズミが、私たちの町から靖さんの村に行くまでの「空白」を、生徒は研究によって埋め

なければならない。こうして生徒の問題意識は「始まった」のである。

靖さんの話が終わったとき、生徒は私の顔をのぞき込んだ。突然、白ネズミの重要証言者に出会って戸惑っている。「白ネズミの話をさっきの証言者からもっと聞きたい」とその目は語っている。中国人の取材なんてしたことない。心の準備もできていない。ネズミの調査も始めたばかり、という引け目もある。しかも靖さんは忙しそうだし、私たちは中国語ができない。そのときは実行委の人と面識もなかった。まごまごしているうちに靖さんはいなくなってしまった。

翌日、靖さんの話題になった。白ネズミの話は衝撃だった。靖さんの村を襲った白ネズミが私たちの町で生産されていた事実を、靖さんにどうしても伝えなければならない。それをやらずに私たちはこの調査を進める資格があるだろうか。この機を逃したら二度と靖さんに会えないだろう。靖さんは七三一部隊の被害者のなかでも私たちにとって特別な人である。彼は「白ネズミがやってきてペストが流行した」と言いきっている。この事実は私たちのネズミ調査にとって避けられない重みになるはずだ。誰よりも白ネズミの恐怖を訴えてきた靖さんがいま、この埼玉にいる。まだ間に合う。

次の日だったろうか。私は七三一部隊展実行委の方に電話し、靖さんに会いたい旨を伝えた。その方は加藤久美子さんという、浦和の部隊展を推進した人だった。「もう埼玉にはいません。でも探してみます」。靖さんに会えそうだ。生徒の胸は高鳴った。しかし加藤さんからきた返事は

「ついさっき中国に発ってしまったそうです。残念でした」だった。こうして生徒は靖さんの体験を胸に刻んだまま、ネズミ調査を始めることになった。

□もし知っていたら飼育したか

聞き取りにまわってみると、農家の人たちは意外に『悪魔の飽食』もGHQ文書発見を報じる新聞も読んでいなかった。読んだ人は、ごくごく少数だった。従って生徒は、七三一部隊の罪業と「あなたの飼っていたネズミがそれに使われた」ことを、飼育農家に初めて明かす役割を担った。驚く人、平気な人、否定する人や反論する人、反応はさまざまだった。

調査範囲は庄和町全域と、比較の意味で隣接する春日部、越谷、松伏、杉戸の一地域を対象にした。初めは二人一組だったが、それではまわりきれないことが分かり、途中から一人での調査に切り換えた。もともと聞き取り自体が楽な作業ではない。知らない家に飛び込みで入るのだ。むこうにとっては突然の訪問者だ。三軒も断られたらイヤになる。仮に応じてくれても、話はネズミである。内容が複雑なうえに、相手の顔色も気にかかる。ようやくネズミの話が通じて、そこからがやっと本当の聞き取りである。見たことのないものを話だけから理解するのは、相当な労力が必要だ。夕方に出発して、三軒聞いたらもうヘトヘトになる。一人ぼっちがさみしい。たった六人で、それを一〇〇〇軒やった。聞き取りとミーティングを、何度くり返しただろう。

生徒は聞き取りのために統一のアンケート用紙を作った。質問項目前半は飼育期間、飼育規模、副業としての価値、ネズミの値段、仲買人との関係などの基本項目。後半は「戦争をどう思うか」「細菌戦をどう思うか」「飼育農家に責任はあるか」「中国に謝罪すべきか」などの意識調査である。後半の質問はあまりしたくない。初対面の相手にこんなことを聞けば雰囲気が悪くなる。「日本はそんなことやってねえ」と言い張る人がいた。「責任なんてなまいき言うんじゃねえ」とどやされたこともある。後半の質問ができないで帰ってくる日が続いた。

だがこの質問は、私たちの基本姿勢にかかわるものだった。七三一部隊の説明をしっかりしたあとで、その人の戦争観を聞かねばならない。もしこの質問から逃げたら、私たちのしていることは単なる学術調査のまねごとになってしまう。「私たちの町にとってネズミとは何だったのか」。それに答えるためには「飼育者自身がどう考えたか」を調べるのは必須条件だった。

それでも、飼育農家がいつも冷たかったわけではない。生徒の質問に感激し「二度と戦争を起こしてはいけない」と熱っぽく語ってくれた人もいた。一進一退だった。

生徒はアンケートの最後に「もし知っていたら飼育したか」という項目を入れた。この質問だけは必ずすることにした。農家は誰ひとり、ネズミと細菌戦について知らなかった。でもそれによって中国の人々が殺されたのは事実なのだ。彼らは知らず知らずのうちに細菌戦に加担していたのである。この調査を始めたとき、生徒は「知らなかったんだから仕方ないんじゃないか」と

思っていた。だが調査を進めるなかで「知らなかった」ことこそが問題なんだと考えるようになった。

そして飼育農家は少なくともいま、生徒から真実を聞き「知っている」のである。そのとき飼育農家は生徒に何を語ったのであろうか。

アンケートの集計によれば、「もし知っていたら飼育したか」という質問に対して、「飼育する」と答えた人は八・六%、明確に「飼育しない」と答えた人は二三・二%、残りの六八・二%は「分からない」だった。印象的だったのは「飼育する」と答えた全員が「国のため」と言いきったことだ。生徒は「飼育する」派の大半は「金になるので」とか「どうせどこかが飼った」などの消極的賛成だろうと考えていた。だが実際はそうした回答は一例もなく、賛成する人のすべてが「国のため」という積極的賛成だった。七三一部隊の犯行を生徒が説明したあとに、なおかつ「飼育した」と答えた以上、これは明確な意志である。一〇人に一人とはいえ、いまもそう答える人がいたことは、生徒にとって驚きだった。

圧倒的多数の「分からない」派とは何なのか。農家の反応で、生徒がいちばん感じたのは「拍子抜け」だった。意気込んでやったわりに、農家は何も感じてくれなかった。以前私が加害責任を問題にしたとき、桑名は「飼育農家は被害者だ」と反論した。「誰も殺人者の仲間にはなりたくない、知らないうちに仲間にされた飼育農家は被害者だ」というのである。桑名の見方を借りれ

ば、この圧倒的な「分からない」派の無反応は、加害者としての自分はおろか、被害者としての自分すら見えていないことになる。農家が加害責任を感じてくれないことに、生徒はギャップを感じていた。

□家族も飼育者だった

農民アンケートがスタートしてしばらくしたある日、私は実家に帰り父親と酒を飲んでいた。たまたまネズミのことを話したら、「俺も飼っていたよ」と親父はあっさりと答えた。そのとき初めて私は、自分の家がネズミ飼育者だったことを知った。実家は、越谷といっても春日部との境にある。当然ネズミ飼育地域だったわけだ。わが家が飼育者でないほうが不自然である。そのことになぜ気づかなかったのか、考えてみれば間抜けだった。

親父は昭和初期からの古い飼育者だった。子どものころから出征するまで飼っていた。聞けば親戚も飼っており、遠藤一族はネズミ飼育一族だった。伯父などは動物好きなのでネズミに熱狂し、回転車まで作ってかわいがっていたそうだ。仲買人は、子どものころから知っていた近所の人だった。戦後飼育が行われなくなってから生まれた私は、そんなことはまったく知らなかった。アンケート対象者には世代代わりで飼育の事実を知らない家が多かったが、自分自身がそれだったのだ。

同じことは生徒にも起こった。藤谷の家も飼育者だった。彼は家族に学校の調査の話をすると、おじいさんが「俺も毎日餌くれをしていたよ」と話し始めた。彼は報告書に、「今回の調査をするまでそのこと(家族の飼育事実)を全く知りませんでした。なぜ一番最初に一番身近にいる自分のおじいさんにこの話を聞かなかったのか。まさかおじいさんがそんなことをしていたわけがないと思っていたので、僕にとっては思いもよらないことでした」と書いている。小谷中の一族も飼育者だった。彼も今回の調査まで気づいていなかった。

藤谷の感想は私の思いでもあった。私たちの家族が飼育者だったことは、偶然ではない。この地域ではどの家でもネズミを飼っていた。私たちはいちばん最初に、家族と親戚の聞き取りをするべきだった。私は生徒に「これは加害の歴史の掘り起こしだ」と言ってきた。にもかかわらず自分の家が飼育者であるかどうか、確認しなかった。私はこの問題を自分自身のものとして考えてはいなかったのだ。

藤谷はショックを受けていた。いままでアンケート対象者だった飼育農家との距離はゼロになったのである。「知っていたら飼育したか」という質問は、今度は自分自身に向けられることになった。その後も彼は同じようにこの質問を農家にしてまわったが、その内実はこれを契機に変わっていった。これは私たちにとって他人ごとの調査ではない。家族の育てたネズミが七三一部隊に送られていたのだ。

その後私はネズミの問題を社会科の授業の教材とし、一般生徒に家族親戚へのアンケート調査をさせている。近郊住宅地で新町民が多いにもかかわらず、クラスに五人から一〇人は飼育者が現れる。生徒は自分や友人の家が飼育者だったことを知ったとき、はじめてネズミと細菌戦をリアルに感じとる。この問題は、まず自分たちのかかわり方から入るべきなのだ。

□ネズミはどのように飼われたか

では、この地域でネズミはどのように飼育されていたのか。農民アンケートからネズミの飼育方法を説明しよう。ネズミは、専用の飼育箱にオス一匹、メス五匹を入れ繁殖させる。メスは一回に一〇匹近くの子どもを産むので、ネズミはどんどん増えていく。二〇日で産むので「二十日ネズミ」と言われるくらいで、一箱があっというまに五箱一〇箱になっていくという。増えたネズミは、「ネズミ屋」と呼ばれる仲買人が引き取りにきた。ネズミには二種類あり、いずれも白ネズミだが、戦前は大型のラット(大黒ネズミ)、戦後は小型のマウス(二十日ネズミ)が中心だった。ネズミ以外ではウサギやモルモットも多く、猿まで飼った人もいた。

飼育箱は、昭和初期まではミカン箱だったが、専門に作る箱職人が現れた。五〇センチほどの木箱で、側面の一つだけが網張りになっている。飼育の規模は、五箱程度が普通。一軒一箱の家から、軒下すべてを使い一〇〇箱飼った家まで千差万別だ。なかには、専業になり五〇〇箱飼っ

た家もある。「一〇〇箱飼えば蔵が建つ」と言われたが、実際はそれほど儲からなかった。
飼育はおもに年寄りの仕事だった。戦後五〇年がたち、飼育経験者が亡くなっている場合が多かった。子どもがペット代わりに飼う例もある。子ども同士でネズミが売買され、なかにはネズミ屋とつるんで儲ける子どももいた。ネズミを売った金を貯めて自転車を買った子どもまでいたという。しかしそういう子どもは例外で、収入は小遣い程度だったという人がほとんどである。
戦時中でラットが一円、マウスが十銭ぐらい。副業として特別割がよいわけではない。
餌はコザキを与える。コザキとは実らなかった屑米である。農家にとってはただ同然のもので、餌代はかからなかった。コザキ以外には野菜の屑を入れておけば十分だった。床どこにはワラを敷き、ネズミはそのワラで巣を作った。ネズミは尿が濃い生物で、ワラを変えるときの臭さがこの副業のつらいところである。
飼育のきっかけは「仲買人に儲かると勧められた」がほとんどだが、動物が好きで飼った人もいる。「小さくてかわいい」というペット的な要素もあった。子どもが産まれたり、成長していくのは楽しかった。いくら近所で飼っていても、ネズミが嫌いなので絶対やらなかったという人もいた。ただし戦時中は軍も顔を出し、かなり強力に飼育が奨励された。
苦労話で多いのが、蛇と猫による被害である。ネズミは歯が強く、木に穴を開けてしまう。ほんの小さな穴からも蛇は入ってくる。ある朝飼育箱を見ると、腹が膨れて出られなくなった蛇が

いた、なんていう話もある。「一度蛇が入った箱ではネズミは育たない」とかネズミは蛇に息を吹きかけられただけで死ぬ」と言い張る人もいた。猫は頭がよく、蓋を外したり網を壊したりしてネズミを頂戴した。町中の猫は皆ネズミを狙っていた。ネズミ飼育者と猫の飼い主とのあいだで争いが絶えなかった。

病気も悩みの種だった。ネズミはすぐ風邪をひく。病気が流行るとあっというまに全滅した。ネズミのようすに注意するのが大変だった。餌をあげないと子ネズミは食べられてしまう。ネズミ同士の「いじめ」もあった。夏は暑さで死に、冬は寒さで死んだ。油断しているあいだに逃げられた(庄和町には現在、野性化した白ネズミが生息している)。家を留守にできないのがいやだったなど、苦労話もさまざまだ。

ネズミ生産は農村の社会生活にも影響を与えた。同じ仲買人にネズミを納める農家は定期的に寄り合いを開き、お茶を飲んだり踊りを踊って楽しんだ。揃いの着物を作ったり、仲買人のサービスで温泉に行ったりしている。ネズミ飼育でわずかながらも収入があり、それによって農家の楽しみが増えたのだ。ネズミ生産は地域ぐるみで発達し、農村の人間関係を継承して広まった。そしてこの地域の農村の風景の一つになっていったのである。

生徒は農家をまわり、飼育の苦労や楽しさを聞いた。高屋敷が何を思ったか、「僕らもネズミを飼おう」と言い出した。日ごろ、私が唱える体験歴史学である。飼育係は小谷中と阿部に決まっ

た。彼らは一年間「愛のネズミ飼育日記」をつけ続けた。途中、保健環境部からクレームがつき、飼育は部室から生物室に移された。ネズミの名前は「石井四郎」や「北野政次」にしようという陰湿な案もあったが、結局「スーパー」とか「カラアゲ」とかの妙な名前になった。飼育当初の一時期は、女生徒が見にきて、ネズミは学校の人気者になった。しかしその後部室が臭くなり、やがてだれも来なくなった。

飼育は完全に戦前の方式で行った。コザキやワラはいくらでもあった。飼育箱も農家の庭先に転がっていた。そこにオス一匹メス五匹を入れ、生徒は一〇〇〇回の聞き取りの知識をもとに、ネズミ飼育を開始したのである。だが一年たったころ、ネズミは一匹残らず死亡してしまった。「あっというまに増える」という農家の証言は本当だろうか。子どもはついに生まれず、隔月間隔で死んでいった。オスの「ジンヤ」が死んだ時点でこの実験は失敗したが、残りのメスを捨てるわけにもいかず、飼育は空しく続けられた。死んだネズミをなでる小谷中の姿が悲しい。いまも裏庭に六つの小さなお墓が並んでいる。

□埼玉のネズミ飼育の始まり

実験動物の生産地は埼玉のほかに岐阜が有名だが、ことネズミに関しては埼玉が全国の七割を占める圧倒的な生産地だった。どこでも飼われていたと思いきや、どうも春日部近郊にしかない

珍しい産業のようだ。だとすると、そもそもなぜこの地域だけでネズミ飼育が行われたのか、という疑問が生じる。ここでは、この地域のネズミ生産の歴史をふり返りたい。生産地の範囲は、春日部を中心に、庄和、杉戸、幸手、宮代、松伏。これに越谷、岩槻、野田の一部が加わる。

確認できたかぎりでも、すでに明治期にネズミ飼育は始まっている。当時は愛玩用の南京ネズミだった。愛玩ネズミは小鳥屋が扱い、繁殖もさせたが、それだけでは足りなかった。南京ネズミはその名のとおり、一七世紀に中国から渡来したもの。中国では古くから愛玩用として小ネズミが飼われていた。日本にもその風習は伝わり、江戸時代にはコマネズミが大流行した。コマネズミとは内耳の欠陥が原因で、コマのようにクルクルまわるネズミである。一方、ヨーロッパでは実験用として利用されるが、本格的になるのは二〇世紀に入ってからである。

大正期になると、実験用ネズミが登場する。モルモットの飼育も始まる。このころから、日本の近代医学も実験動物を必要としはじめる。大学病院にネズミを納めていた仲買人を、すでに大正期に確認できる。彼は一人でネズミを大学まで運んでいた。大学が実験用にネズミを買うようになると、仲買人の取引も小鳥屋から大学へと移っていった。

大学の場合、種ネズミは大学側が提供する。仲買人はその種ネズミを農家に配り、飼育させるのである。最初にこの地域に入ったのは、白黒の英国マウス。続いて大正末にアルビノ(白色)のフランスマウスが入った。このアルビノがこの地域の飼育ネズミの主流となった。その間ドイツ

マウスも入り、昭和期には結局それらが混在したものとなった。現在、この雑種を学会では「カスカベ群」と呼んでいる。「カスカベ群」の系統研究では、アルビノを筆頭にほとんどが外来種で、明治期の南京ネズミはきわめて少数だった。これは、大正期に愛玩ネズミが実験用ネズミに駆逐されたことを意味している。仮に愛玩ネズミがこの地域のネズミ飼育のきっかけであっても、この産業を拡大させたのは実験用ネズミの登場によるものだった。

以上は仲買人から見たネズミ飼育の「始まり」だが、それが広範な農家に受け入れられた理由はなんだろうか。ネズミ飼育の「始まり」と「広がり」は別の問題である。ネズミが「広まった」理由は、飼育農家の立場から見ていかねばならない。

当地の地場産業ではタンス、桐箱が有名である。当時は養蚕も行われ、この地域に副業がなかったわけではない。ただ、その「手軽さ」という点で、ネズミ飼育にかなうものはなかった。エサのコザキは、当地が豊かな穀倉地域であるため、いくらでもあった。飼育箱もたいした値段ではない。ネズミ飼育ほど元手のかからない「手軽な」副業はなかった。一方、米作の豊かさに反して、この地域は地主と小作人の差が激しかった。貧しい小作人にとって、「手軽な」ネズミ飼育は格好の副業だった。元手のない小作人が、「ネズミはどんどん増えて、いくらでも儲かる」という仲買人の言葉に乗らないはずはなかった。

ネズミ飼育が一般化していった大正末から昭和初期にかけて、県が副業奨励政策を推進してい

た事実も見逃せない。戦後恐慌の不況下に苦しむ農家は、県の奨励に飛びついた。ウサギについては県がとりまとめて、この地域の農家に広めていった史料が残っている。ネズミについても同様のことがあったと予想できる。

わが町のネズミ生産はこの後、戦争を迎えて爆発的な拡大を見せることになる。だがその話は後章に譲り、ここではその前史として、この地域が古くからのネズミ生産地だった事情を見るにとどめよう。

□ネズミ屋たちの証言

本書で骨格をなす情報は、そのほとんどがネズミ屋によるものである。農民アンケートはたしかに膨大な量に達したが、基本的に意識調査だった。飼育農家が知っているのは近隣のようすだけで、ネズミ生産全体のシステムについては知らなかった。飼育農家が直接会うのはネズミ屋だけで、ネズミがその先どうなるのかについては興味もなかった。

ネズミ屋は違った。毎日飼育農家をまわる彼らは、広域の飼育状況を把握していた。また集荷したネズミはネズミ屋が直接、軍や研究所に納めた。当然、軍や研究所の人々と知り合いになり、そこでさまざまな情報を得た。内容は飼育方法や値段にとどまらず、今後の実験動物がどう進み、何が要求されるのか、将来の展望にも及んだ。ネズミの量と質を高めるため、軍や研究所はネズ

ミ屋に情報を与える必要があった。彼らは頻繁に会い、強いつながりを形成していった。

ネズミ屋同士の情報交換もさかんだった。当初、彼らはそれぞれが単独に動いていた。彼らは仲間であるとともに、ライバルでもあった。農家は少しでも払いのよいネズミ屋についた。研究所も必要量を確実に納入できるネズミ屋を雇った。彼らは、ネズミの需要と価格、研究所と飼育農家の動きにたえず目配せをしていなければならなかった。要するに、埼玉のネズミ産業の実態を語れるのは、彼らネズミ屋だけなのである。

従って農家のアンケートをしながら、ネズミ屋を捜すのがもう一つの目的だった。だが戦前からのネズミ屋で存命しているのは一〇人程度、ほとんどが亡くなっていた。ネズミ屋の所在が分かると、私たちはすぐに作戦会議をする。証言してもらえればいろんな情報がドンドン出てくるのが、体験的に分かっていた。だが、彼らの取材は簡単ではなかった。

ある日、野沢がひどくしょげ返って帰ってきた。農家をまわっていてネズミ屋の存在を知り、近くだったので一人で訪ねたのだ。野沢はいきなり「また新聞に載せる気か」と言われた。「商売の迷惑なんだよ」と言われたあと、一方的に罵られた。おとなしい野沢もさすがにムカついて、自分たちの調査の意義を話して防戦した。だがそんな話が通じる雰囲気ではない。野沢はがんばって「どうしても教えていただけないのですか」と聞くと、「名刺持ってこい」と言われた。高校生が名刺を持っているだろうか。怒鳴られっぱなしで、野沢は戻った。聞き取りは、うまく

いっても疲れるものである。こんな目にあってはもうグロッキーだ。野沢はそれから一週間も聞き取りにいけない精神状態になってしまった。

これとほぼ同じ体験は他の生徒もしている。七三一部隊の言葉が出たとたん、急に顔つきが変わり何も話してくれなくなった人。長年ネズミ屋をしていたのが明らかなのに「一度もしてない」と言い張る人。アポを取ろうとしたら「何も知らないんだから来るな」と電話を切られたこともある。私は生徒に「無理して証言を頼む必要はまったくない。分かった範囲をまとめればいい。プライドを持とう」と言い続けた。その蔭で、証言を拒否するネズミ屋にいまも手紙を書き続けている。生徒には内緒である。

とくに、いまも仕事を続けているネズミ屋からは、完璧に拒否された。現在、ネズミ飼育は農家から姿を消しつつある。無菌状態での飼育が義務づけられ、農家の副業ではできなくなった。でも往時ほどの盛況はないものの、ネズミ生産はいまも若干続いている。「商売に迷惑」という言葉は本当なのだ。

一方、転職した「元ネズミ屋」からは話が聞ける場合が多かった。本書はその方々の協力でなっている。七三一部隊に出荷していたSさんは、「もう五〇年も経ったのだからオープンにするべき」と貴重な話を腹心なく話してくれた。また次章に述べる田中一郎(仮名)を「オヤジ」と慕うOさんは、細菌戦の問題を踏まえたうえで、「オヤジ」について教えてくれた。証言する人、し

ない人、生徒はさまざまな人を見てきた。

ところで、「ネズミ屋」という言葉は、そもそも春日部のごく近郊でしか使われない。同じ埼玉でも越谷では、ネズミ業者は「バッタ屋」と呼ばれる。春日部でも古い人は「バッタ屋」を使う。「バッタ屋」はネズミ以外の小動物も扱っていた。おそらく初めはどこも「バッタ屋」だったのだろう。それが春日部近郊ではネズミだけが突出した存在になり、しぜん、「バッタ屋」の名称は「ネズミばかり扱う業者」すなわち「ネズミ屋」に変化した。ではなぜ春日部ではネズミだけが急増したのだろうか。その背景には大学や研究所の需要をはるかに凌ぐ軍のネズミ需要があった。戦争が近づき「ネズミ屋」をとりまく状況は、大きく変わろうとしていた。

□田中一郎の登場

ネズミ屋の小規模な世界を一変させたのが、田中一郎の登場である。田中は短期間にほとんどのネズミ屋を傘下に組み込み、戦時期にはほぼ独占状態を形成した。田中の組織化により、この地域のネズミ生産は飛躍的に増大。満州で七三一部隊が大量のネズミを「消費」していたとき、埼玉では田中がネズミ産業の活況を演出していた。

田中は明治三四年、春日部に生まれた。昭和五年ごろよりネズミ屋の弟子入りをし、集荷を始めている。その後家主より資金を借りて独立し、伝染病研究所、陸軍軍医学校などに直接納入す

るようになる。軍からの注文が増加するにつれ、田中は仲買人として成長していく。続いて、「埼玉県医科学試験動物生産組合」を設立し、自ら組合長となる。各町村に支部を置き、支部長には固定給を支給した。それまで個々に東京の問屋や研究所と結びついていたネズミ屋は、この組織に組み込まれ、田中のもとに統合される体制になった。ネズミはいったん田中のもとに集められ、そこから一括して出荷された。

田中のおもな取引先は軍のほか、東京帝国大学医学部、伝染病研究所、陸軍軍医学校、陸軍獣医学校、北里研究所、慶応大学医学部、京都帝国大学医学部、日本大学医学部、慈恵医大、金沢医大専門学校など、当時の日本の医学研究所のほとんどすべてだった。これだけでも田中の実力が理解できる。七三一部隊が細菌兵器製造に乗り出し、軍は大量のネズミが必要となった。田中によるネズミ生産の組織化、巨大化は軍の需要に呼応するものだった。両者は結びついて肥大していった。

田中が多くのネズミ屋たちのなかで突出した存在になれた理由は、軍とのつながりによる。彼が生産組合を設立できたのは、軍専属の実験動物業者になったからだった。田中を軍専属業者に推薦したのは、七三一部隊の資材調達官だった山田二郎(仮名)である。山田は田中と同い年で埼玉県加須の生まれ、学生時代春日部に下宿し、田中とはそのころからの仲だった。山田はその後、衛生学校から軍医学校に進み、そこで石井四郎の部下となる。東京若松町にある石井宅のすぐそ

ばに引っ越し、石井の世話をしていた。山田は軍医学校時代の石井に田中を紹介し、軍医学校へのネズミ納入の斡旋をしている。田中は偶然七三一部隊員に旧友を持ったおかげで、ネズミ業者としての飛躍を遂げたのである。

実験動物の歴史を調べると、田中一郎は伝説の人物という感じだ。戦後もGHQと結びつき、ネズミ産業を存続させた。昭和二五年にはライトノーズル社長に就任、昭和二六年には県会議員に当選している。彼は一代、それも独力で立身出世を遂げた。彼を「春日部一の金持ち」と言う人もいた。性格は親分肌で、面倒見がよく、多くのネズミ屋から「オヤジ」と慕われている。「ネズミ博士」を自称し、この地域の飼育農家のあいだで、いまも彼はそう呼ばれていた。戦後ネズミ生産は衰退し、田中の死とともに彼の作った生産組合は解体する。埼玉のネズミ生産の歴史は、田中の生涯と重なっていた。

私たちは田中の人物像をさまざまな人に聞いた。ネズミ屋に限らず市会議員などの有力者のなかにも、彼に世話になった人は多く、いまも彼は「オヤジ」と親しみを込めて呼ばれていた。しかし、七三一部隊との関連で田中を調べると、彼の業績は否定的に扱わざるをえない。事実、森村誠一氏は『続悪魔の飽食』で、彼を「ミニチュア版、死の商人」と非難している。

調べていくうちに、田中の孫が私の教え子であることに気づいた。田中について考えると、しぜんにその教え子の顔が浮かんでくる。私はどうしていいか分からなくなった。教え子の祖父に

ついて批判的な発表ができるのか。だが公表を前提にして、調査は進んできた。田中は埼玉のネズミ産業の主人公である。主人公のいない物語は成り立たない。

田中の仕事は細菌戦に限ったものではない。戦後日本脳炎などの伝染病が流行したとき、ワクチン製造のために大量のネズミが必要になった。田中が大量生産のシステムを築いていたおかげで、この急場が凌げたのである。もし田中がいなければ、ワクチンができずに多くの人命が失われただろう。私は七三一部隊にネズミを送った総元締めとしての田中と、教え子の祖父としての田中の板挟みになった。だがそれでも、私たちの作業は史実を積み上げていくよりなかった。

□戦争に結びついたネズミ生産

こうして戦時期、皮肉にもネズミ生産はかえって活況を呈する。後述するように、七三一部隊はネズミ不足に困っていた。その穴は埼玉の生産地で埋めなくてはならなかった。田中一郎はそのトップとして、農民にネズミ飼育を奨励していく。強制とまではいかないものの、「国のため」にネズミ飼育をしなければいけないと感じる状況が現出してきた。生徒の農民アンケートでもこの時期、飼育をはじめた農家が多い。

春日部のある地域では「ネズミは、飼育のノウハウを知っている地域、すなわちいま飼ってる地域でないと増産できない。埼玉が独力で増やすしかない」と言われ、「この地域の全家庭で飼育

させられる」という噂が流れた。「みんなで増産しなくちゃ」という声が強まり、飼育しないと肩身が狭い雰囲気になった。「イヤだけど、お国のためなので仕方なく飼った」とある農家は語る。軍もネズミの飼育を奨励した。たしかに不可解な状況だった。が、それでも細菌戦なんて夢にも思わなかった。

当時の新聞にこんな記事がある(『埼玉新聞』一九四三年一二月一〇日付)。

「粕壁(春日部)で小動物増産協議会

陸軍軍医学校特定埼玉県農会指定の医科学実験動物生産実行組合主催の小動物増産協議会は、九日午後一時より粕壁町東武座において開会、国民儀礼後田中一郎組合長の挨拶続いて協議に移り、小動物増産が決戦下重要使命を帯ぶる為、これが増産に関する協議をなし、県官軍側来賓の訓示並に講演等あり、終って小動物増産に邁進しつつある組合員に対する慰労会に移り、講談浪花節漫才等の余興を開催した」(傍点は引用者)

ここではネズミ生産が「決戦下重要使命を帯ぶる」ことが明記されている。「県官軍側来賓の訓示」のように、県の役人や軍人の後押しがあったことも分かる。「お国のため」を強調する一方で、「講談浪花節漫才等の余興」も行っている。田中は飼育農家を集めて、しばしば芝居興業などの慰安会を開いていた。ネズミ増産は強制するだけではダメだった。

田中は増産のための宣伝映画も製作した。小学校に農民を集め、映画を見せ、飼育を呼びかけ

た。田中のもとで働いていた人の話だと、戦時下なので人はすぐ集まったそうだ。岩槻の黒谷小学校で映画会を開いたときは参加者が四〇人くらい、ネズミ屋の説明に農家は熱心で、そのときも飼育希望が殺到したという。

だがいくら宣伝したところで、物資がなければ飼育者拡大はできない。戦時下の食料不足、モノ不足の状況で、田中が飼育者拡大に専念できたのは、軍の支援があったからである。資材不足の時代、飼育箱に使う木材や金網は一般には手に入らなかった。箱を作る板は、軍から東武鉄道の貨車で山のように田中のもとに運ばれた。エサとしてはマメ板(大豆のカスでできた食料、一枚一五キロくらい)が、同じように軍から届いた。田中が借りていた三つの倉庫はマメ板でいっぱいになった。食料不足なので、人間もマメ板を崩して食べたという。この大量の物資を農家に配給して、田中は飼育者を拡大していった。そうでなければ、戦時中にネズミ飼育などできるわけがなかった。軍の後押しがなければ、この時期の埼玉のネズミ生産は存在しなかった。

一方、軍にとってもこれは当然の政策だった。細菌戦は日本陸軍にとって「最終兵器」である。だがペストノミを使うかぎり、ネズミの確保は不可欠だった。飼育経験のない地域で急にネズミ生産はできない。軍は田中に頼るほかなかったのである。ネズミ増産のためには、なりふり構ってはいられなかった。

こうして戦争のまっ最中、埼玉の片田舎では異常なネズミ飼育ブームが巻き起こった。だがそ

れでも、軍の要求する急激な増量には対応できなかった。田中は山田と相談して、ある計画書を陸軍省に提出した。全国の学校を使って、子どもたちにネズミ飼育をさせるという計画である。すでに多くの学校ではウサギが飼育されており、それは軍へ供出され手袋に使われていた。田中の計画は、細菌戦のためのネズミ不足を一挙に解決する、起死回生の妙案だった。軍はこの案をすぐ採用したが、実施直前に終戦を迎え、計画は結局実現しなかった。もし実現していたら、日本中の子どもたちが、細菌兵器用のネズミを学校で飼育するという、ブラックユーモアにもならない事態になっていたのだ。ネズミの増産がいかに全国レベルの急務であったかが推察される。

以上、七三一部隊のネズミ需要により変動する私たちの地域の姿を見てきた。生徒は元七三一部隊員など地元以外でもネズミに関する聞き取りをしているが、その研究成果については第Ⅱ部を見てほしい。この調査をしながら、私たちは一つの疑問を持ち続けてきた。それはネズミ産業にかかわった人々がどこまでネズミと細菌戦の関係を「知っていたのか」ということだ。

□ネズミ屋は知っていた

飼育農家が細菌戦について知らなかったことはすでに述べた。医学の実験用なので、むしろ国の政策に貢献していると信じていた。飼育農家の知識は、せいぜいネズミが満州に送られたというところまでだ。農家はネズミの用途について知らなかったし、なんの疑いもなかった。

生徒は当時、東京の防疫研究室の陸軍主計だった天野良治さんに会い、その辺の事情を伺った。天野さんはネズミの受注が任務で、そのネズミが医学実験用でなく細菌戦用であることを知っていた。ネズミの用途はいわば公然の秘密で、防疫研究室の人々は誰でも知っていた。天野さんは「マルタ」のサンプルを見ており、人体実験についても知っていた。東京ですらこの状況である。それなら七三一部隊員の山田二郎はどうだろう。七三一部隊員として満州と日本を行き来し、ネズミやノミを調達していた山田がその用途を知らなかったとは考えられない。

生徒は七三一部隊で少年兵だった篠塚良雄さんからも話を聞いた。篠塚さんはもっとも早くからの証言者で、ノミや細菌の増殖を行っていた。当時から細菌戦も人体実験も知っていた。彼は「マルタ」という言葉も聞き、その意味も分かっていた。生徒は天野さんや篠塚さんと会い、農民の聞き取りからは分からない『悪魔の飽食』の世界に初めて直面した。少年兵ですら知っていたことを、石井四郎に近い立場にいた山田が知らないはずはない。山田は頻繁に春日部に来て、ネズミの飼育状況を視察してまわった。田中一郎を頂点とするネズミ屋たちは、そのつど山田を接待している。そのときネズミ屋たちは、山田からどこまで話を聞いたのか。

あるネズミ屋の息子から聞いた証言である。終戦直後のある日、彼は父とネズミの肉を味噌漬けにして食べていた。戦時中あれほど生産したネズミだったが、敗戦で買い手がなくなり大量に余ってしまった。飼育農家はネズミ屋に「約束だから引き取れ」と言って迫ってきた。買い手

だった軍が消滅したのだから、大量のネズミの処分方法は難問だった。食糧難の時代である。あり余ったネズミは当然、人間の胃袋に収まった。ネズミ屋の息子は商売柄、毎日ネズミを食べていた。

ある日、息子は父に率直な疑問を尋ねた。「戦争中あんなに売れていたネズミがなぜ急に売れなくなったのか」。「満州が買わなくなったからだ」と父は答えた。彼が「満州はネズミを何に使ったのか」と聞くと、父ははっきりと「細菌戦だよ」と答えた。父は細菌戦について「中国ではネズミにペストを植えつけて、そのネズミを放すのだ」と説明した。彼は戦時中、自分も手伝っていたネズミの意外な使用法に驚き、そのときの父との会話が印象強く心に残ったという。

ネズミが大量生産されたのは、後述するとおりペストノミ生産のためで、直接ペストネズミを放つためではない。ただペストネズミを放った作戦も確認されており、この父の発言はあながち的外れではない。少なくともこのネズミ屋は、ネズミの使用法について戦時中から「知っていた」のである。この例をもって、すべてのネズミ屋が細菌戦について知っていたとは言えないが、山田と接触のあったネズミ屋上層部は「知っていた」と見るべきであろう。

石井四郎は「七三一部隊の秘密は墓場まで持って行け」と言ったが、細菌戦については埼玉のネズミ屋にまで伝わっていたようだ。ただ飼育農家が知らない点から見て、ネズミ屋にも細菌戦の話が秘密であるという意識はあったのかもしれない。細菌戦が戦争犯罪であるという認識まで

あったかどうかは分からないが、彼らは「知っていて」「黙っていた」のである。

加害責任を考えるうえで、細菌戦を「知っていた」ネズミ屋をどう位置づけるべきか。だが、彼らに、当時細菌戦を悪と認識しうる環境があったのか、また飼育農家は「知らなかった」から仕方ないのか、という疑問は本編の主流を成すテーマである。それについて生徒は何度も議論をくり返してきたが、結論が出たわけではない。ここでは生徒が飼育農家やネズミ屋から集めた証言をメインに、埼玉のネズミ生産の歴史を抽出するにとどめたい。生徒が「ネズミ屋の責任」「飼育農家の責任」をどう考えたのか、それは次章で見る生徒の活動を通して紹介したい。

2. ペストネズミを追う高校生

□TBS「報道特集」に出演

生徒が農民アンケートに奮闘していた九四年一一月、番組制作会社から電話があった。TBSの番組「報道特集」が戦後五〇周年企画で七三一部隊を扱う、そこに生徒を出演させたいとのことだった。生徒と飼育農家のやりとりを中心に番組を作りたいらしい。あんなかわいいネズミがそんなことに、という意外性もあっただろう。「本当ですか」と阿部。「親戚に電話しよう」と藤谷。

テレビに出たらどうなるか。「もう新聞に出ちゃってるんだから影響ないでしょう」とクールな野沢。GHQ文書を新聞に載せてしまった私のミスをまだ根にもっている。「でも日曜六時の全国ネット。新聞とは影響力が違う」と小谷中は慎重である。彼は石橋をたたいて渡るタイプだ。

農家やネズミ屋の反発を恐れている。「でもテレビに出ることで、新たな情報が寄せられるかもしれない」と高屋敷は積極的だった。案外計算している。検討のすえ、私たちは番組に出演することに決めた。番組は正味二五分ぐらい。生徒が取材した天野さんや田口さんを、テレビ局がもう一度なぞる格好である。実質的に生徒のネズミ調査をドキュメンタリーにしたもの、といえるだろう。

印象に残った場面をひとつ。小谷中は成績優秀で記憶力抜群だが、なぜかひとりだけスローモーションの世界に住んでいる。記者が小谷中に質問する。「もし君が飼育農家で、細菌戦について知っていたら飼育しましたか」。これは小谷中が毎日聞きまわっているアンケートとまったく同じ質問である。小谷中は「戦争だから仕方ない」「まわりの家も飼っていて付き合いだから」などと延々と述べ始めた。私は目で「小谷中、逆の意見を言ってくれ」と訴えた。記者もいやになったのか途中で打ち切った。あとで聞いたら、「そういう意見もあるが、私は飼わない」と言うつもりだったらしい。結局、小谷中の話はオンエアされなかった。

放映は阪神大震災で遅れて、翌年二月二六日になった。その後この番組はオウム一色になるので、私たちは大震災とオウムのすきまに滑り込んだのだ(オウム報道はその後も続き、そのため一度は企画された番組第二弾「高校生、中国で発表」は没になった)。放映は学校中の話題になったが、チビマルコを見ていた生徒も多い。入学試験の前日で、テレビで見てびっくりした受験生

もいたらしい。歴史研究は本来地味で、報われなくてあたりまえである。それに耐えて一人前なのだが、意外にも派手な展開になった。

□右翼からの脅迫状

テレビに出ていいこともあった。農家を訪ねると「出てたね」と声をかけられる。「がんばってね」と励まされると、桑名はそのたびにジーンとなるらしい。手紙ももらった。戦後ルソン島でネズミの調査をしていた研究者は、テレビの飼育箱と自分の飼育箱がそっくりで懐かしかったと伝えてきた。満州に移住していた方からは、戦時中白ネズミの飼育を依頼された経験を知らせてくれた。ネズミの収入は正業の収入より多かったそうである。

いいことばかりではなかった。抗議の電話がかかってくる。「高校生にやらせる調査か。あの教員はなんだ」が定番である。「なんで学校の制服を着てるんだ。やるんなら私服に着替えろ」はちょっとピント外れだ。ある人は私に因縁をつけながら、「裏にはもっとスゴいことがあるんだ。知らねえだろう」と捨て台詞を吐いた。悔しくて「教えて」とは言えなかったが、ホントは聞きたかった。そうした抗議は生徒には知らせなかった。知らせる価値のないシロモノばかりだった。

だが、生徒にも知らせざるをえない手紙が来た。明らかに右翼と思われる、本校校長宛ての脅迫状である。校長は県教育委員会に報告しなくてはとあわて、私がこの調査を今後も続けると言

う と顔をくもらせた。手紙は誤字だらけで文意不明のどうしようもないシロモノだった。校長には笑ってゴミ箱に捨ててほしかったが、立場上そうもいかないのだろう。手紙の内容は次のとおりである。

「報道特集を見た。あの番組は日本國を悪くしょうとする番組なのだ。TBSに利用された南京大虐殺(四〇万出来るか)関東軍風水、今迄全部が日本國に反対しての行動だ。日本人は料治か北朝鮮人なのだ。なぜ生徒を使ってあんな事を調査するのか。あの生徒も今后は大人になったら何でも反攻の革マルに入って行く事は確実だ。あの純真な生徒を騙していた先生はどうだ。今のうちに芽をつまなければならないのだ。あれが一番悪い。身辺に気を付けろ。生徒共に。皆に見せろ」

どこから「革マル」が出てくるのかまったく理解できないが、「身辺に気を付けろ。生徒共に」と生徒まで脅しているのは許せない。手紙のことは私から生徒に説明した。右翼がどんなものであるか、校長がどう反応しているか、ネズミ調査の加害の意味ももう一度確認した。手紙を前にしばし沈黙が流れた。「消印が東北だからただの脅しですよ」と野沢。「春日部の右翼から脅迫状が来たら、そのとき考えましょう」と藤谷。小谷中は「こんな陰険な脅しには負けない」というミニ新聞を作り、部室に貼り出した。だが廊下には貼り出さなかった。右翼に伝わって刺激してはまずい、という彼の繊細な配慮だった。こうして脅迫状の翌日には、生徒は何もなかったかの

ように聞き取りに出かけた。
そのすぐあとに、似たような手紙が来た。「戦いとは人間対人間の殺し合い、目的を達成するには手段を選ばないのが戦いである。戦争とは平和時に生まれた貴殿の考えている生やさしいものではない。このような事を発表して何の目的と何の役に立つのか。貴殿の真相を伺いたい」とある。私は「またか」と思い、手紙を部室の机に投げ捨てた。何日かして小谷中がそれを持ってきた。「これはまじめな手紙です。先生、返事を書いてください」と言う。「馬鹿野郎、そんな暇があったら一人でも聞き取りをしろ」と私は言った。小谷中は「返事は僕が書きます」と怒って出ていった。
しばらくして、手紙の主から小谷中あてに返事がきた。それを見た私は驚いた。小谷中の言うとおり、手紙の主は「まじめな人」であるうえ、元毒ガス部隊員だったのだ。しかも「戦後五〇年も過ぎ軍機密は時効になりましたので」高校生に自分の体験を伝えたい、とある。手紙には毒ガスの種類や毒ガス部隊の組織についててていねいな解説がされていた。その方の体験も謙虚に記されていた。たしかに革新思想の持ち主とはいえないが、右翼とは明らかに違う。返事のなかの「自分としては御貴殿の担任の遠藤光司殿に書簡を発したつもりでしたが、文書の中に脅迫めいたことを申し上げ、右翼に間違えられたるのも無理もないことでしょう」の文面に、気恥ずかしさを感じた。右翼の脅迫状に私も若干、過敏になっていたのだろうか。

□七三一部隊国際シンポジウムからの招待

九五年二月、一通の手紙が地歴部のもとに届いた。七三一部隊展全国実行委員長の渡辺登氏からだ。「TBSで君たちの活動を見た。ハルビンでその成果を発表してくれないか」というもの。七月三一日に(七三一部隊にひっかけたのか?)、中国ハルビンで七三一部隊国際シンポジウムが計画されている。これは初めて、七三一部隊関係の日本側と中国側が一同に会するものであった。七三一部隊研究にとってもとても画期的だ。その歴史的意義は私たちにもすぐ分かった。そこで高校生が発表するなんて異例中の異例である。ただし費用は一人三〇万円。部室に激震が走った。

私たちの調査は、中国の被害者に話してはじめてその真価を問えるもの。日本では加害側の聞き取りしかできない。私たちの町のネズミは中国でどうなったのか、それを取材してはじめてこの調査は完結する。普通、高校生にそんな機会は持てないが、今回はそれができる。これはチャンスなのだ。

ただ最大の難関は金銭面だと思っていたので、私は秘策を用意していた。町の考古の発掘を全員で行い、そのアルバイト料で代表者を送ろうというもの。なかなかの美談である。ところがこの妙案に生徒は浮かない顔をしている。「根性ドラマみたいですね」と藤谷。「一人で行くのはどうも」と小谷中が本音を吐いた。「この甘ったれめ」と私は思ったが、生徒がなかなか賛成しない

ので、「明日までに決めておけ」と部室を去った。
翌日、私の妙案は消し飛んだ。野沢、小谷中、藤谷の親は全額を負担するそうだ。野沢は、受験勉強など屁とも思っていなかった。彼は無口だが静かに決断するタイプ。社会科の成績は校内トップだが、他は好き嫌いが激しい。以前、集会で野沢が発表したとき両親が会場に来ていたことがあった。両親は野沢の活動を応援していた。
小谷中は揺れていた。中国行きの意義と受験勉強の板挟みになった。逆に親から「一浪くらいしてもよいから行ってこい」と励まされて、行く気になった。高屋敷の親も賛成したらしい。だが高屋敷自身が受験勉強を選んだ。私はそれ以上勧めなかった。阿部は親にも相談せず、行かないことを決めていた。彼は夏休み中、平和集会や戦争展をまわって一人で発表し、地歴部の留守を守った。二年生の藤谷はいちばん乗り気だった。母親もそんな彼をあたたかく見守っている感じだった。「尊敬する先輩と発表できるなんて光栄です」と皮肉でなく言っていた。こうして、私たちの中国行きには野沢、小谷中、藤谷の三名が参加することになった。
その日から部室に中国ブームが起こったのはいうまでもない。各種ガイドブックが本棚に並び、中国地図が壁に貼られた。でも浮かれてばかりもいられない。シンポジウムには、有名な証言者や研究者が勢揃いする。とくに中国側の被害者の証言を聞きたい。どの証言者からどんな話が聞けるのか。また中国には私たちの調査に関連する施設があるのか。生徒はいままでとは違う現実

味で七三一関連の書物を読み直し、検討を始めた。とくに靖福和(チンフーホー)さんにだけは会いたかったので、まっ先にその旨を要望した(靖さんについては後述)。

調べが進むにつれて、私たちの緊張は高まっていった。これは発表してオシマイですむ旅ではない。現地での聞き取りや報告も成功させねばならない。中国の人々の本当の気持ちに、私たちは触れることができるだろうか。もしそれができなければ、一年間の調査すべてが否定されるような気がする。それを考えると、浮かれた海外旅行気分は削り取られていった。

□校長の対応

中国行きについて、校長がどう対応してくるかも心配事の一つだった。だが親が承諾している以上「行くな」とは言えない。結局この中国行きは学校の部活動としてではなく、あくまで個人参加という形で認められた。

五月のある日、校長は生徒と親を呼び出した。生徒も親も激励の言葉をいただけるものと誇らしい気持ちで席に着いた。ところが校長は、「これは学校の活動ではない」「事故が起きても知らない」と言う。最後に右翼の脅迫状の例を出し、「あなたがたの調査を、好ましく思っていない人もいることを忘れてはいけません」と付け加えた。生徒と親はじっと下を向いて校長の言葉を聞いていた。

翌日、「中国行きが成功したら校長に抗議したい」と小谷中が私に訴えてきた。温厚な小谷中がここまで言うとはよっぽどである。「小谷中、ここはこらえてくれ」と私は止めた。さらにこののち、各マスコミは生徒の中国行きを好意的に報道した。普通なら学校の名誉として喜んでもいいところである。ところが校長は埼玉新聞社社長に「抗議文」を出し、文書での回答を要求した。「校長に無断で載せるとは何事か」ということだった。

ところが、である。この右翼からの脅迫状がマスコミに載ると、校長の態度は変化した。『毎日新聞』が脅迫状に負けずに活動を続ける生徒の姿を好意的に報道した。『毎日新聞』の校長のコメントは「言論の自由を脅かす重大な問題で、生徒はそれに負けず立派な報告書を作ってくれた」というもの。目が点になるとはこのことか。「調子よすぎますよ」と小谷中。「この言葉を僕たちに言ってほしかった」と藤谷。せっかく「評価」してもらっても、これではあまり喜べない。

文化祭が終わり、そんなイザコザも忘れたある日、小谷中と野沢が「校長先生と話したい」と私に迫ってきた。「中国の人々がどんな目にあったのか、校長先生にも分かってほしい」と言う。「それが僕たちの役目のような気がするのです」と野沢。「昨年、被害の歴史を調べているときの校長先生は優しかった。じっくり話せば分かってもらえます」と小谷中。私はセッティングを約束した。ところが、話し合いの直前になって小谷中が元気なさそうにやってきた。「やっぱり自信がありません、やめたいです」。臆病風に吹かれてしまった。小谷中は志は立派だが、度胸がな

かった。「校長も報告書は読んでいる。君たちの気持ちは通じているよ」と私は慰めた。

中国の民衆は五〇年前の侵略行為以上に、その後の五〇年間の日本の態度に怒っている。その怒りは何よりも「教育」に向けられている。私はこの校長がとくべつ反動思想の持ち主だとは思わない。一連の行動はむしろトラブルを恐れての「配慮」だったのだろう。しかし結果的にはそれが生徒の研究意欲を弱めることになってしまった。これは現在の学校が「加害」を取り上げるとき、必然的に起こる現象である。校長の反応もそんなリアクションの一例として、日本の教育の現状をよく示している。

□加害の調査

生徒は一年間、加害の調査ゆえの厳しさを乗り越えた。ネズミ屋に証言を拒絶され、「商売のジャマだ」と言われたとき、「そんなに迷惑ならやめようか」と一瞬私は思った。言われた野沢は大きなショックを受けていたが、ただの一度も調査から降りたいとは言わなかった。一週間ほど部室で考え込んだあと、ふたたび何食わぬ顔で聞き取りに出かけた。「聞き取り」はうまくいっても、精神的負担のかかる作業である。拒絶されたり、まして非難されれば限界に達する。

右翼から脅迫状をもらったときも、正直心配だった。この近辺にも右翼はおり、ちょうどそのころ別の問題で、よく街宣車が学校の側に来ていた。右翼の演説が聞こえるたび、私たちはド

キッとした。だがこのときも調査を断念しようという声は出なかった。単なる高校の部活動なのに、何がこれほど彼らを支えたのだろうか。

生徒はごく普通の、むしろおとなしい部類に属する高校生である。野沢は入学当初まったく口をきかない少年だった。藤谷はおもしろい冗談を言うので人気者だが、リーダー性があるわけではない。小谷中は実直そのものの目立たない生徒である。一部の人たち、ネズミ屋や右翼、あるいは校長からは、生徒の活動が「左翼運動」のように見えるのかもしれない。だが事実は、生徒に「思想性」はまったくない。高校時代、「左翼小僧」で、左翼的言辞をふりまいてイキがっていた私とは対称的である。生徒を支えたのは、高校時代の私を支えた左翼的ヒロイズムではない。

生徒がこれらの妨害に耐えられたのは、一方で「証言する人々」の勇気ある姿を見てきたからである。農民アンケートを取りながら、生徒はなるべく七三一部隊の証言者を訪ねるようにした。「この手で人体実験をしたんだよ」と手のひらを差し出す湯浅さんの姿。湯浅さんは一四人の中国人を生体解剖した体験を自ら語った。糾弾する中国人被害者にただただ頭を下げた三尾さんの姿。三尾さんは憲兵として無実の中国人を七三一部隊へ送った。慙愧(ざんき)のなかから証言する人々の姿を見て、生徒は証言者とは何なのか掴みとっていった。この体験が、「証言しない人々」や非難する人々だけがすべてではないという、調査に立ちはだかる人々を相対化する視野を育てた。

もう一つは、この調査が自分自身への問いかけになっていったことだ。生徒は自分の家族が飼

育者でありながら、農家に「知っていたら飼育したか」と聞いてまわった。この言葉は当然自分にも跳ね返ってきた。他人に聞いておきながら、途中でやめることは、自分からの逃亡を意味した。この調査は「自分のなかの戦争」を見つける作業でもあった。生徒にとって、もはやこの聞き取りは引き下がることのできない、アイデンティティー獲得の営みになっていた。

ごく普通の高校生がもっていたこの力に、「左翼小僧」だった私はなかなか気づかなかった。だがいまは、生徒の実直さと忍耐力に敬服している。右翼の脅迫状を前にしたとき、生徒は脅迫状の向こうに、殺されていった中国の人々の姿を凝視しえた。その点が校長とは違っていた。この想像力の差がすべてである。その力は、生徒の素直さと一年間の調査が育んだものだった。

❑農民アンケートは運動だった

この調査を始めるとき、私たちはあまり「戦争責任」という言葉を使わないように約束した。実体験のない私たちがそんな言葉を使うのは、どこかおこがましく不自然だ。だが飼育農民に戦争責任があったのか、という問いを考えなかったわけではない。むしろ、それを心に秘したまま、私たちは調査を続けた。

最初私たちは、農民に責任はないと思っていた。彼らは「知らなかった」のだ。医学のためと思ってしたことを、誰が責められよう。だがしだいに、その「知らなかった」ことこそが最大の

問題なのではないか、と思うようになった。自分の行為の意味をなぜ「知らなかった」のか、「知る」チャンスはなかったのか、そしていま、「知らなかった」ですませられるのか。

足を踏んでいる人は踏まれている人の痛みが分からないという。踏んでいる人は「知らなくても」その責任があるだろう。だが踏んでいる靴を作っていた人にまで責任があるだろうか。ただその靴が普通の靴とまったく違う不可解な靴だったら、制作者はその靴の使用法に関心をもたないのはおかしい。

農民アンケートのまとめを担当した阿部が、報告書『ネズミと戦争』でそのことに触れているので引用したい。

「実際、多くの人々は細菌戦について知らなかった。でも少し変な気がする。利用法を全く知らなかったという理由を額面通りに受け入れていいのだろうか。人々は自分のしている事を知る権利があり、知るべき義務もあったと思う。ほとんどの農家が短期間のうちに膨大な数のネズミを飼育し始めるというのは異常な光景である。その事に疑問を持った人はどの程度いたのだろうか。戦争というのは人々の考えを押さえ付ける恐ろしいものである。自分の行為の意味すら知らされない、そんな世の中にしてしまった責任はすべての人にあるはずだ。知らなかったから仕方ないという言い方で済まされるのだろうか。それで中国の人々がなくなったのは真実なのに。そして今、私達はその事を十分知り得る環境にある。すくなくとも今、この事実に驚き、そうなってし

まった世の中について考えるべきだと思う」

戦後五〇年間、日本の平和を支えたのは民衆の被害意識だった。自民党に投票する、普通の保守的な人でも「戦争だけはもうたくさん」と言う。戦後五〇年間の日本は世界史的にも珍しいほど「人の命が大切にされた時代」だった。よど号事件のとき、日本は犯人への実力行使を絶対にしなかった。ヨーロッパやアメリカのハイジャックの対応とはまったく違う。「人が死ぬのはもう嫌だ」という共通の思いは、戦後の民衆が獲得した宝だった。戦後日本の平和を支えた最大の力だった。それを被害意識といえばそれまでだが、戦後日本の平和を支えた最大の力だった。どんな政治家もこの思いを無視できなかった。

加害意識は別のところからやってきた。戦争の加害が本格的に指摘されたのは、六〇年代後半の学生運動などの思想状況からだった。べ平連などの加害意識がその代表格だろう。加害意識は研究者や運動家によって掘り起こされ、戦後ずっとたって七〇年代から社会問題として提起されてきた。南京大虐殺、朝鮮人強制連行、従軍慰安婦などと並んで、七三一部隊もその典型だった。七三一部隊の加害責任が問題となったのも、おそらく外国から見れば異様なほど遅かった。加害意識はむしろ戦争を知らない世代のなかから「始まった」ものであり、それは戦争を知る庶民の被害意識とは接合していない。

だが私は、「もう戦争は嫌だ」という普通の庶民が「中国には悪いことをした」と言わなくてはならないと思う。もし加害の事実を知らないのなら、知る義務があるはずである。ただ加害意識

は、被害意識と違い、意図的に事実を構築することでしか組織されない。「もう戦争は嫌だ」と思っている農民を訪ね、「あなたのネズミが中国人を殺した」と言って歩いた生徒のアンケート調査は、そうした試みの一つだった。

だから生徒の農民アンケートは単なる学術調査でなく、事実を人々に伝える運動でもあった。少なくとも飼育農家は、自分の育てたネズミが医学のための結構なものではなく、中国の人々を殺すために使われた事実を知ってから、棺桶に入るべきである。生徒はいまも、地域の集会で「ネズミが何に使われたか」を訴え続けている。そんなとき、必ず何人かの飼育者が「実はうちでも……」と体験を話したあと、「そんな悲しいことに使われていたとは」と感想を述べる。生徒の研究と運動は、この地域に住む人々の意識をほんの少しではあるが変えているようだ。

3. 中国への旅

□中国へ行く

一九九五年七月二八日、私たちは中国へと出発した。団長は七三一部隊展全国実行委員長の渡辺登氏。参加者は研究会で井本日記(第Ⅱ部で詳述)の存在を教えてもらった吉見義明氏、教科書裁判で証言をした松村高夫氏、ＴＢＳに私たちを紹介してくれた西野留美子さん、細菌戦の映画『侵略』シリーズを作っている森正孝氏、平和遺族会全国連絡会の小川武満氏。そのほかにも中国帰還者連絡会の証言者や研究者など、現在の七三一部隊研究を築いてきたそうそうたるメンバーだ。とくにこの大会の世話役で、古くから中国人遺族の取材を続けてきた山邊悠喜子さんには、何から何までお世話になってしまった。初めての中国で、言葉も分からない私たちがなんとか目的を達成できたのは、まったく山邊さんのおかげだった。

法政二高の榎本勝巳先生とOBの斎藤一晴君とも仲良くなった。法政二高の社会問題研究会は登戸研究所の研究で有名だ。斎藤君は法政大学二年生で、二高の社研時代は毒ガス問題を調査していた。今回は「七三一部隊と若者の意識」というテーマで大学生アンケートをまとめたものを発表する。斎藤君の論文はこの後、法政大の論文大賞を受賞した。当然自分がいちばん若い発表者だと思っていた斎藤君は、高校生の発表に驚いていた。生徒は私より、斎藤君と行動を共にするようになった。

中国側も七三一部隊罪証陳列館の韓暁(ハンシャオ)氏や毒ガス研究の歩平(ブーピン)氏、張可偉(チャンコーウェイ)さんや敬蘭芝(チンランチー)さんらの遺族などが勢揃いした。日本側が市民団体主催なのに対し、中国側は社会科学院が取りまとめていた。総勢二五〇人、戦後五〇年たって初めて開かれる、日中共同の七三一部隊シンポジウムである。この歴史的大会に参加できる感激を肌で感じていた。大会はハルビンの大学で行われ、私たちはその近くのホテルに泊まった。

一一日間の行程を、生徒の動きも含めて簡単に紹介しよう。

七月二八日出発。学校に集合し成田へ向かう。小谷中は地元の神社へ参拝してきた。北京に着くやいなや小谷中が行方不明になる。

二九日はハルビンに向かう。飛行機が二時間遅れ、予定だった地方病防疫研究室に行けなくなる。ホテルに着くとさっそく取材。西野さんの案内でハルビンの戦争遺跡をまわった。私は韓暁

氏にインタビュー。

三〇日午前、日本と中国の参加者全員で七三一罪証陳列館と遺跡を見学する。小谷中が下痢でダウン。小谷中をおいて七三一罪証陳列館に行く。陳列館の金(チン)さんに取材。ミニチュアの「石井式爆弾」がお土産に売っている。午後は靖福和(チンフーホー)さんの村へ。参加者はペスト流行村、平房(ピンファン)などいくつかの訪問先に分かれた。元部隊員の人たちが中国側関係者と一緒に説明をしてくれる。夜は友好パーティー。

三一日、シンポジウム第一日目。全体会で日中双方の主報告が行われる。平房の七三一部隊遺跡をまわる。夜は現地の高校生と交流会。

八月一日、分科会では七三一部隊に関連する研究、報告、討論が交わされた。いよいよ生徒の発表。今度は野沢と藤谷が下痢でダウン。油っこい食事になじめない。NHKや現地テレビ局が撮っている。その後NHKは一時間のドキュメンタリーを製作した。現地のテレビ局からもドキュメンタリーのテープが送られてきた。いずれも野沢が大活躍。

二日、韓暁先生、NHKと地方病防疫研究室へ行く。ここにはペスト流行村の資料が大量にある。ネズミについての研究も五〇年間の蓄積がある。だが連絡ミスで建物のなかすら入れてもらえなかった。前日、所長に会って約束したのに、話が通じていなかったようだ。研究室には、外部に見せられない資料も多いので、急に準備はできないという説明だった。それからシンポジウ

ムの総括集会に戻り、たまたまハルビン市内でやっていた毒ガス展を見にいく。シンポジウム終了。

三日、参加者は五つのコース(北京、瀋陽、丹東、大連、帰国組)に分かれ、各地で交流会をもった。私たちはどのコースにも入らず、ハルビン市内の七三一部隊関連施設をまわる。野沢と小谷中はグロッキー、復活した藤谷と私でハルビンの町を歩いた。午後は北京へ向かう。

四日、北京の一八五五部隊の遺跡を歩く。ここを見たいがために、生徒と私は単独行動をとった。午後、生徒とはぐれる。生徒はホテルまで歩いて戻った。あれほどタクシーの乗り方を「教育」しておいたのに、その努力は無駄だった。

五日、ふたたび藤谷がダウン。野沢も動けない。まさにサバイバルツアーである。元気なのは私だけ。小谷中を連れて北京の博物館を駆け巡った。午後は抗日戦争記念館と盧溝橋へ行く。

六日、最後の一日。唯一観光の日である。ヘトヘトの三人は故宮と万里の長城を見学。万里の長城のてっぺんに、飲み干した正露丸の空瓶をおいてくる。

七日、中国とさようなら。空港まで外事弁務室の徐広明(シーグアンミン)さんが送ってくれる。徐さんは中国側の世話人でホテル内の細々したことをてきぱきと処理していた。発表の通訳もこの人で、生徒も絶大の信頼を寄せ「困ったときの徐さん頼み」という言葉が生まれた。これで一一日間の旅は終わった。

シンポジウムで発表

八月一日、発表の当日、生徒は全員下痢で衰弱していた。出番の寸前まで会場の隣の部屋で寝ていた。野沢がいちばん苦しんでいた。私が心配して声をかけると、「ぜったい自分で発表します」と言ってきかなかった。

会場には五〇名ぐらいの参加者が円卓を囲んでいた。そのなかには著名な研究者や証言者の顔触れもあり、たくさんのマスコミのカメラやビデオが会場のようすを映し出していた。「ネズミの話なんてみんな聞いてくれるでしょうかね」と藤谷は心配していた。「埼玉の片隅で農家をまわっていただけの地歴部が、こんなところに来てよいのか」と小谷中も落ち着かない。

生徒はそれぞれ自分で原稿を用意してきた。直前に通訳が「難しくて訳せない」と言い出した。その通訳は東大に留学していたそうだ。そこへ「困ったとき」の徐さんが来て通訳を代わってくれることになった。

発表は野沢の次の言葉で始まった。

「私たちはネズミ飼育により、間接的に細菌兵器製作にかかわり、中国の人々を傷つけていたことの謝罪を含めてこの報告をしたいと思います」

「謝罪」の二文字は私が強制したのではない。野沢はそれをサラリと言ってのけた。それから野

沢は調査の方法と趣旨を述べていった。通訳の徐さんとの息もぴったりで、アドリブまで飛び出す余裕だった。それをまた徐さんがつぎつぎと通訳していく。さっきまでヘトヘトだった野沢の姿が大きく見えてくる。徐さんは迫力ある通訳で、地歴部の研究を中国側に的確に伝えた。

小谷中は埼玉のネズミ飼育の歴史について発表した。発表してみると、ネズミの問題は深い関心をもって迎えられた。ネズミは、ある意味で七三一部隊を象徴するものだった。七三一部隊の大量のネズミは、中国人にとっては強烈な印象がある。ネズミ捕獲を強制された体験者も多い。戦後のペスト流行もネズミが引き金になっている。ネズミは参加者の誰にも共通した体験で、一般参加の人たちの関心も集めた。農民アンケートによって日本の飼育農民もまた貧しかったことを小谷中が説明すると、聞いていた中国の老人は大きく頷いた。弱気だった小谷中が「場違いではと思ったけど、そんなことはまったくなかった」と言う。生徒の発表は予想以上の注目を集め、中国側の圧倒的な歓迎をもって迎えられた。心配は杞憂に終わった。

最後に藤谷は、四〇六部隊とGHQ文書についてまとめたあと、靖さんへのメッセージを述べた。

藤谷がGHQ文書の細かな数字を言うと、それを猛スピードで筆記している若い中国研究者がいた。藤谷の家族も飼育者だったことを告げると、一瞬会場の視線が集中した。だが生徒の発表が歓迎されたのは、ネズミというテーマのおもしろさだけではない。生徒が受け入れられたのは

「高校生が発表にきた」ことへの中国側の驚きと感嘆にあった。おそらく、私が発表してもこんなに歓迎はされなかっただろう。中国でもいま、若い世代への戦争体験の継承が難しい問題になっている。日本の若い高校生が、自分たちの非となる歴史をあえて掘り起こし、中国にまで報告にきたことを、中国の人々は素直に喜んでくれた。歓迎されたのは研究内容以上に、生徒の「若さ」だった。それは今後の日中関係にいちばん必要だと誰もが感じているものだった。

何よりも「靖さんが目の前に座ったのでがんばった」と生徒は言っている。アドリブで靖さんへの思いを述べた藤谷は、この発表の殊勲者だった。藤谷の発表の直後に、靖さんから大賛辞を受け、約一時間の発表は終わった。現地のマスコミが生徒のまわりに集まってきている。拍手がひときわ大きいと感じたのは気のせいだろうか。

□幽霊と闘い続けた七三一部隊員

シンポジウム開催中、夜になると生徒は分担して証言者の聞き取りにまわった。なかでも印象に残ったのが一九四二年三月、七三一部隊に入隊した鈴木進さんである。二日目の夕食で、私たちは偶然鈴木さんと同じテーブルについた。鈴木さんは朴訥とした感じで、生徒の質問にボソボソと答えてくれる。短いが重みのある言葉だった。生徒のジュースがなくなるのをえらく気にしていて、ジュースが少なくなると何度もウエーターを呼んでくれた。

「マルタ」を収容した有名なロ号棟を、鈴木さんは作った。車の運転技術があったところから、鈴木さんは建設班に配属され、運搬を担当した。入隊したとき、まだロ号棟は外見しかできていなかった。できたとき、これは牢屋だと思った。そこにはすぐ「マルタ」が入ってきた。「マルタ」がどうなるかは誰にでも分かった。棟が完成すると、その後は七三一部隊の資材運搬のトラック運転手として勤務した。

鈴木さんの弟も七三一部隊の少年兵だった。弟さんは毎日、「マルタ」の解剖をしていた。生体解剖の話は弟さんからいつも聞いていた。医者でも人間の心臓を傷つけずに取れるようになるのに、普通は八年かかる。ところが七三一部隊では毎日やっているから、すぐにベテランになりうまくなった。弟さんは腸チフスに罹り、ここで亡くなった。

鈴木さんの隣には奥さんが座っている。奥さんは鈴木さんの話に相槌を打っている。実は奥さんもこの部隊に勤務しており、二人は戦争中に部隊内で結婚した。奥さんは総務部管理課に所属し、庶務を勤めていた。二人は新婚時代を過ごしたこの地にもう一度来たかった。七三一部隊罪証陳列館の新館を見学したとき、展示されていたパノラマ写真に若き日の奥さんの姿が写っていた。奥さんは『悪魔の飽食』に出てくる大月あいさんの友人で、本では大月さんが毒殺されたとなっているが、自殺だったということである。七三一部隊は敗戦で撤退、奥さんは引き上げ列車のなかで産気づき、ロウソク一本の明かりで出産した。出産三日後に乳飲み子を抱えて川を渡っ

たが、その子は栄養失調で死んでしまったという。

七三一部隊は撤退するさい、すべての「マルタ」を殺して焼いた。鈴木さんはその骨を松河江に運んだ。シンポジウムの合間に、鈴木さんは奥さんとその場所を訪れた。ハルビンの市街を流れるこの大きな川を私も生徒と訪ねてみたが、その豊かさに心が洗われる思いだった。川べりでは中国の人々が楽しげに踊りを踊り、隣接する市場には人と物がごった返している。だが鈴木さんはこの松河江に、五〇年前のできごとをオーバーラップさせていたにちがいない。

鈴木さんは五〇年間、この経験を誰にも言えなかった。つい最近まで夜になると幽霊が出てきて、追い払おうと夢中になった。気がつくと奥さんを殴っていた。幽霊が恐ろしくて、奥さんと間違えてしまったのだ。昨年初めて、七三一部隊の証言を決意した。話すようになって、幽霊はピタリと出なくなった。取材から帰って藤谷が言った。「鈴木さんはボソッとして多くをしゃべらなかった。最初、当時のことをどう思っているのか分からなかった。でも心の奥で深く傷ついているんだと思った」。

□新宿の人骨を返して

七三一部隊の「マルタ」を死刑囚だと思っている人がいる。「どうせ死刑になるなら医学のために」というまやかしだが、実際は死刑囚は一人もいなかった。死刑囚ならば公的に処刑される。

「マルタ」は憲兵によって非合法に連れてこられた人たちだった。その全員が無実の人たちだった。三〇〇〇人もの犠牲者がありながら、非合法だったがゆえに、遺族の特定が非常に難しくなっている。一人の生存者も残さなかった、徹底した虐殺が難しさに輪をかけている。敬蘭芝さんは、そうした中で判明している数少ない遺族の一人である。生徒は敬さんのお話を伺うことができた。

敬さんの夫はソ連のスパイだった。地下の抗日組織「牡丹江情報部」のリーダーだった。夫がスパイだということは、結婚後知った。だが日本軍の残虐さを目の当たりにして、敬さんは進んで協力した。夫は日本軍の情報を、無線機でソ連に流した。発信は夫が行い、敬さんは外で見張りをした。

一九四一年七月、日本の憲兵がやってきて、夫を連行したと言った。「無線機をどこに隠した」と家のなかを探したが何も見つからなかった。結局敬さんも憲兵隊に引っ張っていかれ、憲兵の取り調べにあい、何度も革のベルトで打たれた。「何も知らない」と言うと、裸にされ太い棒で打たれた。これは死ぬ、と思い腕で防ぐと、腕の骨が折れた。それから別の部屋に運ばれた。そこには夫がボロボロの状態で跪(ひざまず)いていた。憲兵は夫の目の前で敬さんを打ち始めた。気絶すると水をかけ、何度もくり返した。夫が「妻は何も知らない」と言うと、今度は夫を打ち始めた。だがどんな厳しい拷問にも何もしゃべらなかった。

二日後に敬さんは釈放された。夫とはそれが最後だった。二カ月後、地下組織の仲間の一人から、敬さんは夫がハルビンに連行されたという情報を得る。すぐにハルビンに向かうが、結局門前払い。憲兵の話では「平房」の大きな監獄に行ったとのこと。それが七三一部隊だった。終戦後夫の帰りを何年も待ったが、二度と戻らなかった。

一九八六年、敬さんはようやく真実を知ることになる。七三一部隊を調査している韓暁氏が敬さんを探しあて、訪ねてきた。日本軍の憲兵が残した書類のなかに「朱之盈(チューチーイン)」という人名がある。それが敬さんの夫の名前だった。夫は七三一部隊の人体実験の材料になっていた。敬さんがそれを知ったのは敗戦から四〇年たってのことだった。

新宿の陸軍軍医学校跡地で人骨が発見されたとき、敬さんはその骨のなかに夫の遺骨があるかもしれないと思った。鑑定の結果、人骨はアジア人のもので、当時七三一部隊で行われた開頭手術や銃弾の跡があった。「日本政府は真相を明らかにする責任があります。中国人の骨ならば私たちに返してください」と訴える。その目には涙がにじんでいた。

□消えた告訴状

七三一部隊は撤退時にペストネズミを放出し、近隣の村々でペストが大流行した。そのとき、家族一二人をペストで亡くした被害者の靖福和さんは、「白ネズミがやってきてペストが流行っ

た」と語っている。これは、私たちのテーマとも深いつながりがある事件だ。ペストは終戦の翌年の夏、三つの村(後二道溝村(ホウアールタオコウソン)、義発源村(イーファーユアンソン)、東井子村(トンチンツーソン))を襲った。三つの村はいずれも七三一部隊から五キロ程北東に位置し、部隊からもっとも近い。七三一部隊の敷地内の北東の一角にはペストノミを繁殖させる飼育場があったのだ。三つの村で一三〇人が死亡。やっと平和になった村に、ペストというもう一つの戦争が襲った。ハルビン到着の翌日私たちは、韓暁氏と山邊さんの案内で三つの村を歩き、一〇人の証言者と会った。

この村の人々が書いた告訴状が、近年公表されている。一九五六年に開かれた中国の特別軍事法廷では、中国に残った七三一部隊員が裁かれている。その法廷の告訴資料として作られた『日本軍細菌戦に関する調査書』には、義発源村と東井子村の二枚の告訴状が含まれていた。

義発源村の告訴状は陳芳栄(チエンファンロン)という人物が代表者になっている。告訴状には、ペスト禍の恐怖のありさまが述べられたのち、「亡くなった者を思えば、決して七三一部隊を許すことはできない」と結ばれている。最後にペストに倒れた三五人の村人の氏名が連記されている。東井子村の告訴状では、三八人の犠牲者の名が連ねられ、なかには家族全滅の例もある。最後に「七三一部隊員を国際法廷で厳しく罰してほしい」と訴えている。この叫びは、三つの村のすべての農民の気持ちだった。

だがこの告訴状は結局、日の目を見なかった。日本との国交回復をめざす中国政府上層部に

よって、村人の叫びはもみ消された。戦犯を早く返すことが中国政府の方針だった。戦犯の罪を重くするような告訴状は排除される運命にあった。特別軍事法廷では、七三一部隊の犯罪行為としては、細菌の大量製造が挙げられたのみで、三つの村の悲劇は闇に葬られた。告訴状を作成した人々の努力は報われず、そのほとんどの方がもはやこの世を去っている。告訴状はその後もずっと埋もれたままだった。日本がこの村の悲劇を知るには、韓暁氏などの研究者の掘り起こしを待たねばならなかった。ここでは韓暁氏の案内で会ってきた一〇人のうち、六人の被害者の証言を紹介しよう。

撤退のさい、破壊された部隊跡地にはさまざまな残骸が残っていた。大量の細菌爆弾が無残な姿を晒していた。村人はまだ使用できるものを求めて、そこに集まった。村人はそこで大量のネズミを見て驚く。義発源村の缶振坤（ユエチエンクン）さんは「衣服、軍靴など軍人が着用するいろいろなものがあった。ほかに試験管や実験器具もあった。細菌培養器も拾ってきた。それはいま韓暁先生の七三一陳列館にあります」。趙汝昆（チャオルークン）さんは「ネズミがたくさんいた。白ネズミで、黒い線が入っているのもいた。あっちこっちにウロチョロしていた。ハタリスもいた。私たちはたくさんのハタリスを捕まえて、七三一に送ることを義務づけられていたが、そのネズミだった」と語る。

東井子村の郭良崑（クオリアンクン）さんは、「村で四〇人以上が死んだ。一人をお棺に入れて運び、帰ってくると次の人が死んでいた。父は腋の下にグリグリができて三時間後に亡くなった。ネズミとノミが

いっぱいいたが、それがペストの原因だとは思わなかった。真実を聞いたときは、これはもう日本人は憎んでも憎みたりないと思いました」。曹洪志(ツァオホーチー)さんは、「近所の家は四人がつぎつぎに亡くなり全滅した。最後に幼い孫が亡くなった。あんなことをした日本人には恨み以外の何もない。しかし今日私の話を聞きにきてくれたことについては、こんなにうれしいことはありません」。秦青山(チンチンシャン)さんは、「このできごとは学校でも教えられている。小学校一年、つまり七歳から教えられている。いまでもこの村では、ペスト防止のためのネズミ退治の運動が行われている」。

ペスト禍が起きると、防疫隊が村にやってきた。防疫隊に感謝する証言も多い。後二道溝村の李雲祥(リーユンシャン)さんは、「防疫隊はまっ白い靴下にまっ白いマスクをかけた白装束。私たちが死地から帰ってこられたのは、この人たちの必死の救護活動によるものです」。義発源村の缶振坤さんは「村人全員が防疫隊の指示で、ノミ避けのための白い靴下を履いた。素早い処置をしたため流行が収まった」と語る。次はこの防疫隊のある証言者を紹介したい。

□ペストネズミに奪われた半生

ペスト禍が確認されると、ハルビン市では急遽防疫隊が組織。村は封鎖され、村人は村を出ることが許されなかった。当時この処置は厳格すぎると非難されたが、いまでは村人もよかったと考えている。死体は解剖されペストの感染が調べられた。ペストは七三一部隊が研究していた

「腺ペスト」だった。

防疫隊は感染ルートを確認するためネズミを調査した。ハタリスからペスト菌が発見された。それは七三一部隊が大量捕獲したものだった。もともとこの三つの村は疫源地、すなわちペストが自然発生する場所ではない。ペストはいったん散布されるとコントロールがきかなくなる。三つの村は現在に至るまでずっとペストと闘い続けている。ペスト禍の悲劇は一回で終わらない。

生徒は、ペストと闘った防疫隊の医師、佟徳敬(トントーチン)さんにお話を伺った。佟さんは穏やかな口調で、思い出すように過去を語った。日本語が堪能で、直接質問できた。当時佟さんは松江(ソンチアン)省衛生局に勤務、ペストの知らせとともに防疫のため、各村を飛びまわった。その惨状は口では言い表せない。

だが問題はペストだけではなかった。働き手を失い、家そのものが崩壊していく。作物の収穫もできない家が続出する。佟さんは、近所の農家で助け合い、つぶれそうな家も収穫できるように助言した。ペストは一九四六年から九年間のあいだ、平房周辺で発生し続けた。しかもその後もずっと、村はペストの危機に脅かされてきた。ペストとの闘いも、村の崩壊との闘いも、長期戦だった。

五〇年前にペスト禍と闘った佟さんは、その後のすべての人生を防疫活動に捧げることになる。毎年一定の季節になると佟さんは、いまでも村々をまわりペストの防疫活動をしている。佟さん

はそのとき必ず、七三一部隊がペストネズミを放たなければ、ここは一個のペスト菌もいない地だった。五〇年間の私の仕事は何だったのだろう。五〇年前の事件がなければ、私の仕事は存在しないはずだった。私には本来別の仕事があった。村の衛生管理や水の問題など、しなければならない仕事は山積みである。だがたった一度のペストネズミの放出によって、私は五〇年間それと闘わねばならなくなった。石井四郎は医者だったと聞いている。私も医者である。医者の務めとは何か、私は石井に聞きたい」。

地方病防疫研究室では、五〇年間この地域でネズミの捕獲を続けている。いまだにペスト菌をもったネズミが発見される。それは七三一部隊のペストネズミが継承したものだと、同研究所は考えている。ペストネズミはいまもなお生き続けていた。この村では七三一部隊の歴史はまだ終わっていない。佟さんの医師としての半生はペストネズミに奪われてしまった。

□七三一部隊の遺跡を歩く

ハルビン滞在中、生徒は中国の人々の重たい証言を受け止めた。証言の一つひとつを心に秘めて、私たちは七三一部隊の遺跡を訪ねた。ここでは遺跡の保存状態を含めて、生徒の足取りを紹介したい。

七三一部隊があった平房は、ハルビン市から車で三〇分ほど行ったところにある。七三一部隊

は撤退時に建物を破壊したが、破壊しきれなかった遺跡がいまも平房の地に点在している。それらは無言のうちに七三一部隊の非道を語っている。残った建物の一つが現在、七三一部隊罪証陳列館となり、そのまわりに一三の「小遺跡」がある。小遺跡の一つ、有名なボイラー室も罪証陳列館から見ることができる。

七三一部隊罪証陳列館に入った。レンガ建ての、ハルビンらしい建物である。日本中を横断した七三一部隊展の展示物は、ここから借りたものだった。ペストノミを詰めた宇治式爆弾や、アメリカが朝鮮戦争で使用した細菌爆弾も展示してある。ネズミの剝製、飼育箱、捕獲器などネズミ関係の展示もあった。壁には石井四郎の写真があり、小谷中に似ていると評判の北野政次の写真もある。二階には隊長室と拷問台があった。台に染みついたシミが拷問の凄惨さを物語っている。隊長室は石井四郎の部屋だったが、いまは陳列館の事務室になっている。

陳列館に続いている第一七高級中学校も七三一部隊の建物。七三一部隊が皮肉にも学校になったわけだ。「マルタ」を運んだ憲兵の待機室や調査室、事務室がいまは教室として使われている。一見普通の教室だが、よく見ると地下への秘密階段があったりする。中央階段の奥には「マルタ」を収容したロ号棟へ続く通路があり、いまは鉄の扉で閉ざされている(ロ号棟は破壊されて残っていない)。この学校の学生はここで七三一部隊の歴史を学んでいるのだ。

そのすぐ近くに七三一部隊罪証陳列館の新館が建設中である。私たちが訪ねたときはほぼ完成

していた。七三一部隊展のカンパ一〇〇〇万円が、この新館建設に寄付された。人体実験の生々しい人形が並ぶ。「死千鼠疫的靖福和一家人」と題して、靖福和さんの家の悲劇もパネル展示されている。「凍傷実験や生体解剖の人形は残酷だが、日本人観光客はまずここを訪れるべきだ」と野沢は言った。

有名なボイラー室へ行く。七三一部隊が内側から爆破したが、ついに崩れなかった頑丈な建物である。七三一部隊といえば、「お化け煙突」と呼ばれる、この遺跡を思い出す人も多いだろう。巨大な壁が屹立する異様な光景は、現代芸術のオブジェのようだ。近くに寄るとその不思議な姿に圧倒される。日本人が来るのを拒むような存在感がある。ここはなぜか糞だらけで、小谷中が二度にわたって踏んでいた。

死体焼却炉はそのまま残っている。映画『黒い太陽』ではこの死体焼却炉が何度も出てきて印象的だった。焼却炉はいまも現役で、民間企業がボイラー室として利用している。空を突き刺すような高いレンガの煙突が特徴的だ。「この焼却炉で働いている人は、ここで『マルタ』が焼却されていたことを知ってるのでしょうか」と小谷中が私に言った。そこに住み込みで働いている人をまえに、なんとなくその質問ができずに終わってしまった。

それから吉村班冷凍室に行く。現在は合成アルミ資材の倉庫として使われている。中は薄暗く、「怨霊が出そうですね」と藤谷。生徒はここで凍傷実験が行われたのを知っている。壁には「マル

タ」を引っかけたという金具がいまも残っている。いまは窓が付けられたが、当時は実験を観察する小さな覗き窓だけで、中はまっ暗だった。
その近くに巨大なネズミ飼育場が残っている。床全体がコンクリートで仕切られた飼育穴でできている。この奇妙な建物に三万匹のネズミが飼われていた。ネズミの種類はおもにハタリスだった。このそばには「小動物実験室」と呼ばれる施設があり、そこでも大量のネズミが飼育されていた。この施設は地下室で、生徒が入ろうとしたが水浸しで進めなかった。中には飼育箱を乗せる棚がズラリと並んでいる。私たちは、とりあえずネズミ関連の施設を見たことに満足して平房を去った。

ハルビン市内にも七三一部隊関連の施設がある。まずは石井四郎の邸宅。写真を撮ろうとするとガードマンににらまれた。この建物はいま、黒龍江省知事公邸なのだ。警戒厳重である。ウロチョロしていると、ときどきガードマンと目が合う。「怪しまれるから帰りましょう」と藤谷、私は遠くからそっと写真を撮った。石井邸の隣には七三一部隊分室がある。そこはスプレーで落書きがしてあった。「中国にもこんなことをするやつがいるんですね」と藤谷は少しがっかりした。
ハルビン市内の関連施設で有名なのが「花園旅社」である。ここは戦前の日本領事館だった。その地下室には七三一部隊へ送られる「マルタ」が収容されていた。本来国の代表である領事館

が、当時は「マルタ」を「一時保存」していたとは。領事館までグルだったのだ。「マルタ」が収容された地下室に入ってみたが、そこはいまでもホテルとして使用されていた。「叫び声が聞こえてきそうですね」と藤谷が言った。

私たちはなるべく博物館を訪ねるようにした。どの博物館も日本軍の残虐性を、これでもかこれでもかと展示していた。東北烈士記念館には南京大虐殺の写真のなかに「三〇〇〇〇〇」の数字が壁いっぱいに書かれている。七三一部隊のコーナーもある。中国人民革命軍事博物館では二階のほぼすべてが抗日戦争の展示だった。ただしここは南京大虐殺の展示はあったが、七三一部隊はなかった。若い軍人がそれを熱心に見ていた。中国人民抗日戦争記念館には七三一部隊のコーナーがあり、生体解剖の模型もあった。この博物館はそのすべての展示が日本軍に関するものである。村山首相が訪ねて話題になったが、一度は行くべきところであろう。ここまで徹底した中国の博物館の展示ぶりに、さすがの生徒も暗くなった。だが中国の人々がこうした展示を見ていることを、私たちは認識しなければならない。

抗日記念館をまわっているとき、中国の大学生が話しかけてきた。その大学生は初め小谷中に話しかけたのだが、小谷中がビビッて逃げたのだ。大学生は私に「日本人はこれを見てどう思うか」と迫った。真剣なまなざしだった。大学生は、記念館の近隣の家々を訪ね歩き、日本軍の残虐行為の聞き取りをしてきたばかりだと言っていた。私は訪中の目的を告げ、しばらく話し合っ

た。大学生は「日本人、そして日本の若者はこのことを知っているのか」という点にこだわった。しかし「知っている」と私には答えることができなかった。

東北烈士記念館では、たまたま毒ガス展をやっていた。日本軍が残した毒ガス弾に、いまもなお中国は苦しんでいる。「毒ガス展」は、中国人以上に日本人が見るべきものだろう。「観光客は観光地に行くまえに行かなければならないところがある」という野沢の言葉に、七三一部隊遺跡をまわった気持ちが込められていた。

□ハルビンの高校生と会う

シンポジウム実行委員会の協力で、ハルビンの高校生と交流会を持つことができた。ホテルの一室で生徒は四人の現地高校生と三時間にわたり懇談をした。女子高生が三人で張(チャン)さん、黄(ホワン)さん、竜(ロン)さん、男子高生は安(アン)君一人だった。引率の先生が四人を連れてきた。話の進行役は小谷中が務めた。

始まるとすぐに驚かされた。野沢が「中国の高校生は七三一部隊について、どの程度知っていますか」と聞いたところ、安君が「ハルビンには七三一部隊を知らない高校生はいません。愛国主義の授業で勉強しますし、資料館や本でも学びます。だから日本軍についてたくさん知っています」と答え、七三一部隊の説明を始めた。安君はまず石井四郎が撤退時に発した三つの命令を

スラスラと暗唱したあと、盧溝橋事件から国共合作までの抗日の歴史を一気にまとめた。七三一部隊の説明もし、「日本軍国主義の誤り」も的確に組み込まれていた。

生徒は度肝を抜かれた。いったい石井四郎の「三つの命令」を暗唱している高校生が、日本に何人いるだろうか。地歴部の三人だって怪しいものである。安君の話はまるで『悪魔の飽食』を朗読しているみたいだった。そのよどみない言葉に圧倒され、しょっぱなから日本の三人はタジタジとなった。即座に「日本の高校生はどうですか」と切り返され、野沢が「受験勉強が中心です」と答えると、「それは残念なことです」と安君にまとめられてしまった。

それから日本と中国の互いの歴史の教科書を交換しあった。小谷中が「日本軍の残虐行為が触れられていないのが現状です」と説明。その日本の教科書には「七三一部隊」は一言も載っていない。逆に中国の教科書は半分ぐらいが「抗日戦争の歴史」だった。日本軍の犯罪行為が詳細に書かれている。同い年の彼らが同じ一つの事件をそれぞれの学校で学びながら、その内容はとてつもなく隔たっていた。分かってはいたが、実際に見て改めて驚かされた。これでは日中の若者は、共通の認識の土壌に立てない。

女子高生が家族の話を始めた。張さんが「私の祖父は日本軍に捕まり収容所に入れられました。五年後に解放されましたが、何も食べられず、まもなく死にました」、黄さんが「祖父の兄は日本軍に殺され、麻袋に入れて川に捨てられました。この話は何度となく両親から聞かされていま

す」と語る。生徒は、同い年の高校生が戦争の爪痕のなかに生きているのを知り、日中の差に言葉を失った。竜さんが「すぎたことは水に流しますが、歴史の事実は忘れないでください。歴史の教訓を胸に刻んで、くり返さないでほしいのです」と付け加えた。彼女は小さいころ解放軍にあこがれ、解放軍の戦士になることが夢だったという。

議論があまりに日本に不利なのでかわいそうに思ったのか、竜さんが「原爆を落としたアメリカをどう思いますか」と話題を変えてきた。野沢は「日本は中国にまだ謝罪をしていません。その裏返しでアメリカに抗議する姿勢も弱いのです」とみごとに日本の体質をまとめた。ようやく日本側高校生が盛り返した。私は横槍から、いじわるな質問をした。「中国はいま、核兵器や細菌戦を開発していますが、どう思いますか」。竜さんはそれに対し「昔、日本は細菌戦を使いました。防御のため中国も必要なのです」。高校生とは思えない鋭い切り返しだった。

戦争の話ばかりしていたわけではない。互いの学校生活が語られ、校則問題や体罰問題まで議論は及んだ。「好きな日本人は誰ですか」の質問に、安君は「酒井法子と山口百恵。でもかわいい宮沢りえは、なぜ太った貴ノ花が好きなのでしょう」と答えた。逆に安君に「中国の俳優では誰が好きですか」と聞かれ、困ってしまった。中国の俳優を誰も知らないのだ。「ジャッキー・チェンは香港ですね」と藤谷が言うのが精いっぱいだ。「中国の戦争の歴史」を大上段に振りかざしても、私たちはこんなことすら知らないのだ。

最後に生徒は、ハルビンの高校生に贈り物をした。八王子市立石川中学校の中学生が作った紙芝居『不忘』である。七三一部隊の残虐な歴史をしっかりと物語りにした作品である。中野の七三一部隊展実行委の方々から託されたものだ。それを見たハルビンの高校生は、大きな声をあげて喜んでくれた。高校生たちは握手をしあい、住所を教えあって別れた。「私たちの代からは仲良くしましょう」と竜さんが言った。

ハルビンの高校生は澄んだ目をしていた。自分の意見を持っていて、それをはっきりと主張していた。私はたくさんの日本の高校生を相手にしているが、もう日本では会えないタイプの若者だった。ハルビンの高校生を見ていると、あまりのすばらしさに「日本は滅びるのでは」という気がしてくる。その気分を挽回してくれたのが、野沢の感想文「高校生交流会を終えて」だった。

「遠藤先生は、日本の学生で彼ら程の目をしているやつは滅多にいないと言った。その時、自分も死んだ目をした日本の学生の一人なのではないかと感じた。中国の教育が戦争問題を重視しているのに対し、日本の教育が歴史を否定しようとしているのが情けなかった。だがハルビンの高校生に、ひっかかることもあった。彼らには自から動いて歴史を究明しようという姿勢は感じられなかった。それだけ中国の歴史教育がすばらしいのかもしれない。だが国家の教える教育を鵜呑みにするだけではなく、自分たちで調査し、考える姿勢も必要なはずである。

今回交流した四人から見習わなくてはならないことがたくさんあると思う。死んだ目をした学

生を生き返らせるのは難しいかもしれないが、私も安君のような日本人にはない力を持ちたいと思う。私たちは中国に新しい友人ができて、とても良かった」

□高校生意識調査

中国に行くまえに、日本の高校生の意識の例として、庄和高校生を対象にアンケートを取ってみた。「七三一部隊を知らない高校生はいない」中国に比べて、庄和高校のアンケートでは「七三一部隊を知っている」のはわずかに一四%にすぎなかった。それもおそらく「言葉」を「知っている」程度だろう。「学校できちんと教えられなければ、私たちは中国の若者と同じ地平に立つことは永久にできない」と、このアンケートをまとめた阿部が書いている。

ペスト流行村をまわったとき、七三一部隊の事件は学校で小学一年生のときから教えられている、と現地の中国人が話していた。ある研究者が満州で聞き取りをしているとき、現地の子どもに飴をあげたら、「日本人がくれる食べ物には毒が入っている」と言われたそうだ。中国では小さな子どもまで、細菌戦の話が語り継がれている。それに対し私の高校に入ってくる生徒は、一〇年近い社会科教育を受けながら、七三一部隊について一度も教えられずに来ている。

九五年夏『毎日新聞』は第二次大戦の諸事件について、それをどこで習ったかアンケート調査を行った。「原爆」は八四%が学校で習っているのに対し、「七三一部隊」はわずか一四%にすぎ

ない(この数字は庄和高校のアンケートとぴったり一致している)。「南京大虐殺」の三四%に比べても極端に低い(一九九五年八月一五日付)。

庄和高校生のアンケート結果に戻ろう。「この地域でネズミ飼育が行われていたことを知っていたか」は「知らない」が九〇%。新住民が多く、すでに飼育が行われていない現状から考えれば、当然の結果だろう。「細菌戦を知っていて、あなたなら飼育したか」という、飼育農家にしたのと同じ質問では、「飼育しない」が七六%。これは飼育農家に聞いた結果が二三%だったのに比べ、はるかに明解な結果である。ところが「飼育者に責任はあるか」に対しては「ない」が八五%で圧倒的である。その理由は「知らなかったから仕方がない」がほとんどだ。

「日本は中国に謝罪するべきか」の回答は、「謝罪すべき」がわずか三〇%だった。ところが、同じ生徒に「TBS報道特集」のビデオを見せ、若干の解説を加えたあと、同じ質問をすると「謝罪すべき」は八九%に跳ね上がった。これは最近の高校生が、教員の望むほうに丸をつける傾向があるのを差し引いても、大きな変化だ。いかに日本の加害の歴史を、知らないで答えていたかが分かる。

私は社会科の授業でも「七三一部隊と埼玉のネズミ」の話をした。高校生はまず人体実験の事実に衝撃を受ける。結構マスコミで報道されているのに高校生はほとんど知らない。次に「地元でこんなことが」と驚く。「聞き取りカード」を宿題にし、回収したものを整理し発表する。クラ

スメートの家が飼育をしていたことが分かり、ネズミの問題がリアルなものになる。そのときの生徒の感想を紹介しよう。

「こういった事実を知らないで過ごしてきたことがショックでした。人を殺すために飼育されたネズミ。人体実験をされた中国人。命を粗末にしたことを日本人は恥じるべきなのに、今はのうのうと過ごしています」「ビデオを見てショックを受けました。なぜなら母の家でもネズミを飼育していたからです。でもこの事実を隠してはいけないと思います。人体実験をされた人がうかばれません」「この町で細菌兵器の道具としてネズミが飼育されていたことに、とても驚きました。戦争というものをこんなに身近に感じたのは初めてでした」「おばあちゃんとひいおばあちゃんがネズミを飼っていた。七三一部隊のことを話したら、飼わなければ良かったとおばあちゃんは言った。ネズミのことは知っていたけど細菌戦のことは知らなかった」「驚きました。でも自分の足で、目で事実を調べた阿部君たちは、ビデオで見た私たちより、何か大きなものを感じたのではないかと思います」

この感想を地歴部の生徒に見せたら、一般の生徒が予想以上に関心を持ってくれたことに、感激していた。たったこれだけのことでも、高校生は七三一部隊の史実を受け入れ、「中国に謝罪すべき」と考えるようになる。「原爆」に比べ「七三一部隊」がいかに教えられてこなかったか、私を含め教員は反省するべきであろう。

4. 靖福和さんとの出会い

□一年ののちに

中国でのシンポジウムに参加した前年の九四年一〇月、「ネズミと七三一部隊」の調査を始めた矢先に、生徒は靖福和（チンフーホー）さんに出会っていた。そのとき、生徒も私も靖さんの証言の重要性に十分気づいているとはいえなかった。だが、それから一年間、ネズミの調査を進めれば進めるほど、靖さんに取材できなかった失敗は重くなっていった。その間私たちは飼育農家、ネズミ屋、七三一部隊員、厚生省などを取材したが、結局はすべて加害側の聞き取りである。この調査はネズミによって苦しめられた被害側の人々を取材しなければ、完結しないではないか。その問いに答えてもらうのにもっともふさわしい人は、どう考えても靖福和さんだった。書物で中国の証言者を調べても、靖さん以上に白ネズミにこだわっている人はいなかった。調査を重ねるにつれ、生徒

はだんだんそのことに気づいていったのである。
ハルビンで七三一国際シンポジウムの開催が決まり、生徒が招待されたとき、だからまっ先に思ったのは「靖さんに会える」ということだった。生徒はすぐシンポジウム実行委に、靖さんに会うセッティングをお願いした。いまなら調査も進み、靖さんに報告できる内容もある。靖さんとの「再会」の期待は、この一年間の悔いがあったため、いっそう募っていたのである。実行委の返事は「靖さんはシンポジウムに参加しますからきっとお会いできますよ」というものだった。通訳などの不安はあったが、チャンスはもう一度訪れたのである。中国へ旅立つとき、生徒の頭にあったのはシンポジウムの発表よりも靖福和さんへの報告だった。
靖さんは生徒の報告をどう思うだろうか。靖さんは日本に対して深い恨みをもっている。憲兵で「マルタ」の輸送をした三尾豊さんは、被害者の遺族から厳しい糾弾を受けていた。三尾さんは人体実験をしたわけではない。だが憲兵も、中国から見れば七三一部隊の一部だった。私たちの町も七三一部隊の一部であると糾弾されれば、それは受け入れなくてはならない。生徒にその覚悟はできているだろうか。
あるいは、ネズミの生産地などどうでもいいことだと言われるかもしれない。もし靖さんにそう言われたら、生徒の一年間の努力は水泡に帰すだろう。不安は多い。どんな結果になるか分からない。だがそれでも、この調査は最後に靖さんに聞いてもらわなければ、意義がないのだ。

□靖さんの村を訪ねる

ハルビンに着いた翌日、私たちは靖さんの村を訪ねた。生徒は緊張していた。インタビューは野沢が担当することに決まっていた。質問項目はすでに話し合っていたが、それがうまく通じる自信はなかった。

この訪問はシンポジウム実行委が企画してくれたものだった。したがって私たち以外にもかなりたくさんの人数が参加していた。その人たちの質問も、おそらく靖さんに集中するだろう。野沢は大人の研究者たちに混じって、自分の意見を言えるだろうか。ネズミの話はかなり入り組んでおり、しかも私たちの問題意識はそれ以上に理解しにくいと思われた。

バスは広い草原のなかを走っていく。建物はどれもレンガ造りの一階建てで、美しい。家のなかは土足で、部屋の中央にテーブルがあるだけのシンプルな造りだ。道端には馬やロバが寝そべっている。家が集中しているわずかな空間を除けば果てしない大地があるだけである。バスは砂ぼこりをたてて走っている。

靖さんの住む村は後二道溝村（ホウアールタオコウソン）という。七三一部隊は撤退のさい建物を破壊し、ペストネズミを放った。これは日本の細菌戦部隊の常套手段だった。故意にやったという証拠はないが、中国の被害者はそう思っている。ペストネズミは近隣の三つの村を襲い、それらの村はペスト禍に見

舞われた。後二道溝村は七三一部隊からわずか三キロでもっとも近く、最初にペストが流行した。三つの村で二ヵ月間に約一三〇人が死んだ。それまでは一度もペストが発生したことがない村だった。

後二道溝村に着いた。バスを降りると、村の人たちがもの珍しそうに出てきて、たちまち集会のようになった。案内役の韓暁（ハンシャオ）先生が靖さんを連れてきた。韓暁先生は七三一部隊罪証陳列館の元館長で、著書の『七三一部隊の犯罪』は日本語訳されている。このペスト禍の事件について最初に調査した人物である。靖さんは白髪で、年齢は六一歳だが、背筋がまっすぐで堂々としていた。サングラスをかけていて、このときはちょっと怖かった。靖さんは体験を語り始め、山邊悠喜子さんが通訳した（靖さんの体験についてはあとで詳述する）。

靖さんの話が終わり参加者の質問が始まった。研究者の専門的な質問のなかで、野沢はタイミングがつかめなかった。埼玉のネズミの話を延々とする状況ではなかった。私たちの靖さんへの報告は一言ですむものではない。野沢は困惑していた。

研究者の質問が終わり、参加者が帰りかけたとき、野沢は靖さんに話しかけた。山邊さんはすぐに通訳してくれた。野沢は自分たちのしている調査の概要を説明し始めた。靖さんは突然の若い訪問者の話が分からなかったようだ。でもまっすぐに野沢の顔を見て、野沢の話を真剣に聞いていた。野沢と靖さんのあいだで何かが始まったので、同行したNHKや現地のテレビ局がカメ

ラを回し始めた。ふたたびみんなが集まり二人を囲む形になった。野沢は懸命にしゃべっていたが、この状況では私たちの話は伝わりにくい。通訳も難しい。その話をじっと聞いたあと、靖さんは野沢にこう言った。

「ここに来られて私たちの証言を聞き、また七三一部隊の問題を調査されているのは非常にうれしい。日本に帰ってからは、私たちのこの叫びを人々に伝えてください。共にがんばりましょう」

靖さんのこの言葉を聞いたとき、私は話が伝わらなかったな、と思った。ところがふと野沢の顔を見ると、彼は泣いていた。なぜ泣いているのかそのときは分からなかった。野沢は、靖さんから励ましの言葉を聞いただけで涙が出たらしい。私は生徒の調査が伝わるかどうかばかり気にしていた。野沢は話が通じる云々以前に、靖さんに会えたこと自体に感動していた。この瞬間に一年間の彼の努力が凝縮していたからだろう。

□白ネズミの疑問がとけた

翌日ホテルで朝食をとっていると、シンポジウム実行委員長の渡辺さんが「靖さんがいるから、いっしょに食事をとろう」と誘ってくれた。靖さんもシンポジウムに参加するためホテルに来ていたのだ。私たちは靖さんのテーブルにつき、改めて自己紹介した。予測もしていない展開であ

る。通訳は同席した王さんがしてくれた。昨日は充分な話ができなかった、と私は言った。野沢は、今度は落ち着いて訪中の目的を話し始めた。
「私たちの町では皆ネズミを飼っていました。私たちの家族も飼っていました。そのネズミを七三一部隊に送っていました。靖さんの本を読んで、私たちの町のネズミが靖さんの村でペストを流行させたのではないかと思いました。そして私たちはネズミの歴史を調査しました。それを靖さんに報告することが今回の訪中の目的なのです」
靖さんは微笑みながら野沢の話を聞いていた。概略ではあるが意味は通じているようだ。今度は靖さんが口を開いた。
「ありがとう。白ネズミがどこから来たのかずっと不思議に思っていました。当時、私は子どもでしたが、このネズミはどこから来たのかと大人に聞いてまわったのです。長年の疑問がいま解けました。私はその話をもっと聞きたい。あとでゆっくり教えてください」
それから野沢はごくしぜんな感じで付け加えた。
「私たちの町のネズミが結果的に靖さんの村にご迷惑をかけたことを申し訳なく思っています」
すると靖さんはきっぱりとこう言ってくれた。
「それは違います。あなたにも、またネズミを飼っていた家族にも罪はない。悪いのは日本軍国主義なのです。私たちはそれをはっきり区別しています」

最後に、野沢が靖さんの体験を日本の人々に伝えたいと言うと、靖さんは喜んでこう答えてくれた。

「あなた方はもう私の友人です。私の家に来てください。いまこの瞬間から私たちは友人なのです。そしてネズミの研究をぜひ皆に伝えてください。いままで見たこともなかった白ネズミが村にあふれました。私はそれを捕まえて聞いてまわったのです。大人は、それは七三一部隊のネズミだと言いました。でもそれがどこから来るのかは分からなかったのです。あなたの話を聞いてそれが分かったのです」

野沢は、昨日が緊張のピークだったのだろう。いまは落ち着いて話している。朝食なのでそれほど長い時間ではなかった。でも靖さんは間違いなく私たちの話を理解してくれた。しかも靖さんは白ネズミに強い恐怖感と疑問をもっており、野沢の話に興味を示していた。しばしば日本を恨む発言をしていた靖さんが、私たちを「友人」と呼んだのである。話が終わったとき、委員長の渡辺さんが「すばらしい交流だった」と言った。私たちは靖さんと、もっとゆっくり話し合う約束をしてテーブルをたった。

▣ 報告は靖さんに通じた

八月一日、私たちの発表のときが来た。円卓のテーブルを囲み、さらにそのまわりを参加者や

報道陣が囲んでいた。司会の松村高夫先生の隣に生徒三人は座った。私は反対側でビデオを撮っていた。そして驚いたことに生徒のほぼ正面に靖福和さんが座っていた。

発表は野沢、小谷中、藤谷の順で行った。都合一時間にも及んだが、靖さんは終始生徒のほうをしっかりと見据え、何度も「うん、うん」と大きくうなずいていた。通訳の徐さんがすばらしかったこともあって、生徒の発表は中国の人たちに完全に伝わった。とくに靖さんは、農民アンケートやネズミ屋の集荷ルートまで含めて完璧に理解してくれたと思う。靖さんが来ているので足が震えたと藤谷は言っている。発表を締めくくった藤谷は最後にアドリブでこう付け加えた。

「目の前に靖さんがおります。七三一部隊によるペストネズミで家族の大半を亡くされた方です。私たちの町の白ネズミとの関連を思うと心苦しい。私たちが中国に来た目的は靖さんにお会いするためでした。この発表はだれよりも靖さんに聞いていただきたかったのです」

藤谷の言葉を聞くと、靖さんは本当に大きくうなずいた。靖さんは「この若者の言ったことは真実です。私の村にはたくさんの白ネズミが来ました。そしてペストが流行ったのです」と語り、生徒のほうに近づいて握手を求めた。三人順番に靖さんと握手した。靖さんの手はゴツゴツして大きかった。力強い握手だった。司会の松村先生は「この発表は歴史的な出会いだった」と結んだ。

偶然にも、生徒の発表の次が靖さんの証言だった。司会の松村先生が仕組んだのだろうか。靖

さんの話は大半が生徒へのメッセージだった。

「昨日私はこの三名の高校生とお話をしました。今日またこの席ですばらしい報告を受けて非常に感動しています。報告は非常に細かく調査されたことがよく分かります。飼育したネズミの数字、輸送のルートなど多方面から立証されています。数字も具体的です。高校生でありながらこの調査をしたことはすごいと思います。七三一部隊の歴史的事実を立証したと思います。

白ネズミの話は私自身の体験と一致しています。私たちの村にはもともと白ネズミはいませんでした。七三一部隊が基地を爆破したあと、白ネズミが出たのです。それは爆発的に増えました。一ヘクタールの大豆畑があっというまになくなるほどネズミが増えたのです。全部ネズミに食べられたのです。私の家ではトウモロコシの倉庫があって、ある日見てみるとその表面はネズミでいっぱいになっていました。私はその白ネズミを捕まえて遊んだことがあったのです。当時七三一部隊で働いていた中国人が、白ネズミは七三一部隊の動物飼育班のものだと言いました。それから村にペストが流行(はや)り、私の知っているだけで一三〇名が死にました。いま考えてみると実際はこの数を大幅に上回ると思います。

埼玉ではネズミを増産して、需要があるので一生懸命やった。一方私の村では大人子ども関係なく、一人五匹ずつ強制的にネズミ取りをさせられました。報酬はまったくありませんでした。大人は仕事があるので、子どもだった私はその分まで毎日ネズミ取りをしました。みんながネズ

ミを取ったので村にネズミがいなくなり、遠くに取りに行ったほどでした。埼玉のネズミ飼育農家と同じように、なぜネズミを捕獲するのかその目的はさっぱりわかりませんでした。

三名の高校生の調査のやり方は非常に賛成できます。これを通じて日本と中国の若い世代の交流を深めることができると思います。ここで報告するだけでなく、日本の若い世代の人々にこの研究を紹介してほしい。なぜなら日本の若い世代、それからほかのたくさんの人々も、なぜ大量のネズミが生産されたのかまだ知らないからです。そのネズミが七三一部隊、そして細菌戦とどんなかかわりがあるのかという事実も、まだ知られていないからです」

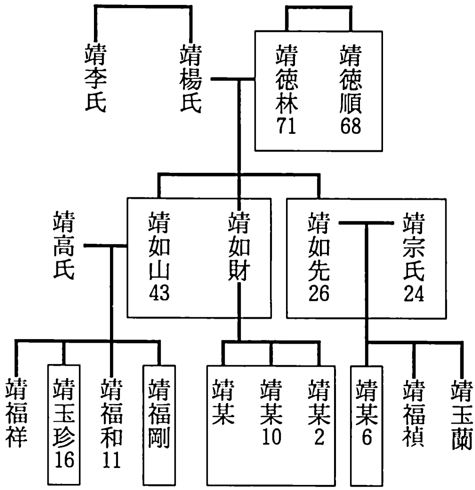
一昨年靖さんの取材を逃したときは、こんな形で再会できるとは夢にも思わなかった。靖さんの話は生徒の発表の意図をみごとに了解していた。発表のあと、生徒はあんな握手はしたことがないと語っていた。

□靖さんの体験

発表の夜、私たちは靖さんの部屋を訪ねた。この夜初めてゆっくりと話し合えた。すでに生徒は靖さんに敬愛の気持ちを持ち始めていた。まず最初に、靖さんは生徒に質問をした。質問はネズミの調査の過程で父親や学校の責任者、文部省あるいは右翼などの妨害はなかったか、というものだった。私はまた驚かされた。今日の話はおそらく日本軍国主義の批判か、七三一部隊の非

道なやり口の非難で始まると思っていた。しかし靖さんの一声は生徒の活動を慮るものだった。生徒はたしかに「学校の責任者」や右翼に圧迫を受けていた。だが普通に考えて、被害者側の人間が加害者側の国で起きていることをそこまで見抜けるだろうか。私は靖さんの炯眼に目を瞠った。生徒は調査の過程で起きたさまざまなできごとを率直に語った。靖さんは日本の非道を訴えるだけの被害者ではなかった。

ペストにかかった靖福和一族（枠内は死亡者）



（『731部隊展　1993.7—1994.12』より）

それから私たちは、五〇年前に靖さんの村で起きたことを伺った。ペストで家族が死んでいくようすを話すときは少し興奮ぎみだった。思い出すのもつらいことを私たちのために話しているのである。それは真実を訴えるという強い意志がなければできないことだった。ここではその話をそのまま紹介したい。

「七三一部隊がネズミを放ったとき私は一一歳でした。ネズミ以外に馬や猿も放出されました。私の村は一五〇人あま

りですが四〇人がペストで死にました。私はいまでもこの四〇人の名前をすべて言えます。私の家族は一九人でしたが、わずか二ヵ月間に一二人が死にました。

最初はおじいさんでした。よその家の葬式から帰るとぐったりしてすぐに眠りました。それから三日後に死亡しました。葬式で感染したのです。次におばあさんと二人の子どものリンパ腺が腫れ、五日もたたないうちに死亡しました。この五日間に父と姉と弟が同時に感染しました。まず姉が死に、その葬式の最中に父が死にました。姉はだれも見ていないうちに死にました。姉は声が出なかったのです。母が父を看病しているとき、姉は死んでいました。その表情は非常に悲惨でした。そのとき私は弟の看病をしていたのです。私は何度も弟に叫んだけれども弟は何も答えません。二時間もたたずに弟は死亡しました。いまでも父の悲惨な叫び声を思い出すと心が痛みます。

棺を作れたのはおじいさんだけです。二人目からはその余裕はありません。家族はつぎつぎに死に、葬式には感染を恐れてだれも来ませんでした。ペスト感染のあいだ、私の家は泣き声が絶えませんでした。母は毎日墓の上で泣きました。結局残ったのはおばあさんと母、それに四人の子どもです。働き手はひとりもいなくなりました。ペストが去ったあとも私の家の生活は困窮しました。私はこの家で成長し大人になったのです。その苦しみは言葉では表せません。

私は被害者として、侵略戦争を否定する日本人の発言に非常に怒っています。高校生の皆さん

の研究からも、昨日のシンポジウムのさまざまな報告からも分かるとおり、この侵略の罪業は否定できない事実だと思います。もし日本がこの歴史を否定するならば、中国人は絶対に許しません。同時に、私はこう考えます。シンポジウムでたくさんの日本人が歴史の資料を調べて、その犯罪の解明に努力しました。私はペストの被害に遭った家族として、この日本の友人たちの協力に深く感謝しております。また敬服しております。三人の高校生のネズミの調査にも、歴史の真実を探求するという点で感動しました。これは中国人と日本人が共に努力して友好関係を作る作業なのです」

圧倒的な靖さんの話を、生徒は正面から受け止めた。私が言葉を失っているのをよそに、野沢は自分の考えをはっきり返した。「なぜ、日本人である私たちに靖さんは優しくできるのか」と彼は迫った。それは、私たちにとって最大の感激であるとともに、最大の疑問でもあった。靖さんの優しさは人間そのものの救いのようだった。靖さんの言う「友人」にこの生徒たちはなれるかもしれない、と私は思った。

■靖さんの贈り物

シンポジウムの日程も終わり、ハルビンを去る日がきた。その日の朝食時、私たちのテーブルへ靖さんがやってきた。私はこの間のお礼を言った。でも通訳がいないので通じなかった。靖さ

んも何か言っている。筆談を試みたが、うまくいかない。結局よく分からなかった。住所や家族の紹介はすんでいるし、文通の約束もしてある。靖さんもこの日、村へ帰る予定だったのだ。いまにして思うと、私たちがホテルを出る時間を知りたかったのかもしれない。

実際に私たちがホテルを去るとき、なんと靖さんはロビーで待っていてくれた。靖さんは私たちにお別れのプレゼントを渡すために、ずっとロビーにいた。靖さんは照れ臭そうに、私たち一人ひとりに手帳を渡した。たまたま近くにいた全(チュワン)さんが通訳に来てくれた。思いもよらぬできごとに、私はなんとお礼を言ったらよいのか分からない。言葉が通じないのがもどかしかった。

手帳には自筆で、贈る言葉が書かれてあった。私には「教学有方、果実飄香、英才成長、桃李芬芳」という漢詩。「教えがよければ、果実つまり学生の成績もよく、生徒は成長し、立派になる」という意味。ちょっと恥ずかしい。生徒のは「学績可佳、品徳高尚、行為美好、意志堅強」で、「学業ができ、品も徳もあり、行動もよく、意志の強い人になってください」が意味。全さんが訳してくれたが、私は感激で何を言っているのか分からなかった。胸がいっぱいで、生徒ばかりか私まで涙がにじんできた。

生徒にとって靖さんに評価されることは、大学教授に褒(ほ)められるより嬉しい。日本をどんなに恨んでも当然の靖さんが、私たちにプレゼントをくれた。生徒はもう一度、靖さんの手を握り返した。全さんも、そして靖さんも感激している。生徒は何度も何度も握手をし、最高の宝物を手

に、ハルビンを去ることができたのである。

なぜ、靖さんはこんなに暖かく私たちを迎えてくれたのか。靖さんは「日本の若者」がどの程度七三一部隊の歴史を知っているか、気にしていた。「日本の若者に私の体験を伝えてください」と何度も言っていた。またしきりに、「日本の若者が私に会いにきてくれた」「若者が調べてくれた」と喜んでいた。おそらく高校生という生徒の「若さ」に、靖さんは期待していたのだ。戦争体験の風化は中国でも問題である。ネズミの研究以上に、それを若者がやったということに靖さんは希望をもったのではないか。靖さんはくり返し、生徒を「若き中日友好の使者」と呼んでくれた。

生徒は靖さんとひとつの約束をした。「真実を日本の若者に伝える」という約束。大変な約束だが、生徒は帰国後、積極的に集会で発言し、この約束を果たそうとしている。この歴史は調べるだけではダメなんだ、伝える作業と一体なんだと言いきっている。「靖さんとの約束を果たせるのはボクたちだけ」であることを誇りにしている。生徒が伝えようとしているのは、ペスト流行地の悲劇だけではない。それ以上に靖さんの「優しさ」を知らせたいと望んでいる。靖さんは日本人を恨んでいるだけではなかった。それに私たちはどう答えうるのか。

靖さんとの別れを思い出す。「またハルビンに来てください。そして私の村に来てください。私の妻の餃子はなかなかですよ。ぜひもう一度食べに来てください」。「必ず来ます」と生徒は答え

た。靖さんとの出会いは、生徒にとって人生の原点になるだろう。靖さん、きっと私たちはまたハルビンにお邪魔するでしょう。そのとき胸をはって奥さんの餃子をいただくために、私たちは靖さんとの約束を果たせるよう努力していきます。

■ 靖さんの抗議文

日本に戻ってしばらくたって、靖さんから一枚の手紙が届いた。驚いたことに、その手紙は本校の校長宛てのものだった。中国で懇談したとき、靖さんは学校長の態度についてずいぶん心配してくれた。私は日本に帰ってからも、その後の校長の行動を靖さんに知らせていた。靖さんはそれに答えて、直接校長に手紙を書いてくれたのである。この手紙を校長はどんな気持ちで読んだのだろう。校長からはまだなんの返事もない。少し長くなるが、生徒のために靖さんが書いてくれたこの抗議状の全文を紹介したい。文中の「学校の指導者」とは、校長を婉曲(えんきょく)に指している。手紙は山邊悠喜子さんが靖さんから託されたもので、私たちの手をへて校長に渡された。訳も山邊さんにしていただいた。

「庄和高校　校長先生

海を隔てた彼方の中国から、突然ご挨拶を送ります。どうぞお受け取り下さい。

突然の事で、さぞ驚かれた事と存じます。私達はお目にかかった事がありませんが、どうして

もお伝えしなければと思い、お手紙を差し上げます。

去年の八月、貴方の学校の遠藤先生と三人の学生が中国ハルビンで開催された『侵略戦争に反対し、平和を守る座談会』に参加され、私達と交流しました。私達との交流の時間は決して長いものではありませんでしたが、彼等の行動は私達に強烈な印象を残しました。私は、

1、彼等の考えや行いがとてもすばらしいと感じました。中国人との付き合いに、平和を愛する願望を持って事実から出発して、正しく過去日本が発動した戦争を見ようという態度がうかがわれ、つまり、歴史を正視する姿勢がありました。勿論多くを語る事はお互いにできませんが、私には十分に彼等の善良な気持ちが分かりました。

2、彼等は虚心に学び、謙虚で誠実、礼儀正しく人に接します。これはきっと引率の先生の『為人師表(人となりが人々の模範となる)』によるものでしょうし、日本の高校生の優良な品質を表現しているのでしょう。これを見ても私は、この三人の学生がきっと徳学兼ね備えた優秀な学生だろうと思いました。

3、彼等は過去の戦争に背を向けることなく、中国での何日かの間、過去のあの戦争がアジア太平洋地域の人民に与えた深い災難を率先して聞きました。特に私のような直接の被害者の話を聞いて、心から同情を表しました。これは私にとって本当に心の慰めになりました。

4、一九九四年に私は貴国の要請で日本に一ヵ月滞在し、何人かの日本の学生や若者に会い、今

回は又、彼等三人と会う事が出来たことは、私の日本人民・日本の若者に対する理解を深めました。多くの日本の若者も日本の人民も過去のあの戦争がどんな戦争であったかを良く知りたいと渇望していることが良く分かりました。侵略戦争の事実が認識出来ればその中から歴史を正視すると同時に平和の有り難さが良く分かり、今の平和を守ろうと自覚することが出来るのです。

つまり、彼等三人の中国での態度は申し分なく、言葉にもその品質の高さがうかがわれます。私は彼等もそして他の日本の友人たちも私の住んでいる平房（ピンファン）に来てくだされればとても嬉しく思います。

彼等が帰国する時、私は彼等に、『帰国されてから、あなた達が見たこと聞いたことを、中国に来たことのない先生方や友人達に話して下さい。皆さんに、中日両国の人民はお互いに平和を望んでおり、戦争には反対しているのだということを伝えて下さい……』とお願いしました。彼等はもともと中日両国人民がより深く理解する為に、両国人民の友誼（ゆうぎ）促進の為に努力したのですから、私は、校長先生から表彰されるべきだと思っていました。でも、私が伝え聞いたところでは、遠藤先生始めこの三人の学生が学校に帰ってから、或る学校の指導者から譴責（けんせき）を受けたそうです。『遠藤先生は学生たちをそそのかして、反国家的な活動をした……』、学校の指導者のこのような無責任な譴責はどんな考えから発せられたのでしょうか？　その指導者はどんな立場で発言しているのでしょうか？　その指導者が代表しているのは、かつての侵略戦争を発動した日本の軍国

主義なのですか？　又は、平和な現在の日本なのですか？　私は、明らかにその代表者が代表しているのは日本の軍国主義者だと思います。日本の軍国主義は五〇年前発動した戦争で、全く人道を踏み躙って、アジア・太平洋地区の人民に深い激しい災難を与え、特に今回の戦争で二千余万人もの中国人を残酷にも殺害しました……。

私の故郷『平房』は、五〇年前に日本の帝国主義分子である石井四郎が中心となって、大規模な細菌工場を作り、大勢の中国人を生体実験に使って細菌実験を行い、その成果をもって大量に細菌生産をし、攻撃的な兵器として、侵略戦争を推し進めた中心地です。その被害者は数えきれず、私の家の家族も一九人のうち一二人がこの細菌工場で作られたペストによって殺されました……。私はお伺いしたい、侵略戦争をし殺人を行った軍国主義に対して反対することは間違いですか？　これを阻止し反対することはいけないことですか？　このような悲惨な歴史から既に五〇年が経った今日、世界の歴史に通じている高等学府の指導者が、なんと!!　五〇年前の史実をも顧みず、平和と中日両国人民の友誼を促進する為に努力した先生と生徒を譴責するとは……。私は全く理解することは出来ません。同時にとても残念です。この会議で彼等だけが特別な行動をとったわけではありません。他の会議参加者と一緒に、『侵略戦争に反対し、平和を守る座談会』に出席したのですから、決して日本の現政府をどうこうしたわけではありませんのに……。私は不当な非難を受けた先生と三人の学生の同情と不安を禁じ得ません。私は、このような学校

の指導者に対して歴史の事実を直視する目をもって、歴史の潮流を理解し、中日両国人民と多くの若者達の平和を守ろうという声に耳を傾けて下さい！　と、お願いします。

今、日本と中国は、既に外交関係が設立され、両国の指導者はお互いの往来をしています。『前の事を忘れず、後の教訓となす』この原則の下に、友誼が促進され、日本の前首相村山はかつて日本が過去発動したあの戦争に対して深く反省し、アジアの人民が好まないことはすべきではない……と述べ、橋本新首相も「第二次」世界大戦の問題では、原則的には村山首相の考えを踏襲する(大体の意味です)と言われています。これは国家の指導者が歴史を直視していることの証明です。

歴史を正確に認識し、歴史を正視することは中日友好関係が発展する思想の基礎です。ですから私達はあの時期の歴史を決して無視したり、歪曲してはならないと存じます。私は学校の指導者の先生が軍国主義の古い思想があるとは申しませんが、事実から見て、歴史を正視してほしい、そして中日両国人民の友好発展に努力していただきたいと希望します。

校長先生、遠藤先生と三人の学生の問題に対して、公平に対処して戴きたいのです。彼等を苦しめるより彼等の行動を支持し、表彰して戴きたいと存じます。彼等に不当な非難をする指導者に対して、立場を変えて態度を改め、出来れば彼等に謝ってほしいと思います。これが一番良い方法だと私は思います。

私の意見に、校長先生は同意していただけるかどうか分かりません。もし、不同意なら彼等と良く話し合ってみて下さい。もし、許されれば校長先生も中国に来られて、ご自分で見て下さい。もし、来られたら私の家にお客にいらして下さい。私も、もし又日本に行くことができましたら必ず埼玉に校長先生をお訪ねし、先生方や学生達にお会いしたいと存じます。その日が来ますことを心待ちにしております。

ご健康で、全てが順調に行きますように！

中国の友人　靖福和」

□「不忘」の思想

中国の旅が終わり、生徒は報告書『ネズミと戦争』をまとめた。その報告書に野沢はこんな感想を書いた。

「戦後五〇年。証言者の数は減り、戦争を知らない子供達は大人になった。しかし、アジアの人々に植え付けられた暗い傷痕は、未だに癒されていない。

日本人の歴史に対するあいまいな態度は許されるものではない、と靖福和さんは訴えかけた。日本に帰ったら、このことを若い人に伝えて欲しい。そして真実を追求し続けて下さい、と私達は言われた。だが私がネズミのことで謝罪すると、悪いのは軍国主義だとはっきりと否定された。

敵である日本人に対し、怒りや恨みを超越し、未来を見ていた。私は、その毅然とした姿に打たれた。

三尾豊さん(憲兵として「マルタ」を七三一部隊に送った体験を語る証言者。ハルビンの国際シンポジウムで生徒にその体験を話してくれた――遠藤注)は、とても重いものを背負って戦後を生きて来た。八〇歳を過ぎる高齢でありながら、自分のかかわった事件の真相を追求し、遺族への謝罪、証言活動をしている。忘れたくても忘れてはならない加害の歴史を背負って生きること、それは三尾さん自身が自らに課した使命だった。

被害と加害という正反対の立場でありながら、私は二人に共通する人間性の尊さのようなものを感じた。それは証言する人の強さだろうか。不思議なことに全く逆の立場の二人が、私達に望んだことはほとんど同じだった。真実の追求、平和への願い、若い世代の使命の三点がそれである。

戦後五〇年。いつか証言者はいなくなるだろう。若者の手によって掘り起こさなければならない歴史がある。靖さんや三尾さんほどでなくても、重いものを背負うことになる。私たちにできることは、戦争で命を落とした人々に掌を合わせるだけではない」

同じ報告書に小谷中はこう書いた。

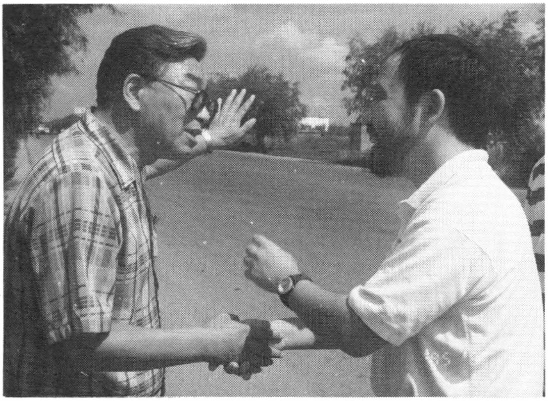
「ネズミの仲買人は現在も商売をしている関係から、なかなか証言をしてくれなかった。聞き

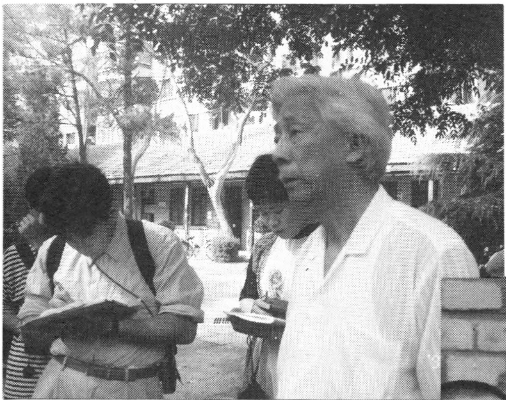
取りに行ったときも極めて敵対的だった。しかしネズミについて最も詳しく知っているのは彼らに違いない。彼らの証言があればネズミと七三一部隊の関係はますます明らかになるだろう。
しかし、中には自ら積極的に加害の歴史を明かそうという人もいる。中国帰還者連絡会の方々である。三尾さんや篠塚さんは、加害体験を自分の時間を割いて発言して回っている。加害の歴史を知るのはとても嫌なことである。自分達のした悪いことは伏せておきたいと思うにもかかわらず、証言している人もいるのだ。
私たちは靖福和さんに、日本の若い世代に、中国であったことを伝えると約束した。七三一部隊展に来る人は若者の比率が高いらしい。若者の感想欄は、教えられなかったことへの怒りが多いと聞く。庄和高生のアンケートでも、みんながすばらしい意見を持っていることが分かった。若者の意識が低いのは機会が少ないためではないか。靖さんとの約束はきっと果たせると思う。
生徒は「またハルビンに行きたい」と言っている。野沢に至っては、ハルビンに住んでこの土地の人になりたいそうだ。生徒がこの旅で学んだことは、私の想像より大きかったようだ。同じ高校生でこれだけの体験をできた生徒が何人いるだろうか。
「忘れません、でも許します」という言葉の重みを生徒も感じていた。中国の人々が「許して」も、それに甘えるだけでは不十分だ。「不忘」という言葉がどこまでも存在することを感じて、私たちは次の活動へ進まなければならない。

[II]

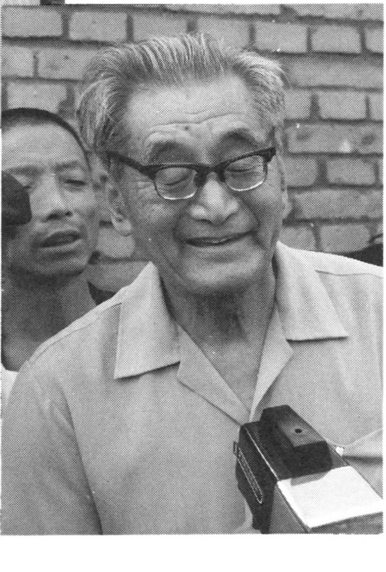
ネズミが支えた731部隊

元 七三一部隊罪証陳列館
館長・韓暁氏／右は遠藤

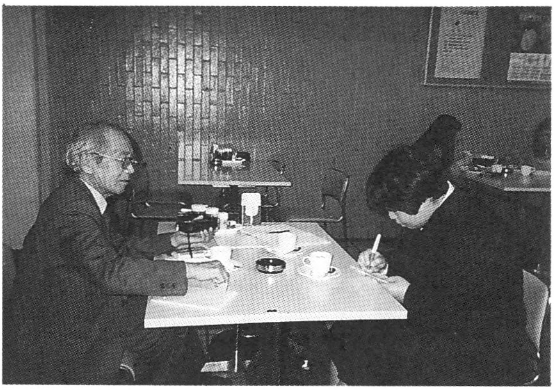




一八五五部隊跡を案内し
ていただいた 鐘 品 仁 氏



ペストネズミと闘いつづけた50
年間の医療活動を語る佟徳敬氏



ネズミによるノミ増殖を行った篠塚良雄氏を訪ねて／右は桑名

埼玉からネズミの買い付けをしていた防疫研究室主計の天野良治氏を訪ねて



左下：予防衛生研究所の裏庭にある動物慰霊塔／左は藤谷
右下：登戸研究所跡にある動物慰霊碑／左から遠藤、渡辺賢二氏、阿部





1. 七三一部隊とネズミ

□三〇〇万匹ネズミ増産計画

本書を読む人のなかには「ネズミなどになにを大袈裟な」と思う方もいるかもしれない。第Ⅱ部では、ネズミの問題が七三一部隊にとって決して小さな問題ではなく、むしろ細菌戦計画の中軸を占めるものだったことを見ていきたい。「1．七三一部隊とネズミ」では、七三一部隊におけるネズミの位置づけを試みた。「ネズミ不足」による細菌作戦の挫折や増産計画からは、「埼玉のネズミ」が「七三一部隊のネズミ」へと連なる過程がご理解いただけると思う。「2．もう一つの七三一部隊」では、七三一部隊以外の細菌戦部隊がいずれもネズミ生産に躍起になっていたようすが分かる。「3．ネズミ村の戦後史」では、ネズミと細菌戦の関連が、戦後ＧＨＱ四〇六部隊はおろか、現代にまで続いていることを示した。さて、日本細菌戦部隊にとって、ネズミとは何

だったのか。

「七三一部隊とネズミ」といってまず思い浮かぶのが、一九四五年の「三〇〇万匹増産計画」だろう。『悪魔の飽食』をはじめ、七三一部隊に関するほとんどの書物がこの「事件」に言及している。五〇年前、「ネズミを生きたまま捕獲せよ」という命令が、満州で発せられた。勇猛で鳴る、あの関東軍の兵士たちが、こともあろうにネズミ取りに明け暮れたのだ。この「奇妙な体験」はよほど印象強かったようで、小説などでもしばしば語られている(五味川純平『虚構の大義』)。その捕獲目標数はなんと三〇〇万匹。日本国内の年間総生産量を上回る、とんでもない数字である。しかし関東軍は、これを本気でやるつもりだった。

この作戦の発案者は石井四郎。関東軍は石井の要請で、この「作戦」を展開したのだった。石井は部下に「九月までにネズミ三〇〇万匹を集めるが、その飼料はどのくらいか」を計算させている。石井は大真面目だったのだ。「一匹一〇センチとして、三〇〇キロメートルのネズミの行列ができますね」と高屋敷が変な計算をした。いったい「三〇〇万匹」などという膨大な数字を、七三一部隊はほんとうに必要としたのか。

関東軍が全面的に協力するくらいだから、七三一部隊ではそれ以上にネズミ取りに精を出していた。七三一部隊には満州に五つの支部(大連、ハイラル、孫呉、林口、牡丹江)があった。例えばその一つ、牡丹江支部では、ネズミ捕獲班を三倍の三〇人に増員し、毎日二〇〇匹のネズミを

七三一部隊本部に送っていた。その総数は七〇〇〇〇匹に達した。また一〇〇部隊(関東軍軍馬防疫廠)のあった長春では、毎日七二〇匹のネズミを木箱に詰めて送った。林口支部では、三カ月で二万六千匹が送られている。七三一部隊の労工だった呂万山(リューワンサン)さんは、ネズミが汽車で運ばれるのを見ている。大の大人がネズミカゴを持ってネズミ取りに狂奔する異様な光景が中国に現出した。

だが、満州でネズミ取りをさせられていたのは日本人だけではない。それ以上に日本軍は、中国人にネズミ取りを強制した。日本軍ではネズミ捕獲の「特攻隊」が組織された。「特攻隊」は大量の捕鼠器をトラックに積み、ハルビン、長春の市街をまわり、それを中国の家々に配った。各家ごとに、一日何匹かのノルマが課せられた。ノルマが果たせないと罰金を取られたので、中国の民衆はネズミを取らざるをえなかった。

七三一部隊は興農合作社(中国の農協)と「協定書」を結び、中国内の組織を利用してネズミ取りに動員している。「協定書」ではハタリス(大型の中国ネズミ)三〇万匹確保のため、中国各省ごとにノルマが定められている。学校でも子どもたちにネズミ取りをさせ、鉛筆を褒美として「特配」している。この奇妙なネズミ捕獲作戦は日本人、中国人、大人、子どもを問わず、満州各地に展開した。

私たちは中国に行ったとき、中国側の参加者名簿を見せてもらい、「このなかにネズミ捕獲の

経験をされた方はいませんか」と尋ねてみた。一人ぐらいいるかな、という気持ちだったのだが、答えは「この人も、この人も、この人も……」と、あっというまに一〇人にもなった。そのなかには証言者だけでなく、一般の研究者の名もあった。靖福和(チンフーホー)さんも少年のころ、家族全員分のネズミ取りをしなければならず、大変だったと語っている。大規模に展開された「作戦」だったと本では読んでいたが、どこか信じられないでいた。だが中国で実際に聞いてみて、これが特殊な体験ではなく、非常に多くの人に共通した経験だったと、感じられた。

靖さんは「ネズミは生きたままでないといけなかった。だがその理由は説明されなかった」と言っている。現在、その理由は明快である。「生きたネズミ」でなければ、ペストノミの生産に使えないからだ。ネズミ取り狂奔劇の背景には、七三一部隊による最後の細菌戦計画があった。実に中国の民衆は、自らの国を攻撃する材料を、自らの手で集めさせられていたのである。

それにしても七三一部隊はなぜ、こうまでしてネズミ捕獲に力を注がなくてはならなかったのか。捕らえられたネズミはどのように「使用」されていったのか。では、七三一部隊のネズミ事情とそれに携わった人々の姿を見てみよう。

ペストネズミからペストノミへ

日本の細菌戦においてもっとも有力な細菌兵器は、ペストだった。ペストの媒介物はノミであ

る。ペストに感染したネズミについたノミは、ペストノミとなる。人間はペストノミに刺されて感染する。このネズミとノミの関係に着目したのが、ノミの研究者として第一人者だった石井四郎である。石井の「天才性」は直接ペスト菌を撒くのでなく、ペストノミを撒くことで、その効率を高めたことにある。ノミを殺さず散布する陶器性の爆弾「宇治式爆弾」も石井の発案だった。大規模な細菌戦のためには大量のペストノミが必要であり、大量のペストノミを生産するためには、大量のネズミが必要だった。三〇〇万匹増産計画のネズミの用途はここにあった。

ハルビン郊外の七三一部隊遺跡を歩くと、いまも巨大なネズミ飼育施設が残っている。床一面がコンクリートの飼育穴で敷き詰められた、異様な建物である。これ以外にも、七三一部隊には有名なロ号塔のすぐ北側に特別班動物舎があり、そこでもネズミやノミが飼育されていた。ネズミは石井班(石井四郎の兄、石井三男少将を隊長とする班)で、ノミは田中班で飼育された。ネズミにペスト菌を植え付け、ペストノミを生産する危険な作業は高橋班で行われた。

私は桑名と、田中班でノミを増やした篠塚さんを訪ねた。私はなるべく多くの七三一部隊証言者に会うように生徒に勧めた。篠塚さんのインタビューは、東京に出てきたときをねらって、桑名が取ってきた。ずうずうしく中帰連の会議の最中にお邪魔した。中帰連は中国帰還者連絡会の略、七三一部隊展の成功はこの方々の協力が大きい。篠塚さんは桑名に分かりやすく話してくれた。それは、毎日死んだネズミを取り替えるだけという、奇妙な「仕事」の話だった。「五〇年も

前のことをこんなに正確に記憶しているなんて」と桑名は感激した。

「田中班には少量の小麦粉が敷き詰められた石油缶がぎっしり並んでいた。石油缶のなかには大量のノミがおり、そこにカゴから逃げられないようにしたネズミを入れた。ネズミはノミの餌だった。室温四〇度、湿度七〇%の、サウナ風呂のような部屋でノミはどんどん増えた。ネズミは血を吸われ骨と皮ばかりになり、四、五日で死ぬ。死ぬと別のネズミと取り替えた。取り出すときは死体にドライヤーを当てノミを落とした。ノミを小麦粉から分離する方法がおもしろい。西洋風呂に小麦粉ごとノミを入れ、赤い電球で照らす。するとノミは暗いほうへ逃げる習性があるので、浴槽の穴に飛び込む。その下に瓶を置いておけば、自然にノミがたまるという寸法だ。このように、ノミそのものを増やすためにも、ネズミは餌として必要だった」

ネズミの用途はもう一つあった。ノミをペスト化させる「毒化作業」である。「毒化作業」の原理は簡単だ。まずネズミにペスト菌を注入する。そのペストネズミをノミの飼育缶に入れる。血を吸ってペストノミが誕生、「毒化作業」が完了する。二、三カ月間の一製造周期に、一つの石油缶から、一〇から一五グラムのペストノミが取れる。七三一部隊には石油缶が四〇〇〇から四五〇〇個あり、一製造周期に四五キロのペストノミが取れた。ソ連が七三一部隊員を裁いたハバロフスク裁判で、川島被告はこの「毒化作業」についてこう証言している。

「先ズ缶ニ若干ノ蚤ヲ入レ、飼料トシテ白鼠ヲ入レ、コノ白鼠ハノミニ危害ヲ加エナイ様ニ縛

リ付ケラレテイマシタ」「鼠ハ予メペストノワクチン注射ニヨッテペスト感染セシメラレ、ソレカラ、蚤ガ之ラノ鼠ヲ媒介体トシテ汚染セシメラレマシタ」

七三一部隊にはいろいろな種類のネズミがいた。捕獲ネズミは「ハタリス」という大型の野性ネズミが中心。埼玉から送られたのは白ネズミ（ラットとマウス）である。マウスなどの小ネズミはすぐ死んでしまうので、「毒化作業」には不適格だった。川島証言の「白鼠」はラットだろう。七三一部隊ではマウスよりラットを中心に飼育していた。

ところで三〇〇万匹増産計画は、捕獲ネズミだけが対象ではなかった。石井の命令を直接受けた林口支部長は、こう証言している。

「石井の部屋で各支部長に対し、石井より細菌戦準備の指示がありました。すなわち大本営の指示により、第七三一部隊は同年八月までに、ペスト菌を使用する細菌戦準備の為に、ノミ一トンないし二トンを準備する任務があるので、このために大量のネズミが必要で、従って各支部は全力をもって、捕鼠並びに白鼠の増殖を行い、第七三一部隊に協力するごとく指示がありました」（傍点は引用者）

三〇〇万匹増産計画の中身には「白鼠の増殖」も含まれていた。大量のネズミを必要としていた七三一部隊。ネズミは「ノミの餌」として、また「毒化作業」の材料として「消費」されていった。ただしそこには「捕獲ネズミ」だけでなく、それ以上の「飼育ネズミ」が存在していた。

巨大な飼育施設はそのためにも不可欠だった。そしてその「飼育ネズミ」すなわち白ネズミは、埼玉の私たちの町から送られていたのである。

□七三一部隊の細菌戦実行

三〇〇万匹増産計画は、あのちっぽけなネズミが七三一部隊にとって決して小さな問題ではないことを教えてくれる。そうした歴史を知ることは、生徒にとって地味な聞き取りばかりで研究の意義を見失いそうなとき、「この研究は大切なんだ」という意識づけになった。だが私たちの地元での研究がある種の転機を迎えたのは、吉見義明教授の研究会に出席してからだ。そこで私は、狭い片田舎でやっていたことの意味が、しだいに外に開いていくような感触を味わった。その研究会で知った史料は、現在『七三一部隊と天皇、陸軍中央』(岩波ブックレット)にまとめられている。ここでは、その史料に現れた七三一部隊の細菌戦実行の経緯を、ネズミを中心に読み返してみたい。

使われた史料は、防衛庁戦史史料室で教授らが発見した中堅将校の日記類である。これらの記録には細菌戦を実行する過程で、主力がペストノミに収斂していくようす、ネズミ不足に軍が苦慮しているようすがみごとに現れている。『井本日記』は、一九四〇年九月から一九四二年一二月まで、参謀本部作戦課員だった井本熊男中佐の業務日誌。『大塚備忘録』は陸軍省医療局医事課長

となった、大塚文郎大佐の業務日誌である。

『井本日記』には、日本軍が寧波、常徳、浙贛の三地域で、細菌戦を実行した事実が記載されている。一九四〇年の寧波作戦では「Cハ出ナイト思フ、Pハ或ハ成功スルカモ」と報告されている。Cはコレラ、Pはペストをさす。複数の細菌兵器が試行されるなかで、ペストが有力視されてきたことがうかがえる。

一九四一年の常徳作戦では、「部隊の士気上ル、アワニ対スル自信」とある。「アワ」はノミのことで、すなわちペストノミによる細菌戦の成功が伝えられている。「ラット三〇万手ニ入ル見込、設備モ大体可」とあり、より大規模な細菌戦作戦への準備も整えている。一方、満州では「ラット三〇万手ニ入ル見込」としながらも「中支ハ鼠ニ困ル(種ノミハアル)、南支ニモ種鼠ハアル」と早くも「ネズミ不足」が示唆されている。

一九四二年浙贛作戦は、自らのペスト攻撃地に誤って踏み込み、日本軍からも相当の被害が出た戦闘である。『井本日記』にある浙贛作戦の参謀会議の記録では、「餅不足」、すなわちネズミ不足のため、「実力攻撃ハ八月中旬以降ト予定」となり、ネズミ不足が細菌戦実行のブレーキになっていたことが分かる。また陸軍大臣宛に「作戦資材整備方ノ件」が五月一四日付けで申請された。現在二〇〇〇匹しかいないネズミを一万匹にするため、それを収容できるバラックを作るという申請に対し、井本中佐は「要処置」と注記している。しかし結果として浙贛作戦の失敗により、

参謀本部の細菌作戦の実践計画は一時頓挫する。

ところがアメリカ軍の侵攻で戦局が絶望的になるにつれ、起死回生の手段として細菌戦への誘惑は再び高まっていく。『大塚備忘録』によると、一九四四年四月の陸軍省局長会報で石井は「ペスト菌一キロ生産のために、一万二五〇〇匹のネズミが必要だったが、研究の結果その二割ぐらいでできるようになった」と進言している。その結果陸軍はサイパン島攻防戦で、アメリカ軍に対して細菌戦の実施を決定した。細菌戦部隊を乗せた船は四月に送り出されたが、五月に撃沈され結局実施できなかった。

七月七日サイパン島が陥落すると、二二日陸軍はアメリカ軍の占領するサイパン島への細菌戦攻撃を再び決定した。作戦について石井は「新型ウジ弾二〇〇〇発を出しうるとし、一発にペストノミを一キロ入れるとして二トン、飛行機は二五〇機必要」とし、陸軍軍医学校の内藤良一は「現在の生産能力では今後一カ月で二〇〇キロ生産するのは無理で、必要量の生産には三カ月かかる」と実行に否定的な見解を述べている。結局この作戦は実現しなかった。理由はネズミと飛行機の不足のためだった。

こうして日本の細菌戦作戦を見ていくと、いかに「ネズミ不足」が細菌戦部隊にとって深刻な問題だったかが分かる。それはペストノミ弾を主要兵器に選んだ七三一部隊の宿命だった。だが、サイパン島攻撃の挫折以降も、まだ細菌戦計画は放棄されなかった。参謀本部第一部長の真田穣

一郎少将は、彼の日誌『真田日記』に細菌戦準備の現状を詳しく記している。そこでも話題の中心は、ネズミの増産だった。彼は一〇〇〇匹のネズミでペストノミ一キロができるとし、四五年六月に一三五キロ、九月に三〇〇キロ、一二月に八〇〇キロのペストノミの増産計画を記している。まず月三〇万匹のネズミの確保を可能とし、合計三〇〇キロ分のペストノミを各部隊に振り分けている(関東軍一五〇キロ、支那軍六〇キロ、南方軍六〇キロ、内地三〇キロ)。

終戦間際の四五年、細菌戦計画はこうして継続し、各地でネズミの増産が強力に推進された。すでに見た満州での「ネズミ取り狂乱劇」もその一つだ。だが軍がこの増産計画でもっとも期待していたのが、実は「埼玉のネズミ生産地」だったのである。

□「餅不足」と内地増産計画

吉見教授が発見した日記類では、「餅不足」(ネズミ不足)に苦しむ七三一部隊の姿を見ることができた。だが私たちが驚いたのはそれだけではない。この日記にははっきり「春日部」という地名が出てくるのだ。参謀本部会議に出席する陸軍将校の記録に「春日部」の文字を見たとき、生徒は「埼玉」のネズミが軍中央の政策と結び付いていたことを実感した。「埼玉のネズミはやはり軍の指令だったのですね」と阿部が言った。

すでに第I部で見たように、満州で人々がネズミ取りに狂奔していたとき、埼玉では農民が白

ネズミの増産に邁進していた。ネズミの飼育にはそれなりのノウハウが必要で、古くからの生産地である埼玉が期待されるのは当然だった。軍から大量に送られてきたネズミ飼育のための物資の背景には、これらの日誌に出てくる軍中央の「内地増産計画」があった。その計画の中心地はもちろん埼玉の春日部周辺だった。

一九四一年一一月から陸軍省医務局医事課長となった金原節三医大佐の『陸軍省業務日誌摘録』には、ネズミの供給地と生産能力について次のような見通しが立てられている。これは一九四三年四月段階の計画である。年間一〇〇万匹という膨大な「白ネズミ増産計画」だ。

「1、粕壁(春日部のこと＝著者注)付近が有力となる。一軒三〇。四〇〇〇軒で一組合(親一匹一カ月二匹)。本年度予定埼玉四七・五、茨城二〇・五、栃木六・四五、計七四・四五万

2、埼玉県に飼料を補給せば二〇万増産可能。茨城県、栃木県は指導強化により一〇万程度増産見込。最大産出見込一〇〇万」

また『井本日記』でも、「埼玉の場合、五月に五〜七万匹、六月に一〇万匹、七月に一五万匹、八月に二〇万匹と見込み、二〇万匹のネズミ飼育に必要な飼米の砕米は一カ月九〇トン」とある。ここでも、埼玉が増産計画の中心に位置づけられている。

ネズミ屋の証言やGHQ文書から推測して、戦中の埼玉のネズミ生産能力はせいぜい月五万匹だったと思われる。したがって『大塚備忘録』の年四七・五万匹(月四万匹)、『井本日記』の最初

の目標数である月五～七万匹という数字は、現地の生産能力をかなり正確に踏まえたものだと言える。軍のネズミ増産計画は現実的なものであった。

では、埼玉の白ネズミは、どんなルートで七三一部隊に運ばれたのか。次は白ネズミがどのように海を越え、外地に運ばれたのかを見ていきたい。

□海を越えた白ネズミ

埼玉の白ネズミは田中一郎(仮名)の生産組合によって、東京の防疫研究室に運ばれた。防疫研究室はそのネズミをトラックで立川飛行場に運んだ。立川からは七三一部隊専用機で海を越え、各細菌戦部隊へ空輸された。細菌戦部隊は七三一部隊が中心だったが、シンガポールなど七三一部隊以外の細菌戦部隊にも同じルートで送られている。ここでは白ネズミを生産し、送った仲買人のKさん、白ネズミの買い付けをし、各部隊に輸送した防疫研究室の天野良治さん、実際に飛行機で外地に輸送したTさんの証言を紹介したい。

Kさんは田中一郎の生産組合の職員で、白ネズミの輸送を担当していた方。Kさんは、私たちの質問に快く答えてくれた。Kさんはビックと呼ばれる大篭にネズミ二〇〇匹を入れ、それを三、四箱自転車の荷台に積んで、週三回は防疫給水本部に運んでいた。いつも同僚と二人で、春日部から防疫研究室のある新宿まで、自転車二台で運んだ。Kさんの話によれば、「七三一部隊」とい

う言葉は一番の得意先として、日常的に使われていた。「七三一に何グラムのネズミが何匹」という具合に注文が来て、それに合わせて農家からネズミを集めた。七三一部隊が満州にあることも知っており、七三一部隊用のネズミは遠くまで行くので、餌の量を多くした。七三一部隊の注文は圧倒的に多く、それだけ印象も強かった。ただしKさんは細菌戦との関係は知らなかった。

Kさんにネズミの買い付けをしたのが、天野良治さんである。天野さんは防疫研究室の陸軍主計で経理担当だった。天野さんはすでにさまざまな書物で防疫研究室や七三一部隊に関する証言をされており、高校生の訪問を歓迎してくれた。最初はネズミについてはうろ覚えだったが、何度か尋ねるうち記憶が蘇ってくる。あるときは突然思い出したことを電話で私たちに連絡してくれた。会うたびに地名や人名を思い出して、生徒を喜ばせた。天野さんは陸軍主計として、七三一部隊に金を支給しないという立場もありえたのに、それをしなかった自分に戦争責任を感じている。細菌戦も人体実験も知っていた。その責任への贖罪の意味で、現在積極的に発言を続けている。生徒がもっとも多くのことを教わった証言者である。

天野さんは七三一部隊からの注文にもとづき、ネズミ、おがくず、石油缶の買い付けを行った。天野さんの記憶では、埼玉以外からネズミを調達したことはなく、地名としては春日部、南桜井(現庄和町)、川辺(現庄和町)を覚えている。月々五万匹のネズミが運ばれた。ネズミはマウスが一匹五銭から六銭だった。春日部の業者はネズミ以外の動物も調達でき、便利だった。直接ノミを

注文したこともあった。

天野さんの証言でもっとも重要なのは、ネズミと「死後体」の関係である。防疫研究室は各細菌戦部隊のセンター的役割を果たしていたので、天野さんはその全体を把握できる立場にいた。ネズミは、その半数以上が七三一部隊宛てだった。ネズミを運ぶ飛行機に乗り込み、天野さんは何度か満州の七三一部隊まで出掛けた。帰りに積み込んだものは今度はネズミではなく、「マルタ」の死後体のサンプルだった。

近年新宿の陸軍軍医学校跡地で発見された人骨が、七三一部隊のものではないかと考えられ、「人骨問題」として裁判になっている。天野さんは七三一部隊から送られた「死後体」をいくつも見ており、それが人体実験の結果であることも知っていた。これらのサンプルは、内地の研究者や医学生のために提供された。現在新宿では頭部が出ているだけだが、天野さんは胴部も見ているのでやがて発見されるだろう、と言っている。この証言は「人骨問題」裁判でも有力な証拠となるだろう。七三一部隊専用機は、行きは「死後体」、帰りは「ネズミ」というピストン輸送をくり返していた。

次はネズミを空輸した証言。南方防疫給水部の宰領官だったTさんは、『月刊七三一部隊展』一一号で次の証言をしている。

「一九四四年の一〇月だったと思います。日本からシンガポールまで五トンのノミを生産する

ために五万匹のネズミを、七三一の専用飛行機三台で輸送しましたよ。私は表向きは休暇ということにしていました。ペストノミを作るため大量のネズミが必要でしたが、そのネズミの飼育は、埼玉県でやっていたんですよ。埼玉から東京の軍医学校に運ばれて来る。それを五〇匹ぐらいずつ金網の篭に分けて入れ、立川の飛行場に持って行き、そこから飛行機でシンガポールに空輸したわけです。と言っても暑さで下手をすると三分の一は死んでしまうので、途中、台北とサイゴンで給油する時に、外に出して風に当てましたよ。シンガポールでもクアラプラの山の中で、動物を飼育していましたがね」

Tさんとは手紙や電話だけのやりとりだったが、その後、埼玉のネズミに興味をもってくれた。生徒の活動の意義を感じて、一九九六年八月に生徒が計画している「七三一部隊展ｉｎ春日部」では、証言者として講演してもらえる予定だ。

埼玉の白ネズミは、こうしてKさん、天野さん、Tさんの手を通じて外地の細菌戦部隊に送られたのである。

2. もう一つの「七三一部隊」

□日本細菌戦部隊の全体像

従来、日本の細菌戦といえば七三一と石井四郎ばかりが注目されてきた。だが近年の研究で細菌戦が七三一部隊だけの問題でないことが分かってきた。日本細菌戦部隊の中枢は七三一部隊ではなく、新宿にあった防疫研究室、あるいはズバリ陸軍中央と考えたほうがいいようだ。石井四郎だけが突出していたのではなく、それは医学者全体の組織的犯罪だった。日本細菌戦部隊は、七三一部隊のほかに甲一八五五部隊(北京)、栄一六四四部隊(南京)、波八六〇四部隊(広州)、岡九四二〇部隊(シンガポール)があり、それを防疫研究室が指揮していた。

吉見義明氏の『七三一部隊と天皇・陸軍中央』では、細菌戦が陸軍中央の意志によって決定された経緯が示されている。細菌戦は石井四郎一人のものではなく、陸軍全体の暴走だった。

それは防疫研究室の陸軍主計だった天野良治さんの証言でも裏打ちされている。七三一部隊も防疫研究室に統括される細菌戦部隊の一つにすぎなかった。各細菌戦部隊に送られる物資はすべて防疫研究室をへて分配された。陸軍省が認めなければ金は出なかった。細菌戦のセンターは東京の防疫研究室だった。ネズミの輸送についてもまったく同じで、いったん防疫研究室に集められたネズミが、飛行機で各細菌戦部隊に送られていた。

七三一部隊には四つの「兄弟部隊」があった。七三一部隊の犯罪が知られるようになっても、これら四つの部隊は依然ベールに包まれたままだった。だが研究者の努力と証言者の登場により、これらの部隊の実態が徐々に分かってきている。各細菌戦部隊はそれぞれ緊密な連絡を取り合い、実戦においては協力して混成チームを作り、足りない物資を補い合い、人事の交流をしている。日本細菌戦部隊の全体像がようやく浮かび上がってきた。

そうした証言によれば、四つの部隊にはいずれもネズミ飼育場があり、埼玉のネズミが送られている。ペストノミの生産能力もあった。七三一部隊以外の各細菌戦部隊も相当大きな組織で、七三一部隊に近い犯罪行為をしていた。埼玉のネズミの行方は七三一部隊だけにとどまらなかった。私たちはそのネズミの行方も追わなければならない。ここでは四つの細菌戦部隊について、それぞれのネズミ事情を比較していきたい。

□甲一八五五部隊——伊藤影明さんのネズミ飼育

国際シンポジウムを目前に控えていたころ、私たちは東京で開かれた準備会に集まった。そこで内地からネズミを調達し、ペストノミを大量生産していたのは、七三一部隊だけではなく北京の一八五五部隊でも行われていたことを知った。私たちは西野留美子さんから偶然その話を聞いた。

西野留美子さんの報告書『北京一八五五部隊の検証』では、内地から小動物を購入した記録が紹介されている。一九四四年、試験用小動物宰領のため、川本少尉以下八名の同部隊員が東京の軍医学校に出かけた。そのときの受け入れ表には、「マウス一二〇〇〇匹、ラット二六〇〇〇匹」と記されていた。合わせて四万匹近い。マウスよりラットを必要としていた事情は七三一部隊と同じだ。ネズミが東京の陸軍軍医学校から、直接部隊員によって運ばれている事実も興味深い。軍医学校は防疫研究室と一体である。ネズミは東京から各細菌戦部隊に振り分けられたという、天野さんの証言を裏付ける資料だ。当時東京にネズミを納入していたのは埼玉だけだったから、一八五五部隊の四万匹の白ネズミも私たちの町のネズミだと思われる。

ネズミの加害が、七三一部隊のハルビン・平房（ピンファン）だけでなく、中国各地、シンガポールにまで及んでいたことに生徒は驚いた。その四つの部隊すべてを見ることはできないが、北京一八五五部隊については、今回の旅程の通過地点である。西野さんから偶然この話を聞いたこともあって、

せめて一八五五部隊だけは見ておきたいと生徒は思うようになった。

北京には一八五五部隊の施設が三つあった。一つは西村英二陸軍軍医大佐を隊長とする本部および司令部。これは一九三九年、有名な天壇公園の南西に設置された。さらに本部は一三の出張所を持っており、大きな出張所では一〇〇名を数える規模のものもあった。ネズミの飼育舎は本部の南東に位置していた。その規模も大きく、四列の舎屋に七〇室余りの部屋があった。どの部屋でも数百匹から千匹ものネズミの飼育が可能だった。一八五五部隊に大量の白ネズミがいたことは間違いない。

二つ目は静生生物調査所。ここは中国最大の生物研究機関だったが、一九四一年一八五五部隊によって占拠され、第二分遺隊が置かれた。ここではノミの大量生産をやっていた。三つ目は北京協和病院。ここも接収され第一分遺隊が置かれた。ここでは人体実験が行われていた。

八五年夏ハルビンで開かれた七三一部隊国際シンポジウムでは、北京の一八五五部隊が話題になった。日本側から西野留美子さん、中国側から鐘品仁（チョンピンレン）氏がそれぞれの立場で、一八五五部隊について言及した。謎の部隊だった一八五五部隊の姿がこのシンポジウムでようやく明らかになった。二人の発表を聞き、「一八五五部隊跡に行こう」という生徒の気持ちは固まった。

八月四日、私たちはみんなより一日早くハルビンから北京にもどり、単独で一八五五部隊の遺跡を訪ねた。西野さんはシンポジウムの半年前、元一八五五部隊員の伊藤影明さんと北京を訪れ、

鐘品仁さんの案内で遺跡を確認している。一八五五部隊の遺跡確認調査はこれが初めてだった。伊藤さんはこの部隊でノミの飼育をしていた。「ノミを飼育するためにネズミを飼う。フンドシ一つになってネズミに餌をやる仕事をしていた。馬鹿だってできるよ」と語る。一九室、八〇〇個近い石油缶を担当した。ノミに血を吸わせるためネズミを入れる毎日。「人間習うより慣れろでしだいにノミに愛着を感じるようになった。四四年から急に増産が叫ばれ、五人だった飼育係が五〇人になる。一時は将校までも裸になって飼育に当たったほどだ」。そのなかには、ペスト感染してしまった伊藤さんの同期生もいた。埼玉でも急速なネズミ増産が始まるころである。

一九四五年二月、伊藤さんは「マルタ」を見た。静生生物調査所の三階が留置所として使われ、伊藤さんはその留置所を覗き穴から盗み見た。覗いたとき「マルタ」と目があった。目だけがギョロッとしていて、いかにもうらめしそうだった。一八五五部隊では静生生物調査所(第二分遣隊)で「マルタ」にペスト菌を打ち、北京協和病院(第一分遣隊)で生体解剖した。伊藤さんが見たのは、すでにペスト菌を打たれ、北京協和病院へ運ばれる直前の「マルタ」だった。「その形相が忘れられない」と伊藤さんは苦しむ。この証言からは、一八五五部隊も大量のネズミを消費し、ペストノミを生産し、人体実験をしていたことが分かる。

◻ 鐘品仁氏と一八五五部隊跡を歩く

鐘品仁氏は旧一八五五部隊の建物の一つ、現在の中国薬品生物製品検定所の副所長で、一八五五部隊について最初に調査、発表した方である。一九四九年、鐘品仁氏は調査命令を受け初めてこの建物に入り、冷凍室で六本の試験管を発見する。その六本には日本人名が記され、うち五本からは強毒ペスト菌が検出された。それは、ここで細菌兵器が製造されていた有力な証拠の一つだった。鐘品仁氏はテレビキャスターの筑紫哲也みたいな感じの人で、シンポジウムでは淡々とそんな内容を発表していた。

私たちは西野さんから、鐘品仁氏に頼めば一八五五部隊の遺跡を案内していただけると聞いていた。鐘品仁氏は、背の高い白髪の方で、英語が堪能である。私たちはいつお願いするか、シンポジウムの最中、鐘品仁氏のようすをうかがっていた。だが鐘品仁氏のような偉い学者が高校生の、しかも初対面のぶしつけなお願いに応じてくれるか心配だった。たまたまホテルのロビーで鐘品仁氏が暇そうにしていた。さらに偶然、そのそばに生徒のあこがれの美人通訳、全(チュワン)さんがいるではないか。私たちは素早く全さんにお願いして、鐘氏に紹介していただくと、遺跡の案内を即OKしてくれた。しかもその日、全さんも北京に帰るので、通訳をしてくれるという。トントン拍子に話は進み、一八五五部隊調査のセッティングは簡単に完了した。

八月四日、私たちはまず一八五五部隊本部の遺跡を訪ねた。本部は広大な敷地を持っていたが、

現在も残っている建物は二つしかない。一つは天壇防疫処と呼ばれた第二課。いまは中国薬品生物製品検定所となっている。二つめは倉庫。漢字の「目」の字をかたどったような大きな建物である。注目のネズミ飼育場は取り壊され、天壇医院という病院が建っている。

鐘品仁氏の案内で第二課の建物に入れていただいた。日本人がここに入るのは、西野さん以来二番目ということである。ここにあった日本人名の試験管は国に渡して、もうないそうだ。私たちは地下の冷凍室に通された。そこは現在書庫として使われ、分厚い医学書がギッシリ積まれていた。一見普通の建物だが、例えば入り口のドアは鉄製の二重構造で、非常に重かった。天井には吉村班冷凍室で見た、人体実験用の鉄の引っかけと同じものがあった。一九二平米のこの部屋は、十分凍結実験のできる広さだ。

続いて天壇神楽署に行く。一八五五部隊資材部の「倉庫」だったところだ。天壇神楽署とは天壇の皇帝の祭りの練習所で、広大な天壇の一部である。明代の建物で、遺跡として保存される計画である。倉庫は一般の人のアパートになっており、境内には洗濯物が干してあったり、鶏が跳びはねたりしている。遺跡保護地域となったいま、いずれこの人たちは追い出されるそうだ。なんだか気の毒だ。

天壇神楽署に入る。一八五五部隊の遺跡というより、明代の建築物を見学している気分。住民がもの珍しげに私たちを見ている。保護地域になったわりには保存状態は悪い。すばらしい玄武

像がひっくり返っている。石碑が敷石になっている。しかも字の彫られている正面が上向きで、みんなその上を歩いている。明代のものかもしれない。とんでもない話である。

それにしても大きな建物である。倉庫に何が残されていたかはもう分からなくなってしまった。倉庫を一周するだけでも疲れた。七三一部隊に比べ軽く考えがちだが、こうしてみると一八五五部隊も大きな機関だった。倉庫を出て、いまは普通の町になっている部隊の敷地内を歩いているうち、私たちはなんと警察に捕まってしまった。

警官は初めから私たちのまわりを付きまとっていた。だが彼は気が弱いのか、記念写真を撮ろうと言うと、仲良く並んで撮ったりしていた。何か手続きが必要だったらしく、私たちは彼の事務室に行き、そこで談笑した。怪しい雰囲気はまったくなく、握手までして別れた。

部隊跡をブラブラしていると、さっきの警官が人相の悪い警官を二人連れてきた。私たちは交番みたいなところに連れていかれ、パスポートや名刺の提出を要求された。警官はいばっていた。通訳の全さんと警官がどなり合いを始めた。何だか変な感じになってきた。全さんはときどき「心配ないよ」と言う。そう言われるとかえって心配である。話はなかなかつかない。たまに警官がどこかに電話して何か確認している。小谷中だけがゆったりと読書していた。

警官が私に言った。「あなたがたが中日友好の訪問団だということがよく分かりました。あなたがたのよいように処理してあげましょう」。ずいぶん偉そうだ。それから延々と書類を書いて

いる。貴重な時間を潰され、いらだつ私たちなど意に介していない。四〇分ほどして許され、外に出た。あとで聞いたら、問題は観光なのか、調査なのかということらしい。調査なら許可が必要だったのだ。天壇神楽署なんて観光客の来るところではない。私たちの立場は苦しかったのだ。「中日友好の訪問団」が証明され、フィルムはなんとか抜き取られずにすんだ。

それから静生生物調査所跡地へ行く。北京図書館の隣にあったが、いまはもうない。ここでペストネズミからペストノミが製造されていた。日本軍撤退後、中国側が調査をしたが、ノミ、蚊などの写真一〇〇枚が残っていただけだった。

最後に北京協和病院へ向かう。北京図書館もそうだったが、ここも風格のある建物である。この病院は「北京原人の骨」を保存していたことで有名だ。日本軍が占拠したさい、この病院から運ばれた「北京原人の骨」が行方不明になったのは、世界史の珍事として有名である。その北京原人の病院で、一八五五部隊は人体実験をくり返した。

広大な遺跡をまわって、日本の細菌戦部隊が七三一部隊だけでないことを改めて感じた。だが部隊の大きさに撚く以前に、戦後五〇年もたって初めて遺跡の所在確認が行われている事実に気づくべきだろう。

栄一六四四部隊――小沢武雄さんの細菌戦実行

私たちは中国の取材をまとめるため、合宿している最中だった。南京の栄一六四四部隊員だった小沢武雄さんの証言が、『埼玉新聞』に掲載された。八月の半ば、中国から帰ってまもなくのことだった。小沢さんはなんと春日部市の隣の岩槻市に住んでいた。小沢さんは奥さんにも話さなかった体験を、戦後五〇年を機に話す決心をした。

栄一六四四部隊は、七三一部隊と混成チームを組んで、細菌戦実行にかかわった実践部隊として広く知られている。けれどもネズミを追う私たちにとっては若干縁の薄い部隊だった。同じ細菌戦部隊であっても、一六四四部隊は、ネズミに関する証言者や資料にまだ一度も巡り会っていなかった。それが、こんな近くにその証言者がいたのだ。私と阿部はさっそく、小沢さんを訪ねた。その証言は以下のとおり、細菌戦実行にかかわる貴重なものであり、なおかつ一六四四部隊で使われたネズミも埼玉から送られていたことを示しているのである。小沢さんの取材から、私たちはまたしてもネズミに行き着いたのだ。

一六四四部隊は、通称「多摩部隊」といい、南京城内にあった。一九三九年、部隊の本部は中山通りの一四棟からなる病院を接収した。病院の裏には四階建ての実験棟、動物舎があった。部隊専用の飛行場も持っていた。

小沢さんは一九四二年四月、一六四四部隊に配属される。歩兵教育と衛生兵教育を三カ月ずつ

受けた。歩兵教育の最中、ノミだらけの個室に入れられる。その目的は分からないが、何かの実験材料にされたと思う。部屋から出ると、手足に赤い斑点があった。その数日後、宿舎に近い建物の軒下に、直径一メートル深さ一・五メートルもある甕があった。覗くと、何かがぎっしりうごめき、波打っている。よく見るとすべてノミだった。大量のノミの姿に驚くとともに、個室での奇妙なできごとが頭をよぎった。その後衛生兵教育に入ると、小沢さんは細菌戦攻撃を二回命令される。

一回目はその年の八月ごろだった。五人ずつ選抜され、二機の飛行機に分乗した。一機は離陸に失敗、小沢さんら五人だけが南京から南西方面に四〇里(約一五〇キロメートル)ほど飛んだ。飛行機は敵地の飛行場に着陸した。すでに日本軍の砲撃で、敵はその陣地から撤退していた。戻ってくる敵兵を狙って、敵陣にペストノミをばらまくのが五人の任務だった。

ペストノミはサイダービンに入れ、コルクで蓋をした。ビンはノミでいっぱいだった。小沢さんはそのビンを腰に一五本ぶらさげ、さらに手に抱えられるだけ持ち、敵地に乗り込んだ。足にゲートルを巻いているものの、特別な装備はなく、手袋は軍手だった。予防接種もしていない。ノミに食われれば自分も死ぬ。ビンの蓋を開け、軒下にノミをばらまいた。無我夢中だった。作業を終えると、空きビンを土中に埋め、五人は集結した。行きは飛行機だが、帰りは歩いて戻る計画だ。陣地に戻った中国の斥候兵に見つかり、機銃を浴びた。九死に一生を得、南京に向かっ

て炎天下を一〇日間歩いた。途中で病気になったが、別部隊に救われた。

二回目の命令はその一カ月後だった。チャンチューカメ(紹興酒の甕)にコレラ、ペスト菌液を詰める。一ビンに一斗ぐらい入る。それを一五個トラックに積み、南京城外の村々の井戸に甕ごと投げ込む。一つの井戸に一ビンずつだった。作戦は秘密なので小隊長と小沢さん、それにもう一人の三人で行った。細菌戦の典型的な謀略活動である。

井戸にビンを投げ込んだとき、四、五歳のかわいい男の子が近づいてきた。敵も味方も分からず、ニコニコしながら、「おじちゃん、何してるの」と無邪気に寄ってきた。その子は以前この村に来たときも会ったことのある、人なつこい子だった。「見られた」と小隊長は言い、小沢さんにその子の殺害を命じた。「そこまでするのか」と思ったが、命令には絶対服従だった。

小沢さんはもう一人の部隊員と、その子を近くの建物の二階に連れていった。たまたま飛行機が通り、「飛行機だよ、見てごらん」と空を指さした。子どもが空を見た瞬間、小沢さんは窓から突き落とした。だがその子は死ななかった。尻のところがべっとりと血だらけになり、大声で泣いていた。小隊長はその子を近くの小屋に連れて行き射殺した。一発目は当たらず、二発目が頭部に命中し、ひっくりかえった。小沢さんはそのようすを見ているほかなかった。

小沢さんはこの話をしたとき、なんともいえぬ苦しげな表情をした。小沢さんは戦後小学校の先生として半生を送る。「小学校の先生でありながら、こういうことをしたのは慚愧(ざんき)に耐えない」

と言った。男の子の泣き声は頭を離れなかった。その子は夢のなかにもたびたび現れ、復員してからずっと眠れなかった。小沢さんが細菌戦の実行を誰にも話せなかったのは、秘密を守れと言われた以上に、この体験があったからだった。

話を聞いている途中、奥さんが入ってきた。阿部がネズミ調査の話をすると、奥さんは「私も戦争中飼っていた」と言った。ラットを三箱やって、けっこうお金になった。一九四二年小沢さんがペストノミをまいているとき、奥さんは細菌戦用のネズミを育てていた。ネズミ生産地域の岩槻なら当然ありえることである。武雄さんも奥さんも岩槻育ちだ。「奥さんの育てたネズミで作られたペストノミを、旦那さんがまいていたかもしれませんね」と阿部が言った。それはまったくありえない話ではない。事実、内地から一六四四部隊へのネズミ輸送を示す次のような証言もある。

小沢さんの同期生の一六四四部隊員Eさんが、同じ埼玉県の加須市に住んでいる。Eさんも一九四三年、北支など他の細菌戦部隊と「マラリア工作隊」という特殊部隊に所属し、パラオ島に向かった体験がある。電話取材だけだったが、Eさんは、一六四四部隊のネズミ飼育班に属していた。一九四二年、ネズミの「増殖実験」を担当し、一二〇匹ほどのラットを飼育する。ネズミそのものを増やすのが目的で、トウモロコシとコウリャンが餌だった。部隊全体でラットが何匹いたかは分からない。ラットは一六四四部隊の資材調達官が直接内地に行き、飛行機で運んでき

た。それを「動物受領」と言っており、モルモットなども運んだ。月に一回くらいのペースだった。その「内地」が、自分の故郷(加須と春日部は埼玉でも同じ東部地区で近い)を指していたことを、Eさんは知らなかった。

二人の証言を聞いた帰り道、阿部が私に言った。「小沢さんにつらい思い出を言わせたみたいで聞くほうも苦しかった。小沢さんは学校の先生を長くされて、子ども好きだったと思う。それだけにあの話はつらすぎる。無理して聞く必要があったのでしょうか」。私にもわからない。しかし、黙ったままではもっと救われない。少なくとも証言したことを小沢さんは後悔してはいないと思う。

□波八六〇四部隊——丸山茂さんからの手紙

中国から帰り、報告書『ネズミと戦争』を製作すると、マスコミが取り上げた。それを見て、元八六〇四部隊員の方が大量の資料を送ってくれた。丸山茂という方だった。

「一〇月二日の新聞に貴校の活動の記事を見ました。特に野沢丈二君の話には感動致しました(TBSラジオのインタビューで)。被害者の立場からの戦争報告は多いけれど、加害者の側からの調査報告は少なく、貴校研究部の方々の、脅迫を受けたその重圧の中での調査は、信念の確かさと青年の勇気という点で、高く評価されます。私は一一月の初めに広東に渡ります。香港の難

民の遺体の捨てられた場所に慰霊碑が立てられたのですが、未だ日本人でその墓に詣でた人はいないのです。南石頭(ナンシートウ)に関わりのある私は、今尚埋もれている非命の魂に謝罪と慰霊の参拝をしたく、広州を訪ねます。その際、広東省科学院の沙東迅(シャートンシェン)教授に会います。教授に日本の高校生の近況として貴校研究部の報告書を見せたいと思います」

恥ずかしながら私たちは丸山さんを知らなかった。送られた資料を見て驚いた。「今度は八六〇四部隊の人ですか。どんどん話が広がりますね」と桑名が言った。資料は沙東迅氏の報告書から、ビデオや新聞、丸山さん自身のノートのコピーまで、かなりの量に及んでいた。丸山さんは、恐るべき大量殺戮事件の唯一といえる証言者だった。一九九三年、丸山さんは東京の七三一部隊展を見てショックを受け、八六〇四部隊の大量殺戮事件を語り始めた。一九三八年一〇月、日本軍は広東省に進攻、一〇日で広州を占領し中山(チョンシャン)大学を占拠、そこに本部を置き八六〇四部隊が編成された。部隊は本部と五課からなり、丸山さんは第一課の細菌研究班に所属した。ペストノミの製造は第四課の任務だった。

大量殺戮事件のあらすじはこうである。一九四二年、日本軍が香港攻略をしたとき、香港は中国からの避難民で溢れ、人口は二〇〇万人を超えていた。日本軍はその避難民を強制的に香港から追い出し、香港の人口を半分にした。ここに膨大な香港難民が誕生した。殺戮にあったのは、この難民のうち水路で広州に向かった人々である。

難民は広州市に入れなかった。広州手前にある南石頭の難民収容所に強制収容される。丸山さんの同僚の的場守嘉が、東京の陸軍軍医学校からサルモネラ菌を取り寄せ、それをお粥に混ぜ難民全員に飲ませた。毎日運びきれないほどの難民が死に、その数は二〇〇〇人に及んだ。サルモネラ菌という聞き馴れない細菌は、八六〇四部隊長佐藤俊二の得意分野で、佐藤は石井四郎と連名で、この細菌が原因の中毒事件についての論文を発表している。約三年間収容所にいた馮奇(フォンチー)さんは、「あのとき香港難民がたくさん船で来た。みんな嘔吐や下痢で死んだが原因不明だった」と言う。当時収容所ではこんな歌が流行った。「籠の鳥は高くは飛べない。味付け粥を食わなきゃすきっ腹。食えば食ったで腹痛み。病気になっても薬はない。死んだら最後、骨まで溶かす池に放り込まれる」。

死んだ難民は化骨池(かこついけ)に放り込まれる。収容所には横二〇メートル、縦と高さ五メートルのコンクリート製の池が二つ並んでいた。死体はその化骨池に運ばれ科学剤により溶かされた。多いときには毎日五〇人以上が処理される。化骨池は死体を効率よく処理するための八六〇四部隊の発明だったが、このときはそれでも処理しきれず埋められたものもあった。現在は広州製紙工場となった同地から、一二〇〇体を超える人骨が出ている。

住民の何金(ホーチン)さんの証言では、「一九四二年父は足がただれているという理由で収容所にむりやり連れられ、翌日には死んでいました。私は父の死体を探しに化骨池にこっそり入りました。六

つの死体をひっくり返して、やっと父を見つけました。遺体を運んで埋葬しましたが、化骨池のなかには私の村の人がほかにも死んでいました」。

この大量殺戮を実行したのは丸山さんの友人の的場守嘉だった。丸山さんはたまたま、的場が作った難民への細菌投与を示すグラフを覗いたのがきっかけで、的場からすべてを聞くことになる。的場は丸山さんに「部隊長に知れたら、おまえも無事にはすむまい。一生口外するな」と念を押した。事実この後、的場だけがニューギニアの激戦地に送られ、死亡している。「部隊長による口封じだった」と丸山さんは語る。その部隊長の佐藤俊二は戦後ハバロフスク裁判にかけられる。佐藤は石井四郎の犯罪には言及したが、香港難民殺戮と化骨池については黙っていた。証言をして、丸山さんは「的場の遺言をみんなに伝えることができた」と語る。

丸山さんの証言を機にこの事件の調査が始まり、中国では沙東迅氏が『日本軍の広東における細菌戦調査報告』をまとめた。それにしてもこれだけの大量殺戮がありながら、五〇年間知られずにきたことに驚きを禁じえない。殺されたのが難民だったため、中国でも遺族が現れなかった事情もある。もし丸山さんの証言がなければ、「香港難民大量殺戮事件」は闇に消えていたかもしれない。生徒は驚きと恐ろしさで丸山さんの資料を読んだ。だがその資料のなかには、この事件とは別の気になる証言がもう一つあった。八六〇四部隊ではなんと五〇万匹のラットが飼育されていたというのである。

□ペストノミ生産部隊——井上睦夫さんを訪ねて

証言者は千葉県に住む、井上睦夫さんだった。ネズミ五〇万匹なんてとんでもない数字である。桑名があわてて井上さんを訪ねた。井上さんは一九四三年、八六〇四部隊第四課病理班に配属される。第四課はペストネズミとペストノミを生産していたとされる、ナゾの組織である。人体実験の可能性も指摘されている。井上さんはいきなりその話をした。ペストノミの生産をする前、井上さんの任務は死体の病理解剖だった。軍医の助手として、毎日一、二体を解剖した。死体は一日に四、五体来た。解剖が追いつかず冷蔵庫に保管した。解剖は一体に三時間はかかり、一日に三体がやっとだった。

井上さんの担当は頭部だった。軍医は内蔵を取り出した。舌の根元を引っ張ると、内蔵を一緒に引き出せる。必要な部分だけ取り出し、残りは元に戻す。軍医が内蔵を取っている一方で、井上さんは頭蓋骨を切断する。井上さんは脳の構造に詳しかった。ノコギリで脳間膜を傷つけないように、パカッと頭蓋骨を開ける。脳につながる神経を一本ずつ切断し、脳下垂体を切って、脳を取り出す。その脳はホルマリン浸けにした。井上さんのした頭蓋骨切断は、新宿の陸軍軍医学校跡地で発見された頭蓋骨と切断面が酷似している。井上さんの証言は、新宿の人骨が日本細菌戦部隊のものである可能性をますます高めたといえるだろう。

井上さんは、生体解剖の証言を苦しそうに始めた。「そうは思いたくないが、結果的にはそう

だった」と語る。その中国人男性は憲兵に額を打たれているものの、まだ生きていた。その血管を引き出し顕微鏡で見ると、心臓の鼓動に合わせて赤血球が動いていた。「それはきれいだった」と井上さんは言う。病理解剖は一九四四年の米軍空襲まで毎日続いた。

一九四四年、井上さんはペストノミ生産の係となり、温度調節を担当した。着任するとすぐ、増産命令が出され部隊は活気づいた。ペストノミ一〇キロ必要というなら、一五キロ作ってやろうという勢いだった。米軍が中国南海岸に上陸したら、このペストノミ作戦が威力を発揮するだろう、と信じていた。仕事は大きくノミとネズミに分かれる。日本人の担当は二〇人近くに増員、他に中国人のクーリーを五〇人雇った。クーリーはネズミの世話だけで、ノミの飼育室には入れなかった。

中山医科大学北門と東門のあいだに巨大なネズミ飼育場があった。コンクリート二階建ての、長さ三〇間(約五〇メートル)もある学校のような建物が五棟並んでいた。これがすべてラットの飼育場だった。その棟のなかには棚が一〇段あり、すべての棚に八〇センチほどの金網の飼育箱がギッシリ積まれていた。飼育中のネズミは、ちょっとした病気でも随時報告し、大切にされていた。「五〇万匹は多すぎる。一桁違うのでは」と思っていた私は、この話を聞き「これは本当かも」と身を乗り出した。

ネズミはすべてラットで白ネズミだった。一九四三年、井上さんが部隊に配属されたころ、ネ

ズミは内地から送られてきた。港の近くの荷物省へ大量のラットが輸送された。それ以前からも送られていたという話だったが、一九四四年に制空権、制海権を失うと来なくなった。「それがなければずっと来ていただろう」と井上さんは語る。そのネズミもおそらく埼玉のネズミだろう。だがこの部隊については、埼玉のネズミがなくても、すでに自給による生産体制が確立していたようだ。

ネズミ飼育場の一角にペストノミの培養室があった。レンガ造りの培養室は奇妙な建物だ。入るとまわりはすべて棚で、そこに一〇〇個以上の石油缶が並んでいる。そのなかでペストノミが生産された。床には一面水が引かれ、中央のストーブで五〇センチ先も見えないほど、湯気が上がっている。危険な作業にもかかわらず、井上さんは雨合羽に長靴、軍手を二枚しただけで作業をした。

石油缶のなかにおが屑を敷く。そこに小さな篭に入れられた、身動きのできないラットを入れる。そしてラットの上にスポイトからノミを振りかける。ノミがネズミにたかるように、ネズミには乾燥血液を振りかけておく。ラットは一週間ほどでミイラ状になり、次のと取り替えた。石油缶の横には一二個の大きなビンがあった。これは石油缶を洗うとき、一時的にノミを保存する容器である。ノミに刺されたら最後なので、石油缶はホルマリンをかけてから慎重に洗った。湿気のなかでノミはどんどん繁殖し、最終的には月一〇キログラムの生産量に達した。ここでは、

ネズミにペスト菌を注射する「毒化作業」はとくになく、ペストは飼育過程で自然に伝染していくものとされている。

八六〇四部隊のペストノミ計画は一夜にして崩壊する。一九四五年六月、部隊は米軍の空襲を受け、ネズミとノミ関連の施設が集中攻撃された。五〇万匹のネズミ飼育場は壊滅した。米軍は細菌戦の情報を得ており、ネズミをねらっていた。クーリーなどの現地人から情報が漏れたのだろう。ペストノミが劣勢の日本軍にとって起死回生の作戦になる、と信じていた井上さんは、燃えていくネズミ飼育場を見て「すべてが終わった」と感じた。

井上さんはスパイのクーリーを一人捕まえ、表彰されている。飼育場を巡回していたとき、部隊の見取り図を隠し持っていたクーリーを一人で捕縛した。こうしたスパイにより細菌戦の情報は漏れていた。井上さんはそのスパイを憲兵隊に引き渡したが、「彼がその後どうなったかは、容易に想像がつく」と語る。

前章で触れた『陸軍省業務日誌摘録』には、八六〇四部隊についてペストノミが月々一〇キログラム生産可能だったと記述されている。井上証言はこの資料を裏付けたものと言えるだろう。また私たちにとっても、埼玉のネズミの行方が、膨大な規模で八六〇四部隊にあったことを想像させる証言だった。

□岡九四二〇部隊――五万匹の白ネズミを空輸

岡九四二〇部隊については、シンガポールに五万匹のネズミを空輸したTさんの証言をすでに紹介した。この証言を教えてくれたのは関口竜一氏（埼玉県立川口青陵高校教諭）だった。関口氏は高嶋伸欣氏（筑波大学付属高校教諭）とともに何度もシンガポールに赴き、日本軍の犯罪行為の調査をしている。私は、同じ埼玉の教員なので関口氏の活躍は知っていた。Tさんの「ネズミの飼育は、埼玉県でやっていたんですよ」という証言に触れ、関口氏は自らの県である「埼玉のネズミ」を追跡するなかで、私たちと出会ったのである。関口氏からはその後も、細菌戦の情報にとどまらず、この問題に対する本質的な考え方まで含めて助言を受けている。

九四二〇部隊の実態は、一九九三年の高嶋氏とTさんの現地調査により、ようやく明るみに出たといえるだろう。九四二〇部隊は一九四二年、五つの細菌戦部隊の最後に編成された。前章で紹介した『真田日記』では、各部隊のノミの分担比率を「満州五三%、南方一四%、南支五%、北支三%、中支一・五%、内地一二%」としてある。ここでは、五〇万匹のネズミを有していた南支（八六〇四部隊）の「五%」より、この南方（九四二〇部隊）の「一四%」のほうが大きな数字になっている。九四二〇部隊にも大量のネズミがいただろうと推測できる。

高嶋氏を現地調査に踏み切らせるきっかけとなった、もう一人の証言者がいる。『ノミと鼠とペスト菌を見てきた話』を自費出版した竹花香逸氏である。竹花氏は一九四三年六月、九四二〇

部隊に配属、敗戦までペストノミの生産に従事する。著書はその体験をまとめたものだが、九四二〇部隊でのネズミとノミの飼育状況を語る、私たちにとっても興味深い証言だった。この本で竹花氏はこう書いている。

「中安部隊はノミの養殖と、それらに関わる研究と仕事をする部隊である。ノミの飼育方法は、日光の直射をさけ、病棟のもとより舗装してある地面上に、どこから集めたのかと思われる細かいゴミを、農家の籾乾しの形そのままに、幅一メートル余り、長さ五メートルほどの飼育床が数条続いている。その飼育床の適当な位置に、鼠とり器に収められた鼠がノミの飼料として配置されている。(中略)簡単な用件を終わると中安中尉は『竹花、今日は珍しいものを見せてやる、来い』と小さな頑丈な建物の中に誘った。室に入ると、中尉はその中の十八リットル缶のガラスの蓋をとった。と、缶の表面近くまで詰まったノミが互いに光を嫌って中へ中へともぐりこもうとしてうごめき、一つの大きな玉となっている。私は息をこらしていたと思う。中安中尉は『どうだ、驚いたか』といいたげな顔をしていた。あの大量のノミがその後どう処理されたかは知る由もない。しかし実験に使用されたことはまずあり得ない。ノミの寝床の大量の細かいゴミとノミを区分する事は難儀のように思われるであろうが、ノミの光りを嫌う性質を利用した器具で、比較的容易に分離する事ができた」

「江本部隊の特徴は、細菌取り扱いの経歴の多い技術者が多く(中略)、部隊の仕事はペスト菌株

の保持、菌の殖培、毒化作業、少量のワクチンの製造、免疫に関わる研究等広範囲のようであった。この隊の重要な作業は『毒化作業』である。鼠にペスト菌を注射し、発病した鼠にノミをたからせ、ノミの胃袋にペスト菌が吸入されておれば即ち細菌兵器となる。かかる作業を毒化作業と称していた。ちなみにペスト病は鼠と人間だけが感染罹病する。とにかく江本部隊は梅岡部隊の中枢的な存在である」

中安部隊、江本部隊は九四二〇部隊のなかの小隊である。中安部隊は石油缶ではなく、ノミ専用のかなり大きな飼育床を有していた。江本部隊はペストノミ生産、すなわち「毒化作業」を行っていたことが分かる。だが高嶋氏がTさんや竹花氏の証言を得た段階では、この施設がどこにあったかすら分からなかった。二人の証言をもとに高嶋氏は、現地でそれらしい施設を一つひとつ当たっていく。九四二〇部隊の遺跡を特定できたのは一九九三年一〇月だった。

その施設はシンガポール近郊の、マレー半島南端ジョホールバルの北東約一三キロのタンポイにある精神病院「プルマイ病院」だった。ノミ養殖場を始め、施設はほとんど当時のまま残っていた。「毒化作業」に当たった秘密部隊「江本隊研究室」も特定できた。Tさんが運んだ五万匹のネズミを、その後飼育した施設も判明した。それはクアラピラーの市立中学校の校舎を接収したもので、現在は学校として再開している。当時は校庭を畑にしてネズミの飼料を自給していた。この校舎の裏から人骨が発見され、人骨は戦後のBC級戦犯裁判の証拠となっている。遺骨は人

体実験ではなく「敵性華僑狩り」という名目での住民虐殺のものと考えられる。これら施設の特定は、前述の『真田日記』にある「南方軍、『ホ号(細菌戦のこと=著者注・以下同)』関係、『アハ(アワ=ノミ)』ノ生産ハ馬来ノ精神病院ノアトテ黒『モチ(ネズミ)』ヲ使ヒ生産ス」の史料とも一致する。

以上、ネズミという視点から、七三一部隊の四つの「兄弟部隊」の実態を見てきた。いずれの部隊も、ネズミとノミの増産に血眼になっている姿が浮かび上がったと思う。証言者にネズミ関係者が多いのは、ネズミとノミの生産が各部隊の中心的作業で、それだけ従事者も多かったからである。七三一部隊イコール日本細菌戦部隊という「常識」は覆らざるをえないだろう。

だがそれ以上に驚くべきことは、遺跡の特定という基本調査すらここ数年のうちにようやく始まっている事実である。これら細菌戦部隊は、遺跡確認作業の開始に五〇年間の年月が必要だったのだ。それは加害の掘り起こしが、いかに厳しいものであるかを物語っている。遺跡のほとんどは現在も残っているが、一八五五部隊の静生生物研究所のように近年取り壊されたものもある。五〇年間は長すぎた。だがようやく発せられた証言者の言葉から、私たちは歴史の重みを汲み取っていかねばならない。

■防疫研究室――すべてはここから始まった

「もう一つの七三一部隊」は国内にもあった。新宿の防疫研究室と川崎の登戸研究所である。石井機関と呼ばれた日本の細菌戦部隊は一九三二年、陸軍軍医学校に防疫研究室を設置することから始まった。ハルビンに七三一部隊が編成されるのは四年後の一九三六年である。国内でできない人体実験は、防疫研究室を通して外地の細菌戦部隊で実行された。その「結果」はふたたび防疫研究室を通して国内の医師たちに伝えられた。医学者たちの犯罪的な「人体実験」組織の司令塔が、防疫研究室だった。防疫研究室陸軍主計だった天野良次さんは「すべてはここ(防疫研究室)から始まった」と言う。

生徒は同じ埼玉に住む天野さんを何度も訪ねた。「天野さんの家へ行くと、すでにプリントが人数分揃って並べてある。限られた時間内に多くのことを正確に伝えようとする緊迫感を感じた」と阿部。「天野さんは質問に答えるだけでなく、逆に私たちに平和とは何か、どう生きるべきか、などの質問をいつもされた。単なる事実の証言だけで話が終わったことは一度もなかった」と桑名。「高校生だから心が開いた」という天野さんは、戦争体験を継承することの厳しさを私たちに教えてくれた人でもあった。天野さんから防疫研究室近辺の地図の説明を受けたあと、四月五日、私と藤谷は新宿に向かった。

「軍医学校跡地で発見された人骨問題を究明する会」(略称「人骨の会」)の鳥居靖さんに防疫研究

室跡地の案内をしてもらった。「靖国神社の鳥居と覚えられるのは本意ではありません」と彼は自己紹介した。早稲田大学文学部正門で待ち合わせをし、隣の戸山公園に向かう。防疫研究室は鉄筋二階建て一八〇〇平方メートルの建物だったが、現在公園のグラウンドになっており、みごとなまでに何も残っていない。私たちが訪ねたとき、たまたま発見された地下道の取り壊し工事が始まったところだった。政府は防疫研究室関係の遺跡を、とにかく早く消そうとしているようだ。「この公園には、昔ここが防疫研究室だったという解説板を立てるべきですね」と藤谷が言った。

三人で予防衛生研究所(以下「予研」)に入る。さっそく人骨が発見されたポイントに行ってみる。新築の建物の通路付近がそこで、むろん何の解説もない。予研の裏庭をブラブラしていると、小さな「動物慰霊碑」があった。予研は、GHQ四〇六部隊につぐ埼玉のネズミの得意先だった。碑文は予研五代所長だった柳沢謙の筆によるもの。予研は初代から七代までのうち、実に六人が七三一部隊関係者で、部長クラスもほとんど関係者で占められていた。五代所長の柳沢はBCGの開発で名声を得た人物だが、常石敬一氏は『医学者たちの組織犯罪』で柳沢のBCG凍結乾燥技術は七三一部隊の「実験」成果に基づくものだったと指摘している。二代所長の小島三郎は後述する実験動物中央研究所にも関係する人物だが、一六四四部隊で人体実験をしていたという証言がある。

私と藤谷は予研の近くに住む芝田進午氏を訪ねた。芝田氏は「予研裁判の会」(予研裁判原告団)の会長である。この会は、エイズやペスト、また遺伝子組み換えによる未知の病原体を扱う予研が、人口密集地にある危険性を指摘し、裁判を起こしている。バイオハザード(生物災害)は原発事故と同じで、起こってしまっては取り返しがつかない。芝田氏によると、予研のネズミが脱走して、近所の幼稚園で発見されたことがあった。赤いマークを付けたこのネズミを、予研のある研究者はペスト実験に使っていたものと証言している。予研の高橋衛生昆虫部長も「ペスト関係の実験室と逃げたところが近い」と認めている。「ネズミはすぐ逃げますからね。地歴部のネズミも逃げました」と藤谷。ネズミの脱走事件一つをとっても、バイオハザードの恐怖は決して絵空事ではない。コントロール不能の細菌が流出したら、その被害は全国民全人類にさえ及ぶのである。

七三一部隊関係者で構成されていた予研が、戦後のネズミ生産の歴史にも深くかかわっていたことは次章で触れたい。私たちは芝田氏の家を去り、それから石井四郎の墓石と旧宅(若松荘、いまはなぜか厚生省の施設が建っている)を訪ねて、新宿を去った。

埼玉のネズミはいったん、防疫研究室に集められた。そのネズミはむろん少しは軍医学校でも使っただろうが、ほとんどが外地の細菌戦部隊に送られた。だがある時期だけ防疫研究室自体がかなりのネズミを必要とした形跡がある。それは終戦間際、防疫研究室の一部が新潟に疎開したときの話である。

戦況が悪化すると、本土決戦体制に備えて、一九四四年、防疫研究室も他の施設と同様に地方へ疎開する。防疫研究室は旧新潟競馬場を接収し、「新潟出張所」を開設した。のちにミドリ十字を設立する内藤良一が乗り込み、ペスト菌製造工場建設の指揮を取る。ペスト菌工場は、ペストネズミの逃亡を恐れて、当初離島の粟島が候補だった。ところが同島に村落があることがネックとなり、結局、川に挟まれた白根市大郷の中洲が選ばれた。ペスト菌工場が完成するまえに終戦となったが、ここではペスト弾による対米用風船爆弾作戦が計画されていた。新潟が原爆投下の候補地に挙げられたのは、このためだったという見方もある。

『新潟日報』によると、終戦の数日後Aさんは内藤の命令で細菌爆弾の海中投棄を命ぜられた。Aさんの証言では、そのとき捨てたものには爆弾のほかに、大量のネズミカゴがあった。埼玉の聞き取りでも、このころ新潟へネズミを運んだという証言がある。あるネズミ屋によれば、新潟へトラックでネズミを運ぶ途中、トラックが横転し、ネズミが逃げる事故があった。このできごとのため、そのネズミ屋は「新潟へのネズミ輸送」を覚えていた。新潟ではペストネズミによる細菌兵器開発が実際に進んでいたのでは、と推察できる。

ところで、防疫研究室跡を藤谷が見学しているとき、他の部員はこの八月二日〜四日に開催する「七三一部隊展ｉｎ春日部」にむかって準備していた。高校の部活が主催する部隊展は初めてだそうだ。「ネズミ飼育者に見てほしい」という思いを込めている。「ネズミと細菌戦」をテーマ

とする二二枚の独自パネルを製作するつもりだ。現在、飼育地域全域の自治体の後援をとったり、賛同者を募ったりしている段階である。生徒は「七三一部隊展・埼玉」(九四年一〇月)を見て、この問題に目覚めた。自分たちの力で七三一部隊展を開くのはその「恩返し」である。

この部隊展には「ネズミ生産地で問う」という副題をつけようと思っている。講演会ではネズミ飼育農家、ネズミ屋、ネズミを購入した防疫研究室、輸送した部隊員、満州でネズミを使った部隊員などのリレー証言を企画している。生徒は「購入者」の証言のお願いに、天野さんのお宅を訪ねた。「体が許せば証言したい」という天野さんは、体調がすぐれず、数日後に入院予定だった。酸素吸入器を付けていた。

天野さんはそのとき、それまで集めた細菌戦に関するすべての資料を貰ってほしいと言った。そこにはバック二個分におよぶ大量の資料がジャンル別にきれいに揃えられて並んでいた。「こんな大切なものをいただくわけにはいきません」と私は断った。でも「若い君たちに引き継いでほしい」という言葉に打たれて頂戴してしまった。「これはこの人の命なんですよ」と奥さんが言った。大きなバックを背中にかついで、私たちは天野さんのお宅を失礼した。「いただいたのは資料だけでなく、天野さんのご意志もですね」と藤谷。「そっちのほうが重たいですね」と桑名が言った。

□登戸研究所を訪ねて

川崎の登戸研究所も「もう一つの七三一部隊」である。登戸研究所は現在、明治大学生田校舎になっている。大部分は建て替えられてしまったが、まだ残っている遺跡もある。「やっぱり訪ねたいですね」と野沢が言った。

登戸研究所の本格的調査を行ったのは高校生だった。その成果は、神奈川県の法政二高平和研究会と長野県の赤穂高校平和ゼミナールの手で『高校生が追う陸軍登戸研究所』としてまとめられている。この本は私たちにとって、いわば目標のような存在だった。一年前、私がこの本を紹介したとき、「高校生にもこんな立派な本が作れるのか」と阿部は驚いた。そのときはまさか、第二弾を自分たちが書こうとは夢にも思わなかった。ひととおりの調査が終わったいま、最後に登戸を訪ねてみたいと野沢が思うのはしぜんだった。法政二高の渡辺賢二先生に案内をお願いすると快諾が得られた。一九九六年の春休み、私と野沢と阿部は明治大学生田校舎を訪ねた。桜が満開だった。

登戸研究所は、一九三七年陸軍科学研究所「登戸実験場」として新設、三九年「陸軍科学研究所登戸出張所」、四一年「第九技術研究所」と改名する。いわゆる「登戸研究所」は通称である。組織は四科からなり、一科は無線や電波光線、風船爆弾、二科は毒物、細菌兵器、三科は偽札やパスポートの偽造、四科は実用化の最終実験がおもな任務だった。まるで謀略作戦のデパートの

ようだ。「なんでもありですね」と阿部が言った。

渡辺賢二先生は石井式濾水機に使われていた濾過筒、登戸研究所で作られた偽札、風船爆弾に使われた和紙など、どこから手に入れたのかと思うような珍しい「実物教材」をバッグいっぱい持ってきた。私たちは登戸研究所の遺跡をまわりながら渡辺先生の話を聞いた。

まず、いちばん見たかった「動物慰霊碑」に着く。二メートル以上もある大きな黒い石板に「動物慰霊碑」とだけ刻まれている変わった石碑である。この慰霊碑のある近辺が、実験動物の飼育場だった。残念ながらネズミがどれくらい飼育されていたかは分からない。慰霊碑は一九四三年、「陸軍技術有功章」の賞金で立てられたもの。登戸では細菌以外にも毒物や怪力光線などの動物実験が行われていた。ところがこの慰霊碑は本当は「動物」ではなく「人間」に対してのものではないか、と考えられているのだ。

戦後、帝銀事件のとき、登戸研究所所員が疑われ、取り調べを受けた。その『警視庁捜査メモ(甲斐メモ)』には、一九四一年と四三年の二回、登戸研究所所員が南京に渡り、一六四四部隊と共同で人体実験をしたことが記録されている。それは慰霊碑建立の直前だった。登戸は七三一部隊のように大量の実験動物を消費したわけではない。それにしては大きすぎるわりに除幕式も行われなかった、不可解な「動物慰霊碑」なのである。「いくら慰霊碑を作っても、人間を『動物』と表現したんじゃ慰霊にならないですね」と阿部が言った。

第一科の解剖室だった建物が残っていた。現在は農学部の実験研究室として使われている。近代的な大学のビルの谷間にボロボロの建物が建っている。窓ガラスが割れていて中をのぞくと、五〇年前そのままのような汚さだった。タイルなど当時の設備も残っているという。この解剖棟の東半分が小動物解剖室だった。おそらくネズミの実験などもここで行われたのだろう。

解剖室を西へ行くと、近年取り壊された低温室跡地に着く。この低温室は零下四〇℃まで設定できる。細菌戦研究には絶対必要な施設である。その取り壊しのとき、床下から三〇個ものネズミ捕獲器が出土した。それはすぐ処分されたとのこと。「ネズミの重要性が分かってないですね「大切な歴史資料なのに」と阿部が言った。登戸でも、満州のように実験用の「ネズミ取り作戦」が展開したらしい。

こうして私たちは渡辺先生とともに、火薬庫、陸軍石標、登戸研究所碑のある弥心神社、旧陸軍時代の消火栓、第三科の偽札工場跡などの遺跡をまわった。現在、明治大学ではこれらの遺跡を「登戸研究所資料館(仮称)」として保存する運動が進んでいる。完成すれば、大久野島の「毒ガス資料館」と並ぶ、加害をテーマとした貴重な資料館となるだろう。

一九四四年から四五年にかけて、登戸研究所は長野県上伊那郡宮田村に疎開する。移転した「登戸分室」を調査し、石井式濾水機を発見するなどの成果を上げたのが赤穂高校平和ゼミナールの高校生である。赤穂高校と法政二高がそれぞれの郷土の「登戸研究所」調査結果を交換しな

から完成したのが、前述の書物だった。「高校生同士で研究交流できるなんてうらやましい」と野沢。夏休みに予定している『七三一部隊展・in春日部』にはぜひ法政二高平和研究会の高校生を招待したい、と野沢と阿部が話していた。

一九四四年五月、大本営の松代移転計画が発表される。その松代を中心にして陸軍中野学校や登戸研究所が配置され、国内遊撃戦体制が準備された。これが日本の考えた本土決戦だった。登戸研究所が長野に行ったのは民衆を守るためでなく、天皇(大本営)を守るためだった。

渡辺先生の話を聞いているうちに夕方になった。桜の下では大学生がお花見を楽しんでいる。埼玉のネズミの行方を追っているうちに、私たちはずいぶんいろいろな場所に出かけてきた。防疫研究室から始まって、夏休みには中国の七三一部隊や一八五五部隊跡を訪ね、一周して最後に登戸研究所に戻ってきた。その間ネズミという小さな窓から、意外に大きな戦争の姿が見えてきた気がする。だが、これでネズミの話が終わったわけではない。ネズミのもつ不思議な歴史は戦後もさらに劇的に展開していくのである。

3. ネズミ村の戦後史

□戦後も続いたネズミ増産

終戦で軍は崩壊し、ネズミは買い手がなくなり、大量に余った事情はすでに述べた。「引き取ってくれ」と要求する飼育農家の対応で、生産組合(埼玉県医科学試験動物生産組合)はパニックになった。ウサギの肉は焼鳥屋に売られたが、ネズミは一部食料になったものの、結局処分された。処分方法は、フグザルにネズミを詰め込み、放置しておく、ネズミは自分自身の熱で、蒸れて死んでしまうというものである。金網に入れて水死させる場合もあった。

敗戦後すぐ、ネズミの軍専属業者であり組合の設立者である田中一郎(仮名)は戦犯として逮捕されるのではないか、という噂が広まった。だが逮捕どころか、田中は取引先を日本軍からアメリカ軍GHQに乗り換え、ネズミ生産を戦前以上の産業に育て上げていく。敗戦時の混乱や四七

年のキャサリン台風による打撃はあったが、農民は戦後もネズミを作り続けた。

七三一部隊について考えるとき、いつも暗い気持ちになるのは、戦犯免訴の問題である。石井四郎は七三一部隊の「研究成果」を譲ることを条件に、軍事裁判を免れた。七三一部隊で三〇〇〇人の人々を殺した医師たちは、日本に戻って大学教授や研究所所長など高い社会的地位を得ている。戦後ずっと、七三一部隊の医師たちは日本医学界の中枢に君臨していた。石井の後任で七三一部隊隊長となった北野政次や防疫研究室の内藤良一は、ミドリ十字社を設立した。ミドリ十字による血友病患者のHIV感染問題の背景には、「七三一部隊の思想」が流れていると指摘される。「七三一部隊での三〇〇〇人の犠牲はいま、二〇〇〇人のHIV患者としてよみがえった」と言われてもいる。

田中は、四六年三月に早くもGHQ専属の実験動物業者になっている。それはちょうど石井四郎がGHQと取引をし、戦犯訴追を免れた時期だ。GHQは石井から細菌戦の情報を得る過程で、ネズミの生産ルートも「引き継いだ」のである。田中一郎が七三一部隊からGHQに得意先を変えていく姿は、ついに最後まで「戦犯」とならなかった七三一部隊の医師たちの「転身」と符合するかのようだ。

田中の研究所(日本実験動物綜合研究所・後述)の別棟にはGHQ専用の接待室が設けられ、そこにはビリヤードまで設置されていた。研究所にはアメリカ兵が頻繁にジープでやってきて、宴会

をしたり、野球の試合などをした。アメリカの接待ばかりで疲れた、と手伝いに呼ばれた飼育農家の女性は証言している。田中がアメリカ軍から買ったフォード車は、人々の目を引いた。当時の田中を「春日部一の大金持ち」と言う人もいた。

ネズミを必要としていたのは、アメリカ軍の四〇六部隊である。四〇六部隊はウェポンキャリアという大型輸送車で、毎週月曜と木曜にネズミを取りにきた。月曜と木曜の朝には四〇六部隊の出荷に間に合わせるため、この地域の仲買人全員がネズミを持って田中のもとに集まった。ネズミ以外ではウサギやモルモットなども搬出したので、車はいっぱいになった。四〇六部隊の需要は年毎に増えていき、飼育農家が足らなくなるほどだった。それはまるで七三一部隊へ納入していたころの活況のようだった。

私たちは、戦後五〇〇箱を飼育していた春日部市のOさんを訪ねた。Oさんの家の倉庫にはいまも無数の飼育箱が山積みになっている。Oさんは女手一つの専業飼育者だった。五〇〇箱ともなると、ワラ替えだけでもたいへんな重労働だ。戦前はラットが中心だったが、戦後はマウスにかわる。「戦後の最盛期は戦中以上だった」とOさんは語る。Oさんはその後、四〇六部隊細菌学部で働く動物飼育係の男性と結婚する。Oさんは何度も四〇六部隊を訪れていた。夫と一緒にアメリカ兵とパーティーなどもしたが、部隊内は非常に警戒厳重だったのが印象的だった。Oさんの家には、いまも四〇六部隊の英文の感謝状が飾られている。

戦前田中によって作られた「埼玉県医科学試験動物生産組合」は、戦後の事業者団体法によって活動ができなくなった。四七年農業協同組合法が公布されると、春日部にも農協ができる。その初代組合長は田中と近しい関係だった。田中は、彼を通じて戦前の生産組合を農協組織に組み入れることに成功する。「埼玉県医科学試験動物取扱所」となった。五〇年、かつての組合は埼玉県農販連に移管し「埼玉県農業共同組合連合会医科学試験動物取扱所」となった。田中はそこの所長となると同時に、田中のもとで働いていた人々は一応農協の職員という形になった。一方同時期に田中は「日本実験動物綜合研究所」を設立し、その所長にもなっている。会計長には旧七三一部隊員の山田二郎(仮名)を招いた。ところが四〇六部隊との取引だけは農協組織を通さず、依然として旧生産組合名で納入を続けていたのである。

「日本実験動物綜合研究所」の建物は現在、消しゴム工場として残っている。経営者はまったく別の人である。当時の事務所やＧＨＱ接待室職員の住宅もそのままあり、これも別の人が住んでいる。生徒は消しゴム工場を訪ねたが、そこの人たちはネズミのことは何も知らなかった。消しゴム工場を訪ねた阿部は、「この工場が前、ネズミ研究所だったことすら知らないなんて、遠い昔の話なんですかね」と少し意外そうな顔をした。

□飼育農家は六〇〇〇軒だった

話が四〇六部隊に入ってきたのでGHQ文書の内容を説明しよう。GHQ文書の発見で、私たちは初めてネズミ生産の全体像を知ることができた。なかでも驚いたのは、四〇六部隊との関係がはっきり明記されている点だった。GHQ文書には何が書かれてあったのか。

GHQ文書は全部で八点あり、これを最終的にまとめたものが『埼玉県に於ける医科学試験用マウス種二十日鼠の飼育状況実態調査』(以下『実態調査』と略す)である。『実態調査』は日本文だが、他の七点は英文。英文の訳は阿部が担当したが、彼の訳文は誰も理解できなかった。結局、研究の助言をいただいている関口竜一先生(埼玉県立川口青陵高校教諭)のお世話になる。『実態調査』の正確な作成年月日は不祥であるが、ほかの七点との関連で一九五〇年二月〜三月のものと推定される。『実態調査』の差出人(制作者)は東京地方経済調査庁で、受取人は明記されていない。ここではより内容がまとまっている『実態調査』を中心に見ていきたい。

この調査のきっかけとなったのは一枚の手紙だった。手紙は英文で、GHQ文書の七点のうちの一つである。杉戸のある飼育農家が埼玉県民事部司令官に宛てたものである。

「拝啓

私は副業として実験用ハツカネズミを飼育している農家です。ハツカネズミ一匹の生産費は最低四、五円かかりますが、生産組合指定の集荷人は八月の暴落を理由に一匹につき二、三円しか

払ってくれません。しかし、あるつてからネズミの市場価格は一八円から一九円の間を動いていると聞きました。

私たちが飼育するハツカネズミの大部分は進駐軍に収められており、それを理由に生産組合は生産に励むよう求めてきます。ところが組合は依然買い取り価格を下げようとしています。いったいハツカネズミはいくらで進駐軍に購入されているのですか。また組合の面々は不当な利益を得てはいないでしょうか。貴下においてこの件を調査していただければ幸いです」

『実態調査』はこの訴えにより、偶然作成されたものだった。末端の飼育農家が中間マージンの取りすぎに怒ったのだ。もしこの農家が訴えていなかったら、ネズミ生産の全貌を語る資料は存在しなかっただろう。『実態調査』は九章よりなり、内容は生産範囲、集荷形態、販売状況、買取価格など多岐にわたっている。調査対象は、田中が巧みに使い分けていた二つの組織、農協内の「医科学試験用動物取扱所」と戦前からの「埼玉県医科学試験動物生産組合」である。調査対象期間は一九四八、四九年の二年間である。

まず一九四八年と四九年について、ＧＨＱと「一般」の月別納入単価を比較した一覧表がある。納入単価は四八年段階ではＧＨＱより「一般」が高いが、四九年四月よりＧＨＱが高くなり、以後ずっと金額的にもＧＨＱが高く買い取っている。納入数は四八年が四三万四、四九年が五一万四という膨大な数字である。量、値段ともにＧＨＱは最高のお得意様だった。英文のＧＨＱ文書

では、田中のシェアは全国の八〇％で、五〇年の需要は「占領軍」が四五万匹、「厚生省」が三〇万匹、「一般」が三〇万匹としている。合計一〇〇万匹を超えている。

次に集荷系統の図を見てほしい(図1)。ここで初めて、私たちは飼育農家が六〇〇〇戸に及んでいたことを知った(六〇〇〇は大きな数字だが飼育経験者全体から見ればまだ一部分であろう)。かつてのネズミ屋は集荷人と仲買人の二段階に分かれている。四〇六部隊がネズミを取りにくる月曜と木曜に、田中のところに集まるのは一四人の集荷人である。この図でもっとも奇妙なのは、集荷系統と手続き系統が分離していることだ。実線の集荷系統を見れば分かるとおり、ネズミは田中が一括して「四〇六部隊」「厚生省」「一般」に輸送している。ところが手続き系統を見ると、なぜかGHQ四〇六部隊についてのみ「契約代行人　小林四郎」なる人物が行っている。

『実態調査』第五章では、集荷系統の各段階別の利益配分が詳細に分析されている。組合の中間マージンの取りすぎへの訴えから始まった、この調査のいわば核心にあたる部分である。死亡率や管理費などの損失分もていねいに計算されているが、ここでは単純に買取価格(一九四九年七月〜一二月)だけを図にしてみる(図2)。

GHQが三五円四〇銭支払っていたネズミ代が、農民にわたるころにはたった七円になっているという驚くべき事実がある。この利権的構造に対し『実態調査』は飼育者に一四円から一五円支払われるべきだと結論している。ネズミ一匹についての利益を比較するなら、もっとも労働力

図１　集荷系図表

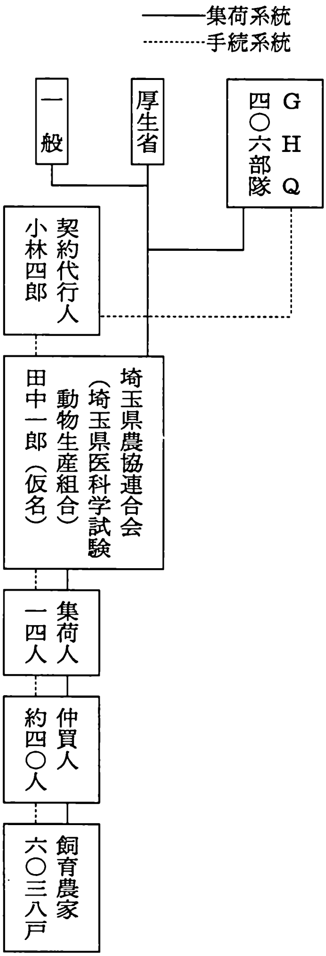
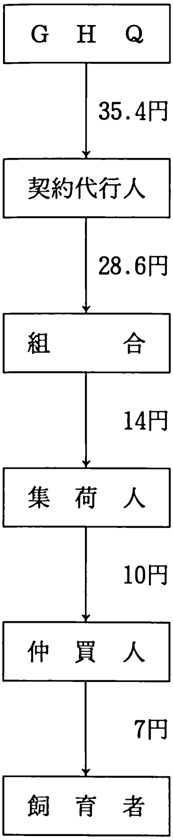


図２　買い取り価格



を必要とする飼育者の収入が七円(諸経費を引くと実益はおそらく三円程度)なのに対し、組合は一四・六円の利益を得ている。六〇〇〇軒の飼育者を傘下にしていた田中の利益総額は確かに「日本一のネズミ業者」にふさわしいものだったろう。だがこの図でもっと異様なのは「契約代行人　小林四郎」の存在である。

□小林四郎と「眠り口銭」の謎

小林四郎の利益は一匹につき六・八円、飼育者の七円とほぼ同額である。『実態調査』によれば、小林は実物のネズミにまったくタッチすることなく、全農家六〇〇〇軒の総収入と同額の利益を得ていた。いかに敗戦直後の混乱期といえども、こんなボロ儲けがあってよいのか。少々長くなるが、『実態調査』が語る小林四郎について引用する。

「契約代行人と称する東京都中央区日本橋一丁目九番地の小林四郎は、日本木材株式会社々長及大和復興株式会社々長をしているもので、埼玉県医科学試験動物生産組合代表者田中一郎の連合軍関係契約を代行しているのみで、ネズミ一匹につき六円八〇銭の手数料と称する、俗に言う眠り口銭を取っている。その取扱状況は昭和二四年六月より開始している。

自二四年六月　至二四年一二月の七ケ月間

一六二八四六四　一一〇七四七五円二〇銭の巨利を貪っている。

右小林四郎の介在した事情については、田中一郎は多くを語らなかったが、仄聞するところによれば、この二十日鼠の飼養の有望性に着眼せる小林四郎が、当時主管官庁である特別調達庁木材課に知人のある関係から、猛烈なる運動をして二十日鼠納入の権利を取るべく食い入ったが、GHQ天然資源局厚生課においては、春日部町の田中一郎以外に納入する能力あるものなしと、田中一郎はGHQの支持を得て納入中なので、如何とも致し難く折衝の結果調達庁の意嚮もあるので、契約代行人として口銭を取られているので、裏面に事情があるように推察される」

なんだか分かりにくい文章である。この日本文だけを読むと、GHQと田中のつながりができたあとに、小林四郎が介入してきたように読める。しかし、それは他の英文資料から判断して、逆のようだ。小林四郎はすでに何らかの権限を有しており、田中一郎はそれを否定できず、その結果「眠り口銭」の権利を許したらしい。だが、この文面からは「裏面の事情」は分からない。「眠り口銭」などとはまったく不可解な話で、敗戦直後の日本とGHQの政治の暗部を見る思いである。

生徒はこの「謎の人物」の正体をつかむべく、追跡を試みた。会社社長のうえ、住所も分かるのですぐ見つかるだろうと思った。まず中央区の歴史編纂室を訪ねると、即座に「そこはいま誰も住んでいません」と言われた。日本橋の一等地で居住者のいない地区なのだ。古い地図を見せてもらうと、たしかに「小林四郎」の家は存在していたが、そこまでだった。それから区役所に

行き、移転先を尋ねた。教えてくれない。事情を話すと、申請すれば可能性はあるという。ケースバイケースだそうだ。だが本人にとって不利益な尋ね人には教えないのが原則だそうで、このケースは難しいとのこと。区役所はあきらめる。つぎに会社社長なので「紳士録」をかたっぱしからあたったが無駄骨。木材会社なので、電話帳の関係企業を上から順にかけまくったが、ダメだった。これでもう、「小林四郎」を追跡する手立てはなくなった。

生徒は会う人みんなに「小林四郎を知っていますか」と訊ねた。そしてあるとき、あるネズミ屋が「その人なら田中一郎から聞いたことがあるよ」と答えた。私たちは思わず身を乗り出した。そのネズミ屋の話では、田中と小林の関係は戦前にさかのぼる。初めに軍にネズミを収めていたのは、岐阜県大垣市の人だった。この岐阜の人物から軍専属の権利を田中に世話したのが、小林四郎だったそうだ。小林は軍人ではないが軍の顔役で、軍に出入りする業者の口利きをしていた。戦争中にはこうした人物がいたらしい。小林は業者についての実権を持っていて、田中は頭が上がらなかった。この関係がGHQの時代になってどう変化したか分からないが、「眠り口銭」の存続から見て、小林は一定の立場を保持したようだ。田中にとって小林は目の上のタンコブだったのである。

□四〇六部隊と朝鮮戦争

四〇六部隊の日本での発足は、一九四六年五月横浜においてである。やがて東京丸の内ビル内に移転、五六年座間に移った。部隊は細菌学、昆虫学、病理学、血清学などの研究部門を持ち、米軍将校教授九人、助教授二人、技術研究者二五人、さらに一〇〇人以上の日本人研究員で構成されていた。旧七三一部隊から四〇六部隊に移った研究者も多い。朝鮮戦争時、部隊は「国連軍四〇六診療所輸血部」を名乗り、朝鮮半島に渡っている。ちなみにこのとき、売血で得た血液を朝鮮に運び大儲けしたのが、ミドリ十字の前身「日本ブラッドバンク社」だった。

一九五二年二月、朝鮮民主主義人民共和国はアメリカ軍が細菌戦を行っていると抗議、三月には中華人民共和国も同様の抗議を行った。国際赤十字委員会とＷＨＯは「朝鮮及び中国に於ける細菌戦に関する事実調査の国際科学委員会」を設置する。同委員会は現地調査を実施し、『アメリカ軍の細菌戦争』として報告書をまとめた。この報告書は、アメリカ軍がノミを利用してペストを流行させる細菌戦を行っており、これは旧日本軍の手法と非常によく似ていると結論している。また、朝鮮戦争時、石井四郎がたびたび朝鮮に渡った事実にも触れ、それはアメリカが石井ら七三一部隊員に依拠して細菌戦を実行したためだとしている。

『アメリカ軍の細菌戦』のなかには、田中の名前が二回出てくる。一回はペストネズミの大群を直接放したとされる「甘南事件」で、この事件の概要を説明したあと、「また別の日本の新聞報道

(『講和新聞』一九五二年八月)は、石井四郎の前の助手田中一郎の指導のもとに、齧歯類の大量生産をやる飼育所のあることを、暴露していた」とし、このアメリカ軍の細菌攻撃のネズミが、田中の生産であることを暗に示している。

もう一回は四〇六部隊と田中一郎の関係を示唆する、アメリカ軍将校の証言である。その将校は調査団の事情聴取に際し、使われた生物材料は日本から来ていたようだと答えている。報告書はこの証言を「意味深いこと」とし、続けて「石井四郎のもと助手で田中一郎という人間が、日本で細菌飼育場を経営しているのが見つかり、そこでは月一五万匹の齧歯類が生産されている」と述べている。

田中が「細菌飼育場」まで経営していたとは思えないが、当時月一五万匹ものネズミを生産できたのは、ここ埼玉以外考えられない。田中を石井四郎の「もと助手」と呼ぶのも、戦前からのつながりを考えればばうなずける。アメリカ軍将校自身の口から、ネズミが日本産だという証言が出たのである。埼玉のネズミが朝鮮戦争の細菌戦に使われた可能性は高まるだろう。なお、朝鮮戦争終了後すぐ、春日部近辺ではネズミが細菌兵器に使われていたという噂が流れている。

さて『実態調査』にもどろう。『実態調査』は一九五〇年二月ころのものだった。朝鮮戦争勃発のわずか四カ月まえである。対象期間も四八年、四九年の二年間で、GHQのネズミ需要がもっとも急増したときである。英文のGHQ文書では、一九五〇年の需要は四五万匹で需要のピーク

であるとしている。現地の聞き取りでも、この時期は戦前を上回る活況で、生産組合はGHQの要求に追いつけない状態だった。朝鮮戦争直前、四〇六部隊は比類のないほど大量のネズミを必要としていた。

□川辺村生産組合と山田二郎

朝鮮戦争時のネズミ需要は、埼玉のネズミ生産にふたたび火を付けた。田中はほかの注文を切ってでも、四〇六部隊に応えようとする。生産組合で予防衛生研究所担当だったKさんによれば、Kさんが予研から注文を取ってきても、「予研は儲けがない」とネズミはすべて四〇六部隊に回された。苦労して注文を取ったKさんはおもしろくなかった。四〇六部隊は例の大型車でどんどん取りにきて、生産が追いつかない状態だった。Kさんによれば、四〇六部隊のネズミの用途は日本脳炎のワクチンのためと説明されていた。だが、厚生省のある人は、ワクチンは別のところでも作っていたので、あの大量のネズミをそれだけのために消費したとは思えない、と語っている。

四〇六部隊の注文はハムスター、モルモット、ウサギもあったが、圧倒的にマウスだった。生産組合はとにかく飼育農家にマウスをやらせた。埼玉のネズミ生産は一挙にマウスへと変化した。当時GHQの力は絶大だった。ネズミ生産はその力を背景に波に乗った。埼玉県農業課も、GH

Qの要請なので奨励した。

出荷の日、生産組合はそれぞれが集荷したマウスであふれ返った。四〇六部隊の到着前にマウスは体重別に仕分けしなくてはならない。仕事は朝の五時から始まった。熟練したネズミ屋はマウスを手に取っただけで重量が分かる。大量のマウスは忙しく八グラム、一〇グラム、一二グラムと、大きなフグザルに体重別に分けられ、出荷された。

こんな話もある。四〇六部隊の要求でハムスターの飼育も始まった。一九五二年から三年間がピークだった。あるネズミ屋は埼玉県吉田町に行き、「目玉が飛び出るほど」の高値でハムスターを売り歩いた。子どもができれば高値で買い取るという約束で売ったものだが、実際には買い取るのが不可能なほどたくさん売ったので、一種の詐欺だった。結局ハムスターは安値になり、吉田町の農家は大損した。そのネズミ屋は「いくら高くても、これが元でどんどん増えると言えば農家は買う。種を持っていけば、札束はいくらでも手に入る」と言ったそうだ。

四〇六部隊は綿羊の飼育も要求した。三〇頭の羊が鉄道で運ばれ、春日部の町の道路を、まるで牧草地のように羊の群れが歩いた。羊は月に一、二度、四〇六部隊のアメリカ人研究員が来て採血をした。その血が何に使われるのかは分からなかった。

四〇六部隊のこの需要に対し、田中は各地に生産組合の支部を作って増産しようとした。一九五〇年庄和町では、田口新吉さんによって「川辺村生産組合」が設立される。田口さんは四六年

外地より川辺村に帰還、四七年ＣＩＤ（米国陸軍技術情報部）に就職、そこで七三一部隊の情報とその関係者がＧＨＱに協力している事実を知る。五〇年地元に戻り、ネズミ生産組合設立を計画する。その計画の指導者の山田二郎が七三一部隊員だったことに、田口さんは驚いた。設立準備で田口さんは山田と会う機会が多く、山田の話を興味深く聞いた。当時山田は七三一部隊や石井四郎について秘密にすることはなく、よく話した。山田の話から田口さんは、ネズミが細菌戦に使われていたのではと考えるようになった。

五〇年五月に川辺村生産組合が設立される。その結成式で、あいさつに立った山田は次のような話をした。田口さんのメモよりその話を紹介したい。

「結成おめでとう。このような組合がどこの村にもできるとよいと思います。戦前はこの辺の村はどこでも、実験動物の飼育が盛んでした。終戦後は研究機関もなくなり飼育者も少なくなりましたが、最近は再び需要が増えてきました。戦争中私は満州で関東軍防疫給水部隊長の石井四郎閣下の副官を務め、その資材調達の任務で、春日部の田中さんのところへはよく来ました。たくさんのネズミを飛行機で満州へ送りました。この部隊は日本軍唯一の、天皇勅令部隊で隊の予算は無制限でした。専属の飛行場を二つも持っており、私は専用飛行機で内地を往復していました。

いまは日本軍に代わってアメリカ軍が伝染病の研究をしています。伝染病の研究は軍事上でも

たいへんな役割があるもので、石井部隊にいた医学者はだれも大学教授級の人ばかりで、現在はアメリカの研究機関にいる人もいます。石井閣下も今は総司令部のおかげで、のんびり研究できると喜んでいます。ここで生産されるネズミはアメリカ軍へ運ばれます。アメリカ関係への納入を許されているのはうちだけで、それができるのも石井閣下のおかげです。需要は増加するばかりなので、大いにがんばって生産してください」

農民は山田の話の意味が分からずキョトンとしていた。山田は生産組合の権威づけがしたくて、アメリカ軍や石井の例を出しただけかもしれない。だがそのとき、田口さんだけはこんな場所で石井の話が出たので驚嘆し、その内容を克明に覚えていた。山田の話は、田中と四〇六部隊とのあいだに石井四郎が介在した可能性を示唆している点でも興味深い。

この演説の行われたわずか一カ月後に、朝鮮戦争が勃発する。埼玉のネズミは七三一部隊に引き続き、またもや細菌戦の道具として提供されていったのだろうか。

■ 埼玉のネズミの「その後」

ネズミ生産は五〇年をピークに空前の活況を呈した。ところが五三年朝鮮戦争が終わり、四〇六部隊がネズミを買わなくなると、しばらくはワクチンの需要があったものの、ネズミ生産は不景気になっていく。

生産組合で働いていたMさんによると、彼は五四年に就職し、座間の四〇六部隊にネズミを納める担当になった。だが、それから何年もしないうちに四〇六部隊に「切られた」という。埼玉のネズミは不景気になり、Mさんは恩を受けたので最後までやろうと考えたが、職員はどんどんやめていった。結局、六〇年まで続けて退職した。

不景気になると、飼育農家への支払いも滞るようになり、トラブルが生じる。杉戸の堤郷というところでは、農家二〇軒が組合から種を買って飼育していた。Mさんの話では、ある日堤郷の農家が押し寄せてきて「支払いをしろ」と迫った。Mさんは謝ってその場を凌いだが、生きた心地がしなかった。

田中から離れる人も出てきた。集荷人には、もともと田中より古くからネズミ屋をしていた人が多いから、そんな人は自分でやりたいと思っていた。Sさんは五〇人ばかりの飼育農家を持っていたから、それをもとに独立した。そのころ、田中は下請けの集荷人に金を払えずトラブルになっていた。Sさんが、田中よりは安値だが即金で払う約束をすると、何人かの下請け集荷人はSさんに鞍替えしてきた。田中の作った生産組合の組織にも、しだいにヒビが入り始めた。

不景気ながら続いていた生産組合だったが、それも田中の死によって空中分解してしまう。現在、ネズミ産業は全国組織として「日本実験動物共同組合」があり、加盟業者は全部で五九あるが、埼玉はたったの六軒である。その六軒は、田中から別れた仲買人が個々に経営しているもの

である。結局、埼玉のネズミは田中の登場で巨大化し、田中の死とともに消失していった。埼玉県東部のほとんどの農民を巻き込んだネズミ生産は、田中の死とともに終わっていった。

埼玉のネズミが縮小したのは、時代が進むにつれ無菌飼育などのさまざまな条件が要求され、ネズミ生産は農家の副業でできる仕事ではなくなったからだ。実験動物自体の質が変わったとき、埼玉のネズミの時代は終わりを迎えざるをえなかった。

地元の聞き取りでも飼育条件が厳しくなり、困ったという。まずは病気に対する検査だ。ネズミはすぐ風邪をひいたり、内臓に虫がわく。それでもう売れない。一匹でも出ると全部駄目になる。ワラの使用はイモチ病の原因となるため禁止された。健康状態や飼育方法の注文も厳しくなる。オスかメスか、体重や健康管理などの条件がついた。メスは売れなかった、と思うとたまにメスの注文が来る。ラットは一〇〇グラムきっちりでないとダメで、五グラム違うと撥ねられた。六〇年ごろから固形飼料になる。固形飼料は一日二回、量も時間も指示された。水はビンの容器から飲ませるようになる。「うるさくない時代」は野菜をいくらでも食べさせたので、水は必要なかった。野菜や穀物は禁止になった。そのうち温度の調節が要求され、冬は暖房をするようになる。これが面倒だった。もはや、農家のおばあさんが副業でやる仕事ではなくなった。

研究所(買い手)の指示も細かくなった。研究所によって必要なものが違うのが、また厄介だっ

た。体重一つとっても何グラムのマウスを使うのかは研究所によって異なり、同じ研究所でもその時々によって異なる。それぞれに対応しなくてはならない。時期によって需要が集中したりバラついたりするのも困った。夏休みは買い手がなく、ネズミを殺さざるをえなかった。条件の異なるさまざまなネズミを常時揃えておくのは困難だった。

あるネズミ屋は、ネズミの体重が足りないとき、「ご飯と鰹節をあげるとネズミは一晩で太った」と言う。これはその場凌ぎのインチキだが、春日部ではみんながこの方式をやったので、やがて研究者の信頼は薄れていった。

条件が厳しくなると、売り物にならないネズミが生じてくる。仲買人のOさんは、飼育農家の目のまえで、ネズミの不良を選別してから買っていった。不良のネズミは豚の餌になった。選別しているOさんを見る農家の視線は厳しかった。こうなると農家から恨まれるようになり、Oさんはいやになった。

四〇六部隊の需要が途絶えたうえ、こうやかましくなっては、「埼玉のネズミ」は農家の副業から離れていかざるをえなかった。

□四〇六部隊に「切られた」埼玉のネズミ

ここに一冊の本がある。『六匹のマウスから』という本で、著者は野村達次という人物である。

もし日本実験動物史という本が編まれたなら、一章が田中一郎、そして二章は野村達次が主人公になるにちがいない。この本の副題は「〈私史〉日本の実験動物・45年」。野村氏の半生がそのまま新時代の実験動物の歴史になっているわけだ。野村氏はまず「それまでの実験動物の状況」すなわち埼玉のネズミを徹底的に批判する。ある意味で、野村氏は埼玉からネズミを奪った張本人だった。

「実験動物というのはその当時農家の副業として作られていた。ちょうどニワトリやウサギを飼うのと同じように、いたって粗放な飼い方で作られたものが、研究所や大学に供給されていた。〝白いマウス〟がほしいといえば、動物ブローカーが農家を訪ねて回って、白い毛のマウスを集めてくる。そのマウスの目方もマチマチであった。目方がほぼそろったマウスがほしいというのは、そのころは、むしろ厳しい要求であった。これでは、実験材料としての品質の均一性を欠き、厳密な実験結果が得られるはずがない。実験動物としての、氏素性——遺伝的背景——がまず分からない。(中略)これでは実験材料としてきわめてお粗末といわねばならない」

野村氏が創設した「実験動物中央研究所」は、現在遺伝子学的にも世界トップ水準の実験動物を生産している。だが野村氏が「実験動物近代化運動」と呼んだ、その道程は平坦ではなかった。一九五二年、野村氏がネズミを販売しはじめたとき、埼玉のネズミが一五円だったのに対し、野村氏のは六〇円にもなった。暖房をつけたり、固形飼料の製造設備も設けたので、農家の副業な

みの値段ではとても作れない。この高いマウスを売りさばきに、野村氏は研究所を訪ね歩いた。だが当時まだ実験動物は質より量の時代で、販路はなかなか開かなかった。

この苦境を救ったのが、なんと四〇六部隊だった。五五年四〇六部隊は野村氏の高水準のマウスに着目し、年間六万匹の契約をする。そういえば朝鮮戦争時に、五〇万匹のマウスを埼玉に要求してきた四〇六部隊も、このころから需要が減ってきたばかりか、固形飼料や重量の均一性の要求が高まり、飼育農家が対応に困っていた時期である。四〇六部隊は朝鮮戦争も終わり、細菌戦用の大量需要から、研究用の高品質のネズミに要求が変化したのであろうか。こうした事情を背景に、埼玉のネズミは「切られて」いき、野村氏の時代へ移っていった。

「この研究所(四〇六部隊・引用者注)でも、当時、日本の品質の悪い実験動物には困り果てていた。それだけに、野村たちの持ち込んだ質の良い動物は格別に喜ばれる。(中略)そんな米軍第四〇六医学総合研究所から、総額二万ドル、当時の円ルート(一ドル三六〇円)では七二〇万円もの大量発注の話が舞い込んだのが一九五五年(昭30)の暮のころだった。年間六万匹のマウスと、年間一二トンの固形飼料を供給してほしいという要請である」

こうして野村氏は、一九六三年には年間二五〇万の全国総生産量のうち、一〇%の二五万匹を生産するまでになる。このころはもう完全に、ネズミ生産の「主役」は野村氏に移っていた。四〇六部隊以外の研究所も、高品質のネズミを望むようになり、無菌飼育は当然の条件となった。

私たちは野村氏に手紙を出した。野村氏は、田中一郎をよく知っていたが、「もっと詳しい人物」として予研のA氏を紹介してくれた。

私たちはさっそくA氏を訪ねた。A氏も田中についてはよく知っていた。予研の任務はワクチンの治療血清の試験なので、検査に使う実験動物は高い品質が求められた。だから日本の実験動物は、予研と野村氏のスタッフがパイオニアだった。予研も初めは埼玉のネズミを使っていたが、だんだん「春日部のネズミはよくない」という声が上がってきた。A氏もしばしば春日部に行き飼育の指導をしたが、とうとう春日部は農家の副業の世界から脱皮できなかった。当時ネズミは売れていたので、田中は予研の面倒な要望に応えなくてもいいと思っていたようだ。

また、やはり野村氏から紹介された別の人に取材した。その人によれば、ある会議でその人がネズミの品質について問題にしたとき、同席していた田中に「我々がどんなに苦労して、これまでネズミを供給してきたか、若造には分かるまい」と一喝されたのが、くやしかった思い出として残っているという。

「実験動物近代化運動」への変化を、埼玉も黙って見ていたわけでない。田中は日本実験動物綜合研究所のなかにより高度な研究室を開設し、DM系およびDD系の純粋マウスの生産に挑戦している。研究員を雇い、無菌飼育も始め、四〇六部隊や予研の指導も受けた。その研究は一定の評価を得たが、結局医学者のスタッフからなる野村氏の研究所には及ばなかった。

◘ネズミ研究は七三一部隊から始まった

このように、医学にとって実験動物はきわめて重要であり、現在では、「実験動物学」とも呼べるジャンルが成立している。ところで史上まれに見る大量の実験動物を「消費」した七三一部隊は、この「実験動物学」においても優れていた。『六匹のマウス』を読むうち、私たちは野村氏の「実験動物中央研究所」と七三一部隊の意外なつながりに気がついた。戦後の実験動物の歴史を、七三一部隊の影が色濃く覆っていたのである。

野村氏に実験動物を勧めたのは、田嶋嘉雄と安東洪次の二名。戦後日本の実験動物の幕を開けたのはこの二人で、野村氏をはじめ実験動物研究会のスタッフのほとんどが二人の弟子だった。安東は七三一部隊大連支部（大連衛生研究所）の支部長で、『悪魔の飽食』にも登場する人物。田嶋も満州大陸科学院奉天獣疫研究所の細菌学の研究をし、実験動物にも関与していた。戦後、安東は伝染病研究所の第五細菌研究部長、田嶋は予防衛生研究所の獣疫部長に就任し、弟子たちを実験動物の「近代化」に従事させることになる。

『トンプソンレポート』（一九四六年五月、米軍アーヴォ・T・トンプソンによって作成された七三一部隊員の調査報告書）の七三一部隊の「研究項目」のなかには「1、ハツカネズミ繁殖の研究　2、ネズミ繁殖の研究　3、モルモット繁殖の研究」があり、効率的な繁殖が研究テーマだったことが

分かる。「繁殖」のためのノウハウはネズミ飼育にとって重要である。だが、七三一部隊のネズミ研究の成果で、それ以上に実績のあったのが系統研究だった。たとえばペストネズミには何が適するのか。血清を取るには何が適するか。用途によってネズミの種類は異なっている。

ネズミには、特定の病気(たとえばペスト)にかかりやすい系統、ガンが植え付けやすい系統、薬が効きやすい系統などそれぞれ特長的な系統がある。この系統を安定させるために交配をくり返すのが系統研究である。七三一部隊のネズミ研究の中心テーマに「ネズミの品種改良」がある。それは実験や細菌戦の効率化のために、ネズミ自体を作ってしまおうという系統研究だった。この発想は現代の「実験動物学」の先駆的な意味をもつ。それは当時の内地のネズミ研究がとうてい及ばない水準だった。とくに大連支部では、秦佐八郎(北里研究所)が持ってきたドイツマウス(dd)の自家生産を行い、系統維持を成功させている。七三一部隊は日本のネズミ研究の幕開けの役割も果たしていた。

『六匹のマウス』にはこんな下りがある。

「大連の研究所では、日本内地の研究機関より、ずっと良質の実験動物を、ふんだんに使っていた。そこでは、マウス、ラット、モルモット、ウサギなどが大量に自家繁殖されていた(最盛期には月産六〇〇〇匹のマウスが生産されていた)。そんな研究環境になじんできただけに、戦後の日本での実験動物の貧困さは、安東にも深刻に受け止められた」

安東が指揮する七三一部隊大連支部が、当時質的に最高級の実験動物生産施設を持っていたことがうかがえる文章である。野村氏はこの安東の依頼で実験動物の道に進んだ。「実験動物の近代化運動」とは、ある段階までは七三一部隊の水準に追いつくことを意味していた。野村氏の実験動物中央研究所と実験動物研究会の周辺には、数多くの七三一部隊関係者が集結していた。野村氏の実験動物中央研究所と実験動物研究会の周辺には、数多くの七三一部隊関係者が集結していく。たとえば「ペスト遺体解剖世界記録保持者」の岡本耕造、彼は戦後SHRという高血圧病のラットを作成し、実験動物の分野でも活躍している。また多数の弟子たちを七三一部隊に送り込み、人体実験にも関与させたという防疫研究室の嘱託研究者だった小島三郎は、実験動物中央研究所の評議員となっている。ほかにも細谷省吾、小林六造、牛場大蔵などの名が連なる。

実験動物中央研究所が引き継いだのは七三一部隊の人脈だけではない。ネズミ飼育のノウハウや研究成果も継承された。たとえば、実験動物中央研究所が開発し、埼玉の飼育農家たちを悩ませた「固形飼料」は、すでに七三一部隊大連支部で研究されていた。「内地」で固形飼料が普及するのが六〇年代なのを考えると、七三一部隊の先見性に改めて驚かされる。また、戦後日本で重要な役割を果たしたネズミの系統には大連から運ばれたものが多い。現在、アメリカで主流となっているスナネズミは、春日忠善(戦後、北里大学教授)が、大連で使っていたもの。春日部の田中一郎が研究したDD系も大連から来た系統だった。実験動物中央研究所の建物にはいまも「ネズミ返し」がある。これも七三一部隊の専売特許だった。現在では、「ネズミ返し」はすべての動

物施設で付けることが義務づけられている。

考えてみれば、埼玉のネズミは滑稽だった。七三一部隊の需要で巨大化したのに、七三一部隊を継承する実験動物中央研究所によって首を切られたわけだから。だが実験動物中央研究所が旧七三一部隊員たちによって組織されたのは、それなりの必然性があった。安東と田嶋の「実験動物研究会」の誕生が一九五一年、それを受けて野村氏が実験動物中央研究所を創設するのが一九五二年、朝鮮戦争の最中である。当時、四〇六部隊、予防衛生研究所、伝染病研究所など、ネズミを必要とする機関は旧七三一部隊員で占められていた。彼らは自分たちの言いなりになる実験動物の供給源が欲しかった。春日部の田中一郎は学術的な要求に対応できないだけでなく、人格的にも彼らの思いどおりになるタイプではなかった。こうして作られた、実験動物中央研究所は、「旧七三一部隊員機関ネットワーク」の繋(つな)ぎ目のような役割を果たしていく。「ネズミの歴史はいつまでたっても七三一部隊と離れられないですね」と、生徒は驚きを禁じえないようすだった。

ところで、「埼玉のネズミ」はどうなっただろう。田中の死後、何人かの仲買人が独立し、いまもネズミ飼育が行われていることはすでに述べた。野村氏の高価なネズミを必要としない実験もあるから、農家の副業も完全に消滅したわけではない。しかし、一時のような「どこの家でも飼っていた」ような状況はもはやなく、農家の庭先には空の飼育箱が虚しく投げ捨てられている。

だが、戦前のネズミ飼育から出発して、ちゃんとした専業者に脱皮した人もいる。庄和町のあ

るネズミ飼育専業者を訪ねた。飼育場は完全に密封されており、私たちはチラッと中を見せていただいただけで、入れてはもらえなかった。入り口には「立入禁止」の文字があり、働いている人は白衣を着ていた。ここは無菌状態で衛生的だった。農家の副業とは程遠い、研究所のような雰囲気だ。「何の種類ですか」と聞くと、「スナネズミ」という答えが返ってきた。「スナネズミ」は前述のとおり、七三一部隊の大連支部から運ばれてきたネズミである。七三一部隊の歴史とはとうに縁を切ったと思っていた「埼玉のネズミ」が、こんな形でまだその影を引きずっていることに、私は奇妙な気持ちを感ぜずにはおれなかった。

安東洪次はあるとき、「私が実験動物の仕事をするのは中国への懺悔(ざんげ)なんだよ」とポツリと言ったそうである。この言葉は「すぐれた実験動物が誕生すれば、人間を『マルタ』に使わなくてもすむようになる」という彼なりの言い訳であろうか。すでに亡い彼にその真意を聞く術(すべ)はない。

参考文献

森村誠一『悪魔の飽食「関東軍細菌戦部隊」恐怖の全貌！』光文社　一九八一年
森村誠一『〈悪魔の飽食〉ノート』晩聲社　一九八二年
森村誠一『続・悪魔の飽食「関東軍細菌戦部隊」謎の戦後史』光文社　一九八二年
森村誠一『悪魔の飽食　第三部』角川書店　一九八三年
森村誠一『ノーモア〈悪魔の飽食〉』晩聲社　一九八四年
常石敬一編訳『標的・イシイ　七三一部隊と米軍諜略活動』大月書店　一九八四年
木下健蔵『消された秘密戦研究所』信濃毎日新聞社　一九九四年
川崎市中原平和教育学級編『私の街から戦争が見えた——謀略秘密基地登戸研究所の謎を追う』教育史料出版会　一九八九年
滝谷二郎『殺戮工廠・細菌戦部隊——関東軍第七三一部隊』海鳴社　一九八八年
早乙女勝元『母と子でみるハルビンからの手紙　日本は中国で何をしたか　Ⅲ』草の根出版会　一九九〇年
森村誠一編『裁かれた七三一部隊』晩聲社　一九九〇年
長野・赤穂高校平和ゼミナール／神奈川・法政二高平和研究会『高校生が追う陸軍登戸研究所』教育史料出版会　一九九一年
吉見義明『七三一部隊と天皇・陸軍中央』岩波書店　一九九六年
歴史教育者協議会『幻ではなかった本土決戦』高文研　一九九五年

森正孝ほか編『細菌戦・人体実験』『中国側史料　日本の中国侵略』　明石書店　一九九一年
常石敬一『〔増補版〕消えた細菌戦部隊――関東軍第七三一部隊』　海鳴社　一九八九年
竹花香逸『ノミと鼠とペスト菌を見てきた話――ある若者の従軍記』　自費出版　一九九一年
韓暁、山辺悠喜子訳『七三一部隊の犯罪――中国人民は告発する』　三一書房　一九九三年
西野留美子『七三一部隊のはなし――十代のあなたへのメッセージ』　明石書店　一九九四年
日韓関係を記録する会『資料・細菌戦』　晩聲社　一九七九年
常石敬一『医学者たちの組織犯罪』　朝日新聞社　一九九四年
常石敬一『七三一部隊』　講談社　一九九五年
野村達次・飯沼和正『六匹のマウスから』　講談社　一九九一年
広河隆一『エイズからの告発』　徳間書店　一九九二年
松村高夫編『〈論争〉731部隊』　晩聲社　一九九四年
江田憲治ほか編訳『証言　生体解剖』　同文舘出版　一九九一年
江田憲治ほか編訳『証言　人体実験』　同文舘出版　一九九一年
江田いづみほか編訳『証言　細菌作戦』　同文舘出版　一九九二年
安東洪次・田嶋嘉雄編『動物実験法』　朝倉書店　一九五六年
田中明・松村高夫編『七三一部隊作成資料』　不二出版　一九九一年
完全復刻『公判記録　七三一細菌戦部隊』　不二出版　一九八二年
庄和高校地理歴史研究部『南桜井村戦後史』　自費出版　一九八九年
庄和高校地理歴史研究部『ネズミと戦争』　自費出版　一九九五年

おわりに

生徒は靖(チン)さんと一つの約束をした。「七三一部隊の真実を人々に伝える」という約束。いま、生徒は「歴史を調べるだけではダメなんだ、それをみんなに伝えなければ靖さんとの約束は守れない」と思い始めている。

中国から帰るとすぐ、生徒は学校に泊まり込んで、九五年一〇月、三三〇ページに及ぶ報告書『ネズミと戦争』を完成させた。ワープロ打ちはもちろん、版下まで手作りの報告書だ。真実を同世代の若者に知ってほしい。ネズミの歴史を地域の元飼育者に伝えたい。報告書作りはその一歩だった。

それから生徒は積極的に発表を行った。全国母親大会で、藤谷は三〇〇〇人のお母さんたちを前にした。藤谷は靖さんの半生を話した。お母さんたちはその一言ひとことに聞き入った。発表が終わり、緊張から解放されたときの笑顔が忘れられない。藤谷は訴えることの大切さを感じ始めた。その後、地方の母親大会からもお呼びがかかるようになる。

東京都立青年の家が主催したアジアフォーラムでは、藤谷と桑名が二時間にわたる発表をした。参加者のほとんどが二〇歳前後の若者で、高校生もいた。午後のディスカッションでは「飼育農民に罪はあるか」というテーマのディベートになった。まるで飼育者を被告にした、模擬裁判のようだった。若者の議論では「罪がある」派が押していた。私たちがじっくり考えてきたテーマを、見知らぬ若者が熱っぽく語っている光景はどこか奇妙だった。だがいままで遠慮がちに扱ってきた問題が、ズバズバ議論されるなかで生徒は鍛えられたようだ。

歴史教育者協議会埼玉大会や埼玉県教職員組合の集会にも招かれた。藤谷、阿部、桑名のトリオが発表。普段は「教えられる立場」の生徒が、この日だけは先生たちに「講義」をした。内容は一部スライド、二部まじめな歴史研究、三部苦労話という三部構成を編み出し、以後この形が定着する。先生たちを前に「なぜ加害の歴史を学校で教えないのですか」とハッパをかけた。翌日の新聞の見出しは「高校生の元気、受け取った」というものだった。

市民団体の力で、フォーク歌手の小室等さんとの共演も実現した。戦後五〇年の地元の平和集会で、小室さんは自作の平和の歌を、生徒は地域の歴史としてネズミの話をした。桑名の大きな声がよく響いた。藤谷は、土壇場で聴衆に合わせて内容を変える余裕をみせた。「高校生のおかげで、地元でやる意味が見えた」と主催者の村田恵子さんに言われたとき、桑名は少し誇らしい顔をした。報告書はあっという間に売り切れた。

地域の報告集会も行った。庄和町で平和運動を続ける加集静子さんが生徒の集会づくりの力になってくれた。町の教育委員会も後援になった。「飼育者だった方々、来てください」と生徒は呼びかけた。集会では「うちも飼っていた。こんな恐ろしいことに使われていたとは知らなかった」という発言が続いた。徐々にではあるが、生徒の活動は町のなかで市民権を得てきている。

文化祭の発表では、地域の大人が二〇〇人も学校の展示室に押し寄せた。ビデオコーナーは立ち見の人で溢れ、生徒は見学者への説明でてんてこ舞いになった。一九九六年八月二日〜四日には高校生の主催としては全国初の「七三一部隊展ｉｎ春日部」を市民文化会館で予定している。本書が刊行されるころ、おそらく生徒はその準備で大忙しだろう。共感される方はぜひご来館をお願いしたい。

学校内での一般生徒対象の発表も行った。九五年七月、中国行きの直前、平和教育集会で藤谷と阿部が報告し「これから中国に行きます」と結んだ。学内の生徒から、二人は大きな拍手を受けた。いつも地味な地歴部員もこの日ばかりは違った。校長からもらえなかった励ましを、二人は同世代の学友たちから受けた。帰国後、湯浅謙さんを招待し、報告の平和集会も行う。

発表を重ねるにつれ生徒は成長した。もともとしゃべり下手の小谷中は、いまでもやっぱりしゃべり下手だが、その鈍臭さがかえって共感を呼んでいる。野沢は入部当時、何もしゃべれないのかと思うほど極端な無口だった。無数の聞き取りと発表活動が野沢を変身させた。私は何度、

野沢の鋭い意見にハッとさせられたことだろう。発表でがんばったのは圧倒的に藤谷である。ほとんどすべての集会に藤谷は参加した。藤谷と阿部のコンビは、ときには学者のように、ときには普通の高校生のように、そしてときには漫才師のように発表を組み立てた。彼らは都合二〇回の発表を行った。もう私の助言は必要なくなっていた。

だがマスコミが取り上げ、簡単に美談になってしまうと、私は少し怖くなってきた。「平和な世界を作りましょう」と集会で生徒が言うのを聞いて、寒気がした覚えがある。自ら「平和の使者」を名乗る使者がいるだろうか。私は自分の高校時代を思い出す。当時マスコミは高校生に冷たかった。高校生の運動は新聞に叩かれ、加害の研究をしても見向きもされなかった。当時の私はそれが当たり前だと思っていた。生徒はホメラれて、ウワスベリしはしないか。

いや、きっと自らの家族と地域が加担者だったという思いが、このウワスベリを止めるだろう。生徒にとってこの調査は自分自身の生き方を問うことだった。藤谷は将来、教師になってこの体験を伝えるそうだ。野沢は史学科に進んだ。英語が嫌いな彼は、国語と社会だけで受験を突破した。一〇月まで受験生を引っ張りまわしていた私は、野沢の合格にホッとした。小谷中には推薦をすすめたが、希望の学部ではないので断られた。「入れればなんでもいいじゃないか」という私の言葉には説得力がなかった。現在猛勉強中である。

本書で私たちは、七三一部隊、四〇六部隊、各細菌戦部隊、田中一郎(仮名)、ネズミ屋たち、六

〇〇〇人の農民、靖さん、そして私たち自身にとって白ネズミとは何だったのかを見てきた。一見迂遠な方法に見えるが、これは地域に住む私たち自身の戦争の問題だった。おそらく中央の学者は、片田舎のネズミ生産などに興味を示さないだろう。だが七三一部隊の需要は、私たちの地域を揺さぶり、六〇〇〇人の農家の生活に歪みや変容を与えてきた。私たちの研究は、地域から中央を逆照射していく作業だった。地域からのこうした報告は、七三一部隊そのものの捉え方をも深めていくだろう。それが若い高校生の手でなされたのは、教師としての私の誇りである。

集会での発表活動を続ける生徒に、多くの元七三一部隊員、研究者、地域の人々からの激励の手紙が届いている。「若者への期待」がほとんどだ。生徒はいま、「このことを伝えられるのはボクたちだけなんだ」と言い切っている。ふり返ってみれば、当初、私はこのテーマは高校生にふさわしくないと思っていた。だがやってみて、これこそ高校生が取り組むべき課題だったことがよく分かった。生徒は、戦争の加害者、被害者、証言を拒む人、する人、研究を妨害する人、励ます人、さまざまな人と出会った。その格闘のなかで成長し、真実をつかもうとしてきた。それは何物にも代えがたい「勉強の場」だった。そこで生徒は、地域に生き、アジアに生きるためのステップを踏んだのである。

本書を作製するにあたってたくさんの人のお世話になった。このテーマの「発見者」である田口新吉氏。七三一部隊の歴史を生徒に教えてくれた証言者の天野良治氏。このテーマに入るきっ

かけと本質的な意義を示してくれた関口竜一氏。本書の内容から構成まで相談にのってくれた渡辺賢二氏。中国で、そして帰国してからも中国との連絡でお世話になった山邊悠喜子さん。たくさんの証言者を紹介してもらった西野留美子さん。私たちの活動を書物にしてくれたばかりでなく、適確な助言者でもあった教育史料出版の橋田常俊氏。数えあげればキリがないほど、私たちにはお礼すべき人々がいる。口述筆記ならぬ口述ワープロ(?)をしてくれ、文章表現の「指導」までしてもらった元国語教師の遠藤幸枝子さん(私の女房)にもお礼せねばなるまい。そして最後に私は、私一個人として、すばらしい体験を与えてくれた庄和高校地歴部の生徒諸君に感謝したい。

一九九六年六月

遠藤光司

埼玉県立庄和高校地理歴史研究部
〒344-01 埼玉県北葛飾郡庄和町金崎583
電話 048(746)7111／FAX. 048(718)1100

遠藤光司(えんどう　みつし)
1956年生まれ、明治大学卒
1985年庄和高校社会科教諭・地歴部顧問
庄和町文化財保護委員会・庄和町郷土史会・
歴史教育者協議会庄和支部所属

高校生が追うネズミ村と七三一部隊

1996年7月5日　第1刷発行©
1996年10月30日　第2刷発行

著者　埼玉県立庄和高校地理歴史研究部
＋遠藤光司
発行者　橋田常俊
発行　株式会社教育史料出版会
〒101 東京都千代田区三崎町1-2-2
☎03(3291)3571　FAX.03(3291)3572
郵便振替00120-2-79022

印刷　埼玉福祉会／平河工業社
製本　三森製本

定価はカバーに表示してあります。
落丁・乱丁本はお取りかえいたします。

ISBN4-87652-297-9 C0036

大東　仁●仏教の戦争責任を問う
お寺の鐘は鳴らなかった
B 6 並製・205 頁・1751 円
「兵戈無用」――宗祖親鸞の教えに背き、積極的に大戦への道を歩んだ真宗教団の戦争協力過程を史実に基づいて明らかにし、宗教者の戦争責任を考える。

中沢啓治
「はだしのゲン」自伝
B 6 並製・228 頁・1545 円
マンガ「はだしのゲン」は著者自身の物語。7 歳で被曝、廃墟の街で生きぬいた著者が、『ゲン』を生み出すまでを核と戦争への怒りをこめて赤裸に綴る。

中沢啓治編●ゲン！僕たちは君を忘れない
はだしのゲンへの手紙
B 6 並製・223 頁・1236 円
一万通余りの手紙・感想文の中から100篇をえらび、「ゲンからの返書」を添えて編む、全国の小・中・高校生達の戦争、核への怒りと平和への祈り。

「週刊朝日」編集部編
戦争をどう教えるか
B 6 並製・240 頁・1442 円
各界著名人による座談会「学校に日の丸・君が代は必要か」「戦争をどう教えるか」と、寄せられた投書を中心に、若い世代に戦争をどう教えるべきかを考える。

渡辺賢二・有田芳生
天皇をどう教えるか
B 6 並製・272 頁・1442 円
現場教師の教育実践とジャーナリストの旺盛な取材で、戦争責任・沖縄・教科書問題等を展開する〝天皇〟に関する授業論。資料多数収録。

歴教協編●第二次大戦下のフランスのレジスタンスと日本の反戦運動
抵抗をどう教えるか
A 5 並製・237 頁・2575 円
パリ解放40周年で「ユマニテ」が手記を募集・編纂した「知られざるレジスタンスの人びと」を翻訳。現場での教育実践と日本の抵抗運動の資料も収録。

清水　保
ボクの戦争
B 6 並製・192 頁・1442 円
虚弱児ゆえに「非国民」と呼ばれ学童疎開に行けなかったボク。天皇陛下のために死ぬことが夢だったボクは、終戦後、「少年戦犯」と呼ばれていた――

川崎市中原平和教育学級編
私の街から戦争が見えた
B 6 並製・250 頁・1339 円
地域の戦争遺跡の調査・研究をすすめる市民達が、ほりおこしのなかで165点の文書類を発見、謀略秘密基地としての登戸研究所の謎にせまる。

神奈川：法政二高平和研究会・長野：赤穂高校平和ゼミ編
高校生が追う陸軍登戸研究所
B 6 並製・256 頁・1648 円
敗戦直前、川崎市登戸から長野県・駒ヶ根に疎開した謀略秘密基地。地元の高校生たちが、互いの調査と交流を通して、その実像に迫る！

宮下与兵衛編
高校生が追う戦争の真相
B 6 並製・240 頁・1442 円
風船爆弾、七三一部隊、満州開拓移民、朝鮮人による地下飛行場づくり、伊那谷での米軍機超低空飛行訓練など、高校生が調査・追求し、戦争を語りつぐ。

黒田　清編●講座・戦争と差別を考える
90 年代を生きるために
B 6 並製・264 頁・1339 円
戦争と差別のない21世紀を迎えるため、90年代をどう生きるかをメッセージ。
▷栗原玲児・本田靖春・木村　崑・辺見じゅん・康　宗憲氏等11名著。

平和マップづくり実行委員会
平和ウォーキングマップ・川崎
A 5 並製・128 頁・1339 円
川崎市 7 区の市民達が掘りおこした戦争遺跡を写真・図版で解説。小学生から大人まで歩いて学ぶ散策モデルコースとマップ付。私の街から平和を創る。

越　定男●第七三一部隊員告白記
日の丸は紅い泪に
四六並製・196 頁・1236 円

遺骨を発掘し追悼する会編●関東大震災・朝鮮人虐殺から70年
風よ 鳳仙花の歌をはこべ
B 6 並製・232 頁・1854 円

久保　武・西村秀明●思春期精神保健活動からの報告

不登校の再検討

Ｂ６並製・272頁・1751円

これまでの専門家の不登校観を反省し原点から捉えなおす本。不登校の子どもへの正しい理解と支援のあり方を模索する山口県精神保健センターの実践。

登校拒否を考える各地の会ネットワーク編●それぞれの体験と交流

不登校を生きる

Ｂ６並製・228頁・1442円

親たちの体験交流／登校拒否Ｑ＆Ａ／子どもたちは主張する／遠藤豊吉、渡辺位、土師政雄、中沢淳、奥地圭子氏によるシンポジウム収録。

「東京シューレ」の子どもたち編

学校に行かない僕から学校に行かない君へ

Ｂ６並製・256頁・1442円

学校に行かないのはどうしてか？ 本当の自由って何？ 管理と強制にサヨナラした14人の子どもたちがおくる真摯で痛快なメッセージ。

奥地圭子●学校の外で生きる子どもたち

東京シューレ物語

Ｂ６並製・308頁・1648円

東京の下町に、学校外の学びと交流の場をつくって５年。自由と自治の意味を模索しつつ成長する子どもたち。その試行錯誤の日々をつづる感動の手記。

奥地圭子●私の体験的登校拒否論

登校拒否は病気じゃない

Ｂ６並製・272頁・1442円

登校拒否は治療の対象ではない！ 登校拒否は病気という声に対し、親・教師として自らの体験を通し反証、問題の本質と子どもたちの生き方を考える。

登校拒否を考える会編●登校拒否――新しい生き方の発見

学校に行かない子どもたち

Ｂ６並製・288頁・1545円

子どもが学校へ行かなくなったらどうするか。本書は、親・医者・教師が子どもの気持ちに寄りそい、子どもとどうかかわるかを考える。

鈴木康久他●登校拒否児が書いた青春記

ぼくたちの朝

Ｂ６並製・240頁・1339円

ぼくの問題は、ぼくが話す。ぼくの言葉で――なぜ学校に行けなかったのかを。青春が遠のく不安や焦りはあったけど、“明けない夜”はないのさ。

藤井誠二編●高校生が書いた愛知の管理教育批判

オイこら！ 学校

Ｂ６変型・208頁・1133円

愛知の暴力的管理教育の犠牲者が、ついに正義のペンをとって立ち上がった。教育の右傾化に抗して叫ぶ、３人の高校生のレポート。

松崎運之助●夜間中学界隈

青　春

Ｂ６並製・208頁・1339円

教育のひずみを一身に背おう若者たちが集まる下町の夜間中学。この学校には、悲しみを優しさに、怒りを強さに変える不思議な魔法の力がある。

太田知恵子●中国帰国者たちの教室

雨ふりお月さん

四六並製・224頁・1133円

私に日本語を下さい――その生徒たちの瞳を背に感じながら教壇に立つ新任の女教師。夜間中学に毎晩集まる帰国者たち。彼らは生きるために学ぶ。

藤井誠二

少年の街

Ｂ６並製・224頁・1442円

残虐の度合いを増しながら続発する少年事件の数々。東京・足立区のコンクリート殺人を核にしながら「事件」の街の少年たちの心と風景を描く。

北星学園余市高等学校編

やりなおさないか君らしさのままで

Ｂ６並製・293頁・1545円

日本で初めて高校中退生・不登校生を受け入れた北の学園――ここには本物の人間教育がある！熱く、深く、真摯に、40人の生徒・父母・教師が綴る。

戸田金一●北方教育の魂 加藤周四郎物語

真実の先生

Ｂ６並製・242頁・1854円

「ほんとうの生活を見ろ、それが教育のスタートだ」。加藤の生活綴方実践と治安維持法違反裁判の過程を明らかにする。今日の教育を切り拓くために。